

博士論文

要介護高齢者における Generativity の概念分析,
及び自己の存在価値を支援する看護ケアモデルの検討

平成 27 年度

広島文化学園大学大学院看護学研究科
看護学専攻 臨床看護学分野 高齢者看護学領域

讃井真理

広島文化学園大学

広島文化学園大学大学院看護学研究科
博士（看護学）学位論文

要介護高齢者における Generativity の概念分析,
及び自己の存在価値を支援する看護ケアモデルの検討

Concept Analysis of Generativity in Elderly Individuals Requiring
Long-Term Care, and Investigation of a Nursing Care Support Model to
Support a Sense of Self-Worth

平成 27 年度
(平成 24 年度入学)

看護学専攻・臨床看護学分野・高齢者看護学領域
学生番号：n2120001n 氏名：讃井真理

目 次

論文要旨

| | |
|---|----|
| 第 1 章 序論 | 3 |
| 第 1 節 本研究の動機と背景 | 5 |
| 第 2 節 中年期、及び老年期の Generativity に関する研究背景 | 8 |
| 第 1 項 中年期の Generativity の理論的背景、及び研究の動向 | 8 |
| 第 2 項 老年期の Generativity の理論的背景、及び研究の動向 | 10 |
| 引用文献 | 12 |
| 第 2 章 研究の概念枠組みと構成、及び目的 | 16 |
| 第 1 節 本研究の概念枠組みと構成 | 16 |
| 第 2 節 本研究の目的と意義 | 17 |
| 第 1 項 本研究の目的 | |
| 第 2 項 期待される成果 | |
| 第 3 項 学術的意義 | |
| 第 4 項 社会的意義 | |
| 第 3 節 本研究における Generativity の概念規定 | 20 |
| 引用文献 | |
| 第 3 章 本研究における倫理的配慮 | 22 |
| 第 4 章 我が国における Generativity に関する文献的検討 | 24 |
| 第 1 節 研究目的 | 24 |
| 第 2 節 方法 | 24 |
| 第 3 節 結果 | 24 |
| 第 4 節 考察 | 25 |
| 第 5 節 第 4 章のまとめ | 25 |
| 引用文献 | |
| 第 5 章 地域高齢者の Generativity における関心の概念検討、 及び Generativity における関心と心理社会的要因との関連 | 42 |
| 第 1 節 研究目的 | 42 |
| 第 2 節 方法 | 43 |
| 第 3 節 結果 | 45 |
| 第 4 節 考察 | 54 |
| 第 5 節 第 5 章のまとめ | 58 |
| 引用文献 | 60 |
| 第 6 章 要介護高齢者の Generativity における関心の概念検討、 及び Generativity における関心と心理社会的要因との関連 | 63 |
| 第 1 節 研究目的 | 63 |
| 第 2 節 方法 | 63 |
| 第 3 節 結果 | 65 |
| 第 4 節 考察 | 70 |

| | |
|--|------------|
| 第5節 第6章のまとめ | 74 |
| 引用文献 | 75 |
| 第7章 Generativityを踏まえた Narrative Approach による 要介護高齢者への看護介入, 及び看護ケアモデルの検討 | 77 |
| 第1節 研究目的 | 77 |
| 第2節 方法 | 78 |
| 第3節 結果 | 79 |
| 第1項 対象者の概要と抽出されたコアカテゴリー | 79 |
| 第2項 Generativity 的視点にたった要介護高齢者の自己の存在価値を 支援する看護ケアモデルの検討 | 88 |
| 第4節 考察 | 89 |
| 第5節 第7章のまとめ | 92 |
| 引用文献 | 93 |
| 第8章 全体考察 | 95 |
| 第1節 第5・6・7章を踏まえた全体考察 | |
| 第1項 地域高齢者と要介護高齢者の Generativity への関心の発現 | 95 |
| 第2項 量的研究と質的研究における要介護高齢者の Generativity の発現 | 96 |
| 第3項 要介護高齢者に対する Generativity を用いた Narrative approach を踏 まえた看護介入の意義 | 97 |
| 第2節 Generativity 的視点にたった要介護高齢者の自己の存在価値を支援する 看護ケアモデルの有用性 | 98 |
| 第9章 今後の展望 | 99 |
| 第10章 最終結論 | 100 |
| 研究発表一覧 | 101 |
| 謝辞 | 102 |
| 資料 | |
| 第5章 研究依頼書等 (資料1) | 1 |
| 第6章 研究依頼書等 (資料2) | 2 |
| 第7章 研究依頼書等 (資料3) | 9 |
| 調査票一式 (資料4) | 16 |

第1章 序論

2015年8月にイギリスの医学雑誌が1990年～2013年までの各国の健康寿命（健康で自立して暮らすことのできる期間）を発表した。我が国の健康寿命は男性が71.11歳、女性が75.56歳であり、世界第1位であることが報告された。この結果は老年期において健康を維持しながら生活することが可能になってきたことを示す一方で、ライフサイクルの延長、つまり老年期の長期化を意味している。これまで国は平均寿命を伸ばすことに主眼を置いた政策を進めてきた結果、国民の健康状況を示す指標である平均寿命と健康寿命は世界でも類を見ない勢いで延伸した。そのため、それらの施策は十分な成果を上げていると言える。しかし、これまで急激に延伸してきた平均寿命に比べ、健康寿命の伸びはそれほど認められておらず、その差が広がってきているのも現状である。そして現在、介護の社会化が進められ、自宅や各種施設で療養生活を続ける高齢者も少なくない。しかし、そうした何らかの支援や介護が必要な状態で過ごす期間の長期化は、在宅介護継続の限界を示しているとも言える。今後、高齢者の増加によって要介護高齢者数が増加することは周知であり、高齢者数、介護認定者数の増加は介護難民・医療難民という言葉さえ生まれるほど、社会的に多くの課題を突き付けているのが我が国の現状であろう。

実際に、多くの高齢者施設では入所を待つ高齢者、いわゆる数年待ちの待機高齢者を多く抱え、また施設入所者には100歳に近い、あるいは、それを超える長寿者も少なくない。そうした施設で過ごす高齢者らは、家族や住み慣れた環境から離れ、自分らしく、そして他者から尊重されながら最期の時を過ごすことが難しい環境に存在していると感じることも少なくない。そのような中で、本研究（2007）は要介護高齢者の生き甲斐感を老年的超越性の視点から質的に検討した経験を持つ。その中で要介護高齢者は現在までの他者とのつながり、過去に世話され世話してきた経験を自己の肯定感にして生きる価値を見出していることを報告してきた。しかし、要介護高齢者自身が自己の価値を感じることができないケアの検討には至っていなかった。数多くの高齢者研究文献の中で **Generativity** の研究のアプローチは、まさに要介護高齢者の内面にアプローチし、ケアの在り方を論じるものであると確信した。我が国のような超高齢社会の現状において、高齢者が身体的に支援の必要な状態となった時にその年齢相応に『人間』としての価値を高齢者自身が感じられるような関わりを看護の視点で検討することも喫緊の課題となっていることも事実であろう。そのことは、老年期を過ごしている者にも、またこれから老年期を迎える者にも重要な課題であるとも言える。

このように、超高齢社会における高齢者の増加は社会的に多くの課題をもたらしているわけであるが、他方、経済的・身体的にも、また指導力や文化的存在としても、高齢期においてそれほど変化のない存在を維持し社会に貢献している高齢者層もみうけられる。すなわち、超高齢社会では高齢者も一様ではなく多様な存在として把握する必要があるだろう。多様な高齢者像の視点に立った「ネオ・ジェロントロジー」ともいうべき新しい研究が、我が国の様々な分野で始まっている（図1-1-1）。一人の人間が、個人として成長・発達し、成熟・衰退し、死を迎え一生を終える。祖父母は子等へ、子等は孫へと様々な資産、価値等を繋いでゆく。また、一人の人間は社会の発展や家族の成熟に貢献し、生を全うする。そもそも老いとは何なのか。健康・不健康を問わず高齢者が存在する意義はどこにあるの

か。社会構造全体における高齢者の役割を再確認し、高齢者の存在そのものを分析する必要がある。

そうした中で、本研究は長い人生を歩んできた高齢者の世代性（Generativity）に関して検討を進めるものである。Generativity（世代性）は、次世代を生み育て、はぐくみ、人生で得た経験を次世代に伝えていくという広い意味を持つ言葉で、近年、高齢者を対象とする学問領域で注目されている概念である。2042年に高齢者数のピークを迎え、特に後期高齢者率の上昇が予想される我が国にとって、高齢者を何らかの疾患を抱え、またそのリスクが高い人として捉えた社会を創造するのか、あるいは経験を積み英知を持つ人であり社会貢献の価値を持つ人と捉えて社会を構築するのかが問われている。これから追従してくる各国に先駆けて、新しい高齢社会モデルを創造することは、高齢社会の先端を行く我が国の責務ではないだろうか。

そして、看護はあらゆる健康レベルの人に対して、その人の健康と生活を支えることが責務である。特に高齢者看護は、長い人生から経験を積み重ねてきた人を対象としている。そのため、その人の健康上の問題だけではなく包括的・全人的に捉えて看護的方策を立てて対応することが求められる。Generativityという概念を高齢者看護に組み入れ、ライフステージの最終段階を迎えている人の英知を感じ、活用し、さらに次世代へ伝えていくことの意味を考えることは、高齢者ケアの質を高めることに繋がる。そして、そのことは高齢者看護教育の質を高めることに繋がると考える。すなわち、Generativityという概念を看護に浸透させることによって、高齢期を生きる人々（健康、不健康に関わらず）についてより深く理解することが可能となる。そして、老年期だからこそできる社会への貢献について検討することができる。また、これらのことは、次世代にとっても、より多面的な高齢者観の形成の一助となると思われる。さらに、そのことがより質の高い高齢者ケアの実践に繋がることが期待できる。

日本においての Generativity 研究は始まったばかりである。現在、海外においても Generativity の概念は、研究者それぞれが規定して調査や分析が行われている現状がある。そこで本研究では、まず高齢者の Generativity を規定する必要がある。そのため第1章と第2章で現在までの高齢者の Generativity 研究の経緯と、日本を中心とした高齢者の Generativity に関する先行研究を概観し、研究の構成と目的、概念規定について述べる。第3章では本研究における倫理的配慮について述べ、第4章では我が国における Generativity 研究の方向性を検討し、第5章・第6章は実証的研究として地域在住及び施設入所高齢者に対する調査研究について報告する。第7章は事例研究として、要介護高齢者に対する Narrative approach を用いた看護介入を実施し、Generativity 的視点から看護介入の有効性を検討する。また Generativity 的視点にたった要介護高齢者の自己の存在価値を支援する看護ケアモデルを検討する。第8章は、第5章から第7章を踏まえた全体考察を行うとともに、本研究で提示した看護ケアモデルの有用性について述べる。第9章は本研究の今後の展望について述べ、第10章で最終結論を提示する。

科学研究費

別表 4 特設分野研究

○平成 26 年度公募において設定する分野

(分野：ネオ・ジェロントロジーより抜粋)

現在、わが国は、65 歳以上人口の全人口に占める比率が 23%を超えており、世界一の超高齢社会の様相を呈している。日本が経験するこれからの社会は人類にとって未曾有であり、日本の抱える課題は、現在、世界の最先端に位置する。

エイジング（個人の加齢、社会の高齢化）に関する諸問題は、これまで老年学（ジェロントロジー）によって探究されてきた。しかし、65 歳以上を一律に高齢者、即ち、衰えていく者、としてとらえ、研究することには限界も指摘されている。高齢者の実態を調査すれば、経済的にも、生理的にも、指導力や文化的な存在としても、変わらず存在を維持している層と、社会的に弱い立場におかれ支援や援助を必要とする層など、いくつかの層に分かれることが様々な指標によって指摘されている。すなわち、高齢者も一様ではなく、極めて多様であるとの認識の上で行う基盤的研究である。また、これらの諸指標間の関連が単なる疑似相関なのか、因果関係を示すものなのか、個別に生じていることなのかといった点については、詳細な学術的検討が待たれる。

このように、多様な高齢者像の視点に立った「ネオ・ジェロントロジー」ともいうべき、新しい研究が、様々な分野で始まっている動向を捉え、本分野を設定した。

今後さらに進むことが確実視されている高齢者数の増加と社会の高齢化の現実人類が適応するためには、社会構造全体における高齢者の役割を再確認し、その再割り当てを含めて分析する必要があり、高齢者を含む社会の側の変容にも注目されるべきものがある。そもそも老いとは何なのかを思想的に問うことも必要である。たとえば、〈老い〉の豊かさや価値についての歴史的・思想的・比較文化的分析、蓄積された経験が大きな資産となる暗黙知の伝承の民俗学的・文化人類学的考察、海外の高齢化に関する国際比較的分析、平均値ではとらえることのできない〈老い〉の個体差に関する心理学的究明、寿命の延長にともなう男女のライフコースの変化や年齢役割の変化、さらには人間の終末としての死に対する態度に関する死生学的研究、今後の社会政策が前提とすべき高齢社会の構造に関する研究、高齢社会の新たな段階における倫理に関する研究など、また、医学や工学分野においても、多様な高齢者像の視点のもとで、これまでになく高齢の構造の解明を企図する他分野との連携に立った研究など、あらゆる分野からの研究課題を募集する。

図 1-1-1 文部科学省科学研究費平成 26 年度公募要領より抜粋

第 1 節 本研究の動機と背景

現在、我が国の高齢化率は 26.0%であり、2060 年には 39.9%と予想され 2.5 人に一人が高齢者になると推計されている(内閣府, 2015)。また平均寿命が 90 歳を超えるという更なる超高齢社会が目前に迫っている。そのため、延伸する老年期をいかに健康で心豊かに暮らすかは、個人にも社会にも重要な課題である。

これまで、高齢社会は高齢者が増加することによる弊害、すなわち高齢で慢性疾患や後遺症を持つ人々の増加(西村監修, 2011)や加齢による機能低下(日本老年医学会, 2008)など、負のイメージとして捉えられることが多く、これらの問題・課題に対する研究(河野, 1996; 鈴木, 1997, 2002; 佐田ら, 2009; 魚尾ら, 2011)・方策(厚生労働統計協会, 2015)が論じられてきた。また、疾病や障がい可能な限り予防する対策が多く取り上げられてきた(内閣府, 2015)。しかし高齢者の知能構造をみると、結晶性知能のように年を重ねることによってのみ発達・獲得していく機能もあり、高齢者は若者にはない「人生を歩んできた人」としての「質」や「英知」を持っている。高齢者の生きてきた意味や存在価値は、世代を引き継ぐ人々に対して人間が生きることを意味を示唆することにも繋がる。

高齢者がその人生を歩んできた人としての「質」・「英知」や、人間が生きることの「意味」を伝えることは、身体的・精神的に健康な高齢者ならば自らが能動的に行動し、自己

実現に向けて成長・発達し続け、他者との関係性を築いていくことも可能であろう。しかし、要支援、及び要介護状態の高齢者の場合、サポートを受ける側という立場に置かれ、人としての「質」や「英知」を活かす機会が徐々に喪失されていく。そのことは、自己存在のみならず生きることの意味を伝えることにおいて、高齢期の発達課題上、ネガティブな側面が強調される状況（統合＜絶望）（Erikson, E.H., 1997）にあると言え、自分自身の生き方を維持できないばかりか、人としての尊厳を守ることが難しくなっていく可能性を持つ。現在、我が国では各種の高齢者施設が存在しており、多くの要支援・要介護高齢者が入所している。動きたくても動けない身体状況にある高齢者は、施設という環境、限られた人間関係と援助関係等によって受け身的な生活となる。当然のことながら入所者の多くは自分らしい生活を維持することが難しくなり、活動や意欲が徐々に低下し、笑顔は乏しく、自らの自己選択や自己決定が不可能な生活となっているといっても過言ではない。それゆえ、施設における高齢者とかかわる看護は、身体的ケアの支援のみならず、高齢者自身が自己をどのように捉えているのかを知り、何を看護に求めているのかを深く考える必要がある。そのことが、高齢者の尊厳を守り自己の存在価値を感じさせ、さらには生活の満足感や幸福感を高めることに繋がる。

現在、要介護認定を受けている高齢者は 600 万人を超えており、今後さらに急速な増加が予想されている（内閣府，2015）。また、人間の寿命に関して平均寿命と健康寿命という区別がある。一般的に平均寿命とは何歳まで生きるかということを示し、健康寿命とは何歳まで健康で生活できるかを示しているが、その差は 9 年間～12 年間で徐々に広がりを見せている。これは誰しもが何らかの病気や障がいを抱えて過ごす可能性がある期間が長いことを示している。長寿社会においては、健康寿命をいかに長く保つかを追求するものであるが、この期間を 0 にすることには限界があり、高齢者研究領域としてサクセスフル・エイジング（柴田，2009；秋山，2012；山本，2011）や主観的幸福感の研究がなされている。そのため、病気を持っても、障がいを抱えても、それでも「人生を歩んでいる人」として把握し、いかにその人の生活の質（以後、QOL という）や尊厳を高めることに繋いでいくかがケア提供者に、そして看護に求められている。今後、増加することが確実となっている要介護高齢者が病気や障がいを抱えても「人生を歩んできた人」としての英知に基づき自己が培ってきた知恵や経験を活かし、自己の存在や社会的存在を認知できるように心理社会的側面への支援の検討がますます重要となってくる。

近年、老年期の健康を心理社会的適応の側面から捉える概念として、Generativity に関する研究が注目されつつある（小澤，2012）。Generativity とは、現在では「世代性」という訳語が用いられており（田淵，2010；串崎，2005, 2005；深瀬ら，2010；田淵ら，2011；西山，2010；丸島，2000），統合された経験を他者（次世代）に伝えることや、来るべき世代の要求に応じる事である。そして、次世代に自己の経験を伝える役割を果たすことにより統合性を持った自己（自己肯定できる心）が確立され、目前に迫る自分自身の死の恐怖を乗り越え、心理社会的適応がもたらされるといわれている。この概念は Erikson, E.H.（Erikson, E.H., 1952, 1982, 1990）によって壮年期の発達課題として産み育てるといった概念で紹介され、McAdams, D.P. ら（McAdams, D.P., 1992, 1993, 1997）によって創造性や継承性といった広い概念に発展してきたもので、現在では、壮年期だけではなく老年期においても重要な課題であることが報告されつつある。

看護における高齢者ケアの本質は、健康高齢者、要介護高齢者を問わず、高齢者が自ら生きてきた人生を振り返り、自己を見つめ、次世代に何を継承してきたか、何を継承したいのかなどを自覚・反芻し、自己を肯定的にみつめ、高齢者自身が自己の存在価値を見出すことにありと考える。また、そのことが今後いつの日か訪れるであろう生の終焉に真摯に向き合うことを支援することに繋がる。人は他者と繋がり、人間関係を構築し、自らのことを話し理解してもらい、他者を理解し、笑い語らい一生を終わる。これらのことは、高齢者支援が、高齢者自身に「語ってもらう」ことの重要性を意味していると言えよう。

Narrative approach (語りのケア) は、もともと文学等の領域から人文科学や社会学へ広がり、治療的アプローチへつなげることを目的に、**narrative based medicine** の重要性が示されて以後は、医療の分野においても多くの研究が報告されるようになった (やまだ, 2000 ; 野口, 2002, 2009 ; 吉村ら, 2004 ; 西山, 2010 ; 佐藤ら, 2010, 2013)。**Narrative approach** は、語り手と聴き手の人間関係を構築し、互いを理解しあうことを可能にする。そして、自己の物語を語る行為そのものが自己をつくとされる (野口, 2002 ; 吉村ら, 2004 ; 佐藤ら, 2010)。つまり **Narrative approach** は自己の人生の物語を語り、そのことによって高齢者自身が自己の物語を補強し修復しながら自己の現在と過去、未来を確認することを可能にすることができる。さらに **Narrative approach** は語り手である高齢者と聴き手であるケア提供者との関係性の構築に影響すると考えられる。すなわち高齢者看護における **Narrative approach** の重要性がクローズアップされてくる。

要介護高齢者への **Narrative approach** (語りのケア) は、他者から介護を受ける状況にあっても、高齢者自身が自己の存在価値を紡ぎ直す機会の提供となる。つまり人生を振り返ることによって次世代へ継承してきた自己の存在価値と、現在でもなお継承できる自己の存在意義を実感し、要介護高齢者が介護される人として人生を終えるのではなく長い人生を歩み英知を持つ人として生き抜くことを可能にする。このことは老年期の発達課題である「統合」に繋がる。またこの語りのケアは次世代、特に看護師等が高齢者の **Generativity** を意識することによって、あるがままの高齢者を尊重して関わることに繋がり、要介護高齢者の尊厳性を高めることとなる。そして、これらのことは要介護高齢者が **Generativity** を発揮することになり、自己効力感や自尊感情を高め、高齢者の生活の充実感・幸福感的獲得に繋がる。

以上のことから要介護高齢者の **Generativity** を解明し、要介護高齢者が介護を受けるだけの存在ではなく、**Generativity** を活かすことによってありのままの自己に存在価値を見出し、高齢者の **QOL** 向上に繋がる看護ケアモデルを提示する必要がある。その看護ケアモデルは何らかの障がいを抱えながらも、要介護高齢者自身が生きていることに価値を感じ、自己の存在を活かしながら他者と関わることを意味を次世代に伝えることを可能にする。そのことが要介護高齢者の **QOL** に繋がると考える。そしてそれが超高齢社会の我が国における老年期の豊かさともなり、また高齢者看護にとって必要な看護介入の方向性であろう。さらにそのことは要介護高齢者への成果だけでなく、ケア提供者である次世代の高齢者観に影響を及ぼすことにも繋がる。そのことは今後の老年看護学教育への示唆を与えるものとなる。

第2節 中年期、及び老年期の Generativity に関する研究背景

第1項 中年期の Generativity の理論的背景、及び研究の動向

1950 年当時、Erikson,E.H. (1952) が示した漸成的発達図式は、人間の心理社会的発達を 8 つの段階に分け、それぞれの段階には適応を方向づける「同調傾向」と、不適応を方向づける「失調傾向」を示した。そして、心理社会的に適応するために必要な素養である「基本的徳目」が各段階に設定された（小澤，2012）。Generativity は、その漸成的発達段階の 7 番目である成人後期の同調要素として設定されている（小澤，2012）。Generativity の対極にある失調傾向の要素が「自己停滞」であり、基本的徳目が「育み（care）」である。つまり成人期から中年期にかけては、家庭の中で、あるいは職場の中で、子育てや後輩（若手）の指導などを通して、次世代への関心が高まる時期であり、その関心には「世話する」という人間のもつ基本的な素養によって心理社会的に発達することである。さらに、この Generativity は、単に次世代を育てるという意味にとどまらず、自分の死後にも自分の生き方や成し遂げたことが永続するという基本的ニーズをみだし、自己停滞という失調傾向を乗り越えようとする要素でもある（小澤，2012）とされている。

現在、わが国では Erikson,E.H.の造語である『Generativity』は、一般的に『世代性』と訳されている（小澤，2012；田淵，2010；丸島，2009）。初版当時は、「親であること」に主眼が置かれていたが、この当時から男女間の性行動を含めて「生み出すこと」という意味も含まれていた。その後、Erikson,E.H.自身がその概念について修正を加え、1960 年代全般にわたって「教えること」「伝達すること」という意味へと少しずつ拡大されていった（Erikson,E.H., 1952,1982,1990）。また、1960 年代後半には、Generativity という発達課題を獲得することに、世代間の相互関係や幼児期の発達課題である「基本的信頼関係」が重要であることが示された。また、Erikson,E.H. (1952) 自身や Kotre,J.ら (1984) によって、伝承される「負の遺産」についても報告された。1970 年から 1980 年代には、Generativity は子や孫など若い世代への関心を世界全体や個としての自己の存続に結び付け、自己に対する不死の感覚と繋がるとして（Erikson,E.H., 1952,1982,1990,1997；田淵，2010）、「死への受容」にとっても重要であることが示された。しかし Generativity という用語は、Erikson,E.H.によって明確に概念を定義されることはなく、概念の「仮説－検証」は後世の研究者へ委ねられた（丸島，2009）。その後、Erikson,J.M.が晩年になって自らの経験から私見を加えている（Erikson,E.H., 1997）。しかし、それでもなお Generativity は概念規定されることはなく、その後しばらくの間は「子どもを育てる」という第一義的な意味を中心に調査が行われ、質問が設定された（田淵，2010）。

近年、注目されるきっかけとなったのは、McAdams,D.P.ら（1992）によって、Generativity 概念構成図が作成され、それを元に測定可能な尺度が作成されたことによる。McAdams,D.P. らは Generativity を 7 つの心理社会的要素で説明を試みた。その概念図（図 1-2-1）は世代性のための動機づけとして《内的希求》と《文化的要請》があり、内的希求は永続的な個として必要とされるという個人の内面から生まれる希求であり、文化的要請は社会から必要とされる外部からの責任や期待である。そして、それらによって《世

代性の関心（＝次世代のために）》が喚起させられ、さらに人間としての規範や信頼といった個人の《信念》が具体的な《取り組み》に影響を及ぼす。また「内的希求」と「文化的要請」によって喚起した「世代性の関心」という要素によって《世代性への行動》をとらせる。そして、これらの全体の過程を通して、その過程を《物語る》ことにより世代性の全容を明確にでき、そのことは世代性のテーマを持った内容のライフストーリーであるというものである（丸島，2009）。

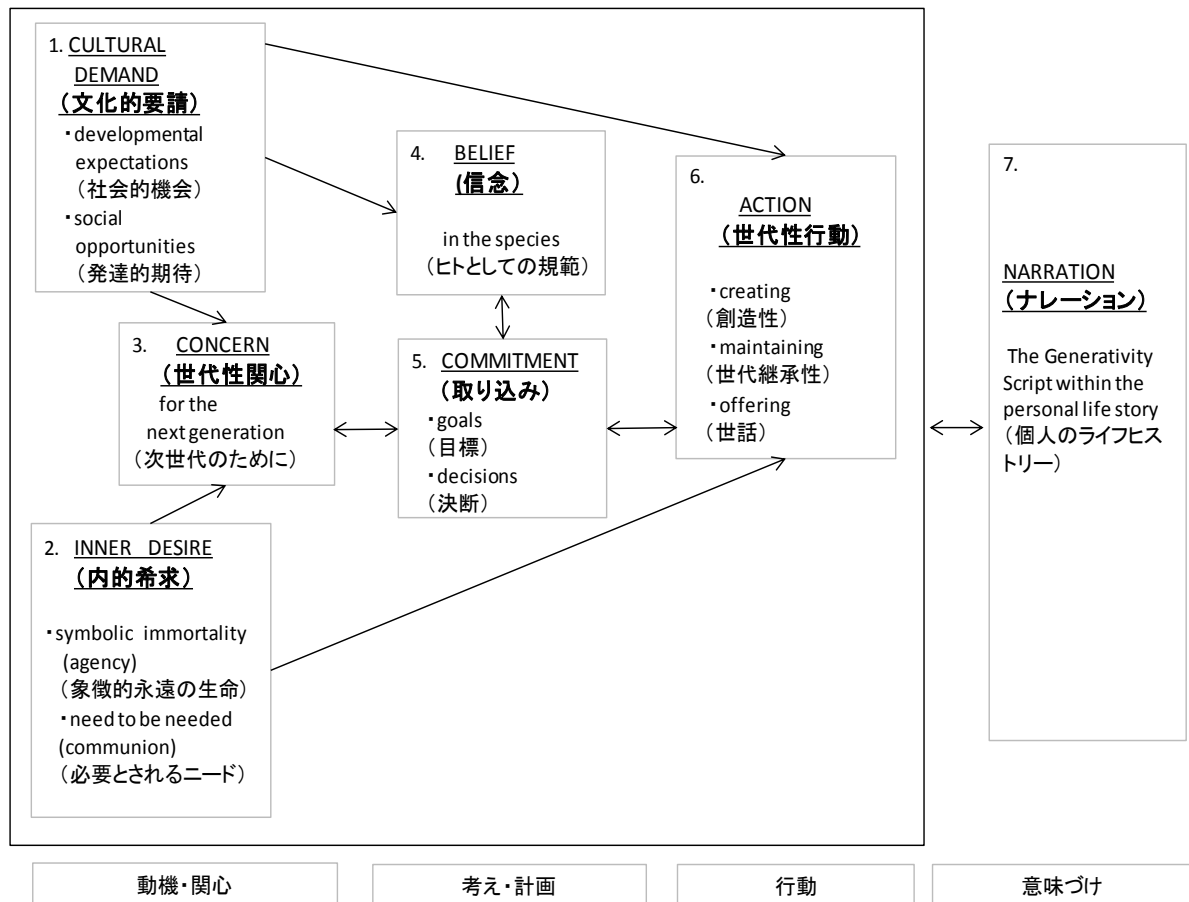


図1-2-1 McAdamsらのGenerativityの構成概念図 (McAdams et al.,1998と丸島,2009より作成)

出展: McAdams, D.P., & Aubin, E.S. (1998). *Generativity and Adult Development, How and why we care for the next generation*. American Psychological Association. Washington, D.C. p.9.

丸島令子(2009): 成人の心理学 世代性と人格的成熟, ナカニシヤ出版, 東京. p.13.

彼らは、この理論を整合性のある理論にするために尺度開発と同時に世代性の関心、行動、取り組み、物語るという4要素の群間比較を行い、若年者と老年者よりも中年者のほうが高いことを報告した。また、McAdams, D.P. らは、Erikson, E.H. の文献を吟味した結果《Generativity の関心》を「次世代の世話と責任」、「コミュニティや隣人への貢献」、「次世代のための知識や技能の伝達」、「永く記憶に残る貢献・遺産」、「創造性・生産性」という5つの下位尺度で説明した。その5つの下位尺度を基に「Loyora Generativity Scale(LGS)」が作成された（田渕，2010；McAdams, D.P., 1992）。LGSは信頼性、妥当性の高い尺度であることが証明され、以後のGenerativity研究の多くがこのLGSを用いて行われてきた。

McAdams,D.P.らが作成した尺度によって、世代性と関連する様々な心理社会的要素との関係が報告され、同時に Generativity の意味が少しずつ、さらに拡大していくこととなった。そのため、Generativity という概念は各研究者がそれぞれに概念規定を行っており、いまだ共通の明確な定義がなされていない概念でもある。

その後、Generativity 研究に大きく影響を与えたのは、Bradley,C.L. らである（田渕, 2010）。彼らは Erikson,E.H.の心理社会的発達課題の「世代性 対 停滞」について、2つの基準によって 5 地位モデルを示した（Bradley,C.L., 1998 ; 田渕, 2010）。このモデルはその後調査された中高齢者の語りからも、これら 5 つのタイプに分かれることが実証され、Generativity の質的な研究アプローチへ（田渕, 2010）とさらに発展していくきっかけとなった。

第 2 項 老年期の Generativity の理論的背景、及び研究の動向

前述のように、Generativity は Erikson,E.H.によって人間の発達課題の第 7 段階目の成人後期として提唱された概念であり、「子どもを育てる」という狭義の意味から、現在では「創造性」「生産性」という広義の意味を含む概念として用いられるようになった。概念が持つ意味の広がりと同時に、高齢化が進むにつれて、またライフサイクルが全体的に延伸したことによって、Generativity は成人や中年期の発達課題だけでなく、老年期においても「祖父母的世代性」「死の受容」という老年期の発達課題において重要な概念として捉えられるようになった。

老年期の Generativity に関する研究を概観する。Erikson,E.H.らは老年期の Generativity について 2 つの側面から論じている。一つは祖父母的機能、もうひとつは中年期の Generativity についての回想である（小澤, 2012）。小澤は、この老年期の Generativity は Erikson,E.H.のいう人生の 8 段階目の同調要素である「自我統合」にとって重要な役割と見なすと述べている。そして Generativity は、次世代へ経験を伝える役割を果たすことで統合性をもった自己が確立され、目前に迫る自分自身の死の恐怖を乗り越え、心理社会的適応がもたらされると言われるように、老年期の心理社会的発達にとって、また、晩年になって Erikson,J.M.が Erikson,E.H.の死後に加筆したように、人間の 9 段階目の発達課題である「死の受容」にとって重要な役割を果たす要素である（Erikson,E.H., 1990,1997）と考えられる。

Erikson,J.M.が自己の経験から加筆した老年期の Generativity に関する記述には、身体的加齢によって自らが主体的にあらゆることを継承していくことが負担になることが指摘されている（Erikson,E.H., 1990,1997）。その指摘に関する実証研究が McAdams,D.P.ら（1993,1997）や、Cheng,S.T.（2009）によって行われた。前者は中年期における Generativity 的行動が老年期にもみられること、後者は Generativity の関心が心理社会的適応と正の相関があることなどを報告している。Erikson,J.M.は、90 歳を過ぎて身体的な衰えが強くなることによって Generativity が負担となることを指摘している。しかし一方では、人生の終盤を生きる人にとって「統合された自己の経験を次世代に伝える」ことの重要性についても記述を残している（Erikson,E.H., 1997）。

このように、Generativity が老年期に存在するという事とともに、老年期は Generativity の回想に関する語りが増える傾向にあり、それを語ることで自己が次世代に遺してきたことを老年期でしかできない思考の構成によって再評価をする（小澤，2012）という Narrative approach に関する研究報告も見られるようになった。他方、Cheng,S.T. や田渕らが、若者からの敬意の反応が多いことが老年者の Generativity に影響するという報告等にみられるように（Cheng,S.T., 2009；田渕ら，2012,2013），高齢者と他者との関係性から老年期の Generativity を検討されるようになってきた。

Generativity と心理的尺度との関連について（小澤，2012），Aubin,E.S.ら（1995）は Generativity が生活満足感や幸福感と関連していることを報告している。この2つの満足感とは自己発達と関連していることが明らかにされたことで、自己発達の高いレベルの人は、低いレベルの人よりも満足感が高いことが実証された。また、McAdams,D.P.（1998）は世代性の関心と健康度との間に関連があることを明らかにしている。つまり全体的な健康度は、生活満足感や幸福感、自尊感情や目的の安定性、一貫した生活感覚が高いと、世代性関心とは正の関係を示し、抑うつ性とは負の関係を示し、さらに性格特性の5因子モデルによってパーソナリティの安定性に影響しているかを検証した結果、世代性の関心は調和性、外向性、開放性の特性と関連し、神経症性とは負の関係を示したと報告している（小澤，2012）。

わが国における Generativity 研究は、丸島ら（2000）が LGS を参考に作成した日本語版世代性関心尺度（GCS-R）が報告されたことから研究が発展してきた。丸島らは改訂版の世代性関心尺度を開発し、世代性関心が創造性、世話、世代継承性の3因子構造であることを明らかにしている。また、前述の海外の結果と同様に世代性関心が幸福感や性格特性、抑うつなどと関連している結果であったことを報告している。丸島らの尺度開発以後、いくつかの尺度がその目的に合わせて開発され、報告がされてきた（串崎，2005；田渕，2012；大場，2013）。そしてそれらの結果は、世代性関心が中年期よりも老年期に向上することが報告され（串崎，2005），心理社会的側面との関連も海外と同様に示された。

Generativity と心理的社会的側面との関連について、丸島ら（2005，2007）は成人期から老年期を対象にした尺度開発の結果、下位尺度はすべて情緒安定性、及びうつと関連があったことと、反対に Generativity の関心が Generativity の行動に繋がっていないことを報告している。また串崎（2005）は、中年期を対象におこなった多面的な Generativity 尺度開発の報告の中で、年齢とともに Generativity 総得点が上昇すること、これまでの発達の課題の達成状況と関連が見られたことを報告している。そして人生に対する態度とも関連が見られたとしている。田渕ら（2009,2011,2012）は中高年期を対象にして5項目の短縮版 Generativity 尺度を作成し、Generativity 得点は得点が高いと行動得点も高く、他の研究と一致した結果であったことを報告した。また田渕ら（2012）は若者からのフィードバックが高齢者の Generativity に影響及ぼすことを明らかにした。つまり、次世代からの敬意や尊敬といった年長者としての関係性を感じることで、高齢者の Generativity を高めるというものである。また大場ら（2011,2012,2013）は、「Hopkins Generativity Index」の日本語版であり、高齢者向けの世代間交流プログラムの評価のための全16項目による日本語短縮版 generativity 尺度を作成し、併存妥当性を確認している。さらに亀井

ら（2013）では、世代間交流プログラム参加者の交流評価のための尺度を開発し、尺度の信頼性と妥当性を検証している。このように世代間交流などの高齢者と若年者の関係性を含めた効果を検証する研究も報告され始めている。

以上のことから、我が国の Generativity 研究は、心理学、教育学の領域において、さらに社会学等を含めて、老年学全般にわたって進められ、始まったばかりである。そのため、Generativity がどのように高齢者の発達課題に影響し、現在の生活に対する満足感や幸福感、充実感に影響を及ぼすかについては、いまだ十分検討されているとは言えない。また、これから我が国が抱えていく超高齢社会の課題に対しては、小澤が述べているように超高齢者において、Generativity がどのように構造を変えて人生の終焉を迎えているのかについての検討がされているとは言えない。現在、Generativity が老年期においても維持されることや、そのための行動に注目した報告は散見されるようになってきた。特に世代間交流に視点をおいた老年期の Generativity についての研究が始まり、実践的な研究が報告され始めたところである（大場ら、2013；田渕ら、2014；糸井ら、2015）が、いずれも比較的に健康で地域で暮らす高齢者を対象とした研究であり、疾患、障がいを持ち生活に支援が必要な状況における要介護高齢者や超高齢者、社会生活から離れて生活せざるを得ない高齢者施設に入所中の要介護高齢者の Generativity について研究した報告は見うけられない。

引用文献

- 秋山弘子(2012)：超高齢社会のサクセスフル・エイジング，*Todai lecture series for University-Industry Spanning*, pp.148-160.
- Aubin,E.S., McAdams,D.P.(1995): The relations of generative concern and generative action to personality traits, satisfaction/happiness with life, and ego development, *Journal of Adult Development*, 2(2), pp.99-112.
- Bradley ,C.L.,Marcia,J.E.(1998) : Generativity-stagnation: A five-category model, *Journal of Personaloty*, 66, pp.39-64.
- Cheng,S.T.(2009) : Generativity in later life:Perceived respect from yonger genetations as a determinant of goal disengagement and psychological well-being, *Journal of Gerontology*, 64, pp.45-54.
- Erikson,E.H.(1952)/仁科弥生訳(1963)：幼児期と社会 I，pp.272-273., みすず書房，東京。(Childhood and society. 2nd ed., W.W.Norton & Company Inc, New York)
- Erikson,E.H.(1982)/村瀬孝雄,近藤邦夫訳(2001):ライフサイクル その完結, みすず書房，東京.(The life cycle completed, W.W.Norton & Company Inc, New York)
- Erikson,E.H.(1990)/朝長正徳,朝長梨枝子訳(1997):老年期－生き生きしたかわりあいー, みすず書房，東京.(Erikson,J.M.,Kivnick,H.Q.: Vital involvement in old age. W.W.Norton & Company Inc, New York)
- Erikson,E.H.,Erikson,J.M. (1997)/村瀬孝雄, 近藤邦夫訳(2001)：ライフサイクルその完結〈増補版〉，みすず書房，東京。(The life cycle completed, A review, Expanded edition, W.W.Norton & Company Inc, New York)

- 深瀬裕子,岡本祐子(2010): 中年期から老年期に至る世代継承性の変容, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 59, pp.145-152.
- 糸井和佳,亀井智子,田高悦子ら(2015): 地域における高齢者と子どもの世代間交流観察スケールの開発 CIOS-E、CIOS-C の信頼性と妥当性の検討, 日本地域看護学会誌, 17 (3), pp.14-22.
- 亀井智子,山本由子,梶井文子(2013): 聖路加式世代間交流観察 (SIERO) インベントリーの開発と信頼性・妥当性の検討, 聖路加看護学会誌, 17(1), pp.9-18.
- 河野保子(1996): 高齢者の生活状況からみた寝たきり状態になる背景要因に関する研究, 愛媛医学, 15(3), pp.52-62.
- Kotre,J.(1984): Outliving the self. generativity and the interpretation of lives. Baltimore, The Johns Hopkins University press.
- 厚生労働統計協会(2015): 国民衛生の動向・厚生 の指標 増刊, 62(9), pp.84-87.
- 串崎幸代(2005): E.H.Erikson のジェネラティヴィティに関する基礎的研究 多面的なジェネラティヴィティ尺度の開発を通して, 心理臨床学研究, 23(2), pp.197-208.
- 串崎幸代(2005): ジェネラティヴィティの感覚と人生に対する態度の関連について, 臨床心理学研究, 23(5), pp.591-596.
- 丸島令子(2000): 中年期の「生殖性 (Generativity) 」の発達と自己概念との関連性について, 教育心理学研究, 48, pp.52-62.
- 丸島令子(2005): 世代性尺度の作成 - 世代性の関心と行動モデルの測定 -, Journal of Japanese Clinical Psychology, 23(4), pp.422-433.
- 丸島令子,有光興記(2007): 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性、妥当性の検討, 心理学研究, 78(3), pp.303-309.
- 丸島令子(2009): 成人の心理学 世代性と人格的成熟, ナカニシヤ出版, 東京.
- McAdams, D.P., Aubin,E.S. (1992): A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts, and narrative themes in autobiography., Journal of Personality and Social Psychology, 62(6), pp.1003-1015.
- McAdams, D.P., Aubin,E.S., Logan.R.L. (1993): Generativity among young, midlife, and older adults, Psychology and Aging, 8(2), pp.221-230.
- McAdams, D.P.,Diamond,A,Aubin,E.S.,et al.(1997): Stories of commitment ; The psychosocial construction of generative lives., Journal of Personality and Social Psychology, 72(3), pp.678-694.
- McAdams, D.P., Aubin,E.S.(1998): Generativity and adult development, How and why we care for the next generation, American Psychological Association Washinton,DC.(McAdams, D.P.,Azarow.(1996): Generativity in black and white:Reations among generativity,race, and well-being . Paper presented at the convention of the American Psychological Association.Toront, Canada)
- 内閣府(2015): 平成 27 度版高齢社会白書, 日経印刷株式会社, 東京.
- 日本老年医学会(2008): 老年医学テキスト改定第 3 版, , メジカルビュー社, 東京. pp.24-44.
- 西村周三監修(2011): 医療白書 - 少子超高齢・人口減少時代における「国民課題」としての医療問題 -, p5, 日本医療企画, 東京.

- 野口裕二(2002)：物語としてのケア ナラティブ・アプローチの世界へ，医学書院，東京。
- 野口裕二(2009)：ナラティブ・アプローチ，勁草書房，東京。
- 西山直子(2010)：世代間関係における Generativity の可能性 - Narrative Approach の立場から - ，京都大学大学院教育学研究科紀要，56，pp.345-357.
- 小澤義雄(2012)：老年期の Generativity 研究の課題 - その心理社会的適応メカニズムの解明に向けて - ，老年社会科学，34(1)，pp.46-56.
- 大場宏美,藤原佳典,村山陽他(2005)：世代間交流プログラムの評価に向けた日本語版 generativity 尺度作成の試み，世代間交流学会誌，3(1)，pp.59-65.
- 大場宏美,藤原佳典,中野久美子(2011)：高齢者向けの generativity 尺度（世代性尺度）の開発の試み - 予備調査の方向 - ，老年社会科学，33(2)，p288.
- 大場宏美, 村山陽, 野中久美子他(2012)：高齢者向け Generativity 尺度の開発の試み，日本健康教育学会誌，20,Suppl., p131.
- 大場宏美,藤原佳典,村山陽他(2013)：世代間交流プログラムの評価に向けた日本語版 generativity 尺度作成の試み，日本世代間交流学会誌，3(1)，pp.59-65.
- 佐田律子,泉キヨ子,平松和子(2009)：大腿骨頸部骨折高齢者の再転倒に対する対処行動，日本看護科学学会誌，27(4)，pp.54-62.
- 讃井真理(2007)：施設入所中の要介護高齢者の生き甲斐への示唆，修士論文
- 佐藤晃太郎,山田孝,石井良和(2010)：問題を取り巻くドミナント・ストーリーの転換により物語が書き換えられた高齢女性の事例～ナラティブを重視した作業療法の効果～，作業行動研究，14(3)，pp.161-166.
- 柴田博(2009)：サクセスフル・エイジングの現実における生活機能の重要性，臨床スポーツ医学，26(2)，pp.231-235.
- 鈴木みずえ(1997)：A difference in the risk of falls? A Japanese study，Journal of Gerontological Nursing，23(1)，pp.41-48.
- 鈴木みずえ(2002)：The relationship between fear of falling, activities of daily living, functional disability and health-related quality of life among elderly Japanese individuals using day services，Nursing and Health Sciences，4(4)，pp.155-161.
- 田渕恵，藤田綾子(2009)：祖父母世代の地域子育て支援への意欲と世代継承性との関連に関する検討，老年社会科学，31(2)，p175.
- 田渕恵(2010)：世代性（Generativity）の概念と尺度の変遷，生老病死の行動科学，15，pp.13-20.
- 田渕恵,権藤恭之(2011)：高齢者の次世代に対する利他的行動意欲における世代性の影響，心理学研究，82(4)，pp.392-398.
- 田渕恵,中川誠,権藤恭之(2012)：高齢者における短縮版 Generativity 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討，厚生指標，59(3)，p.1-7.
- 田渕恵,三浦麻子,中川誠(2013)：高齢者における世代性(Generativity)と次世代とのかかわり行動の因果関係；性差に着目した検討，日本世代間交流学会誌，3(1)，pp35-40.
- 田渕恵,三浦麻子(2014)：高齢者の利他的行動場面における世代間相互作用の実験的検討，心理学研究，84(6)，pp.632-638.

魚尾淳子,河野保子(2011):脳血管障害患者の日常生活拡大に関する研究 - 意欲、自己効力感、自己効力感形成の情報源との関係に焦点を当てて -, 日本看護研究学会雑誌, 34(1), pp.47-59.

やまだようこ(2000):人生を物語ることの意味:なぜライフストーリー研究か?, 教育心理学年報, 39, pp.146-161.

山本則子(2011):老年看護学が目指す Successful aging, 老年社会科学, 33(2), p179.

吉村雅世,内藤直子(2004):看護ケアにナラティブ・アプローチを導入した老年患者の語りの変化の研究, 日本看護科学学会誌, 24(4), pp.3-12.

https://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/03_keikaku/data/h26/I/h26_koubo_09.pdf, 日本学術振興会,科学研究費, 特設分野研究 (2015.10.15)

第2章 研究の概念枠組みと構成、及び目的

第1節 本研究の概念枠組みと構成

本研究の概念枠組みを図 2-1-1 に示した。まず、要介護高齢者の個々の特性と経験がその高齢者の Generativity に対する関心に影響を与える。特に本研究は施設入所中の要介護高齢者を対象とすることから、その療養環境は高齢者の Generativity への関心に大きく影響を及ぼす。また、要介護高齢者は自己の成育史や生活様式、信念等に至る個々の経験によって Generativity や個人の役割発揮を自覚することになり Generativity への関心を示すことに繋がる。他方、要介護高齢者は自己を語ることに際して (Narrative approach の実施)、その結果として他者とコミュニケーションをとり始め、笑うこと、自発的にふるまうこと、感謝され感謝するという自己に対する存在価値の自覚が芽生え始める。それゆえ、Narrative approach の実施は要介護高齢者を人間的な在り様の発現へ変容を促すことに繋がる。これらの結果を踏まえて、本研究では要介護高齢者の自己の存在価値を高めるための看護ケアモデルを検討するものである。

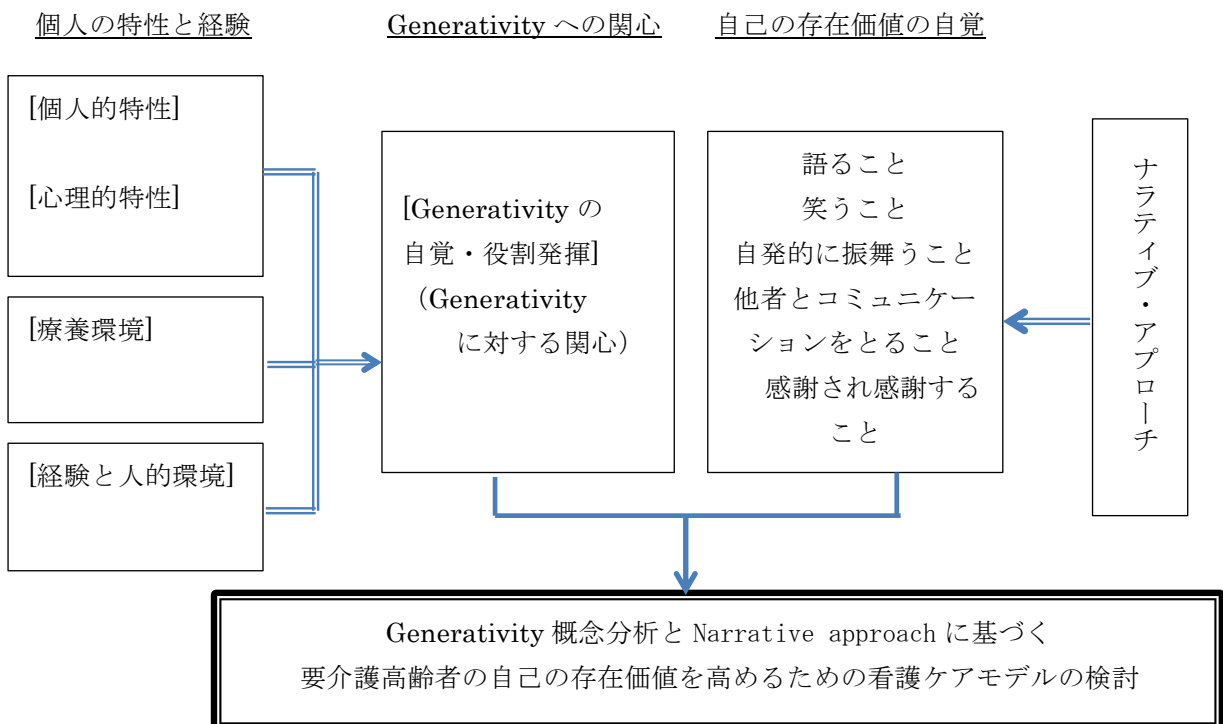


図 2-1-1 本研究の概念枠組み

本研究の構成を、図 2-1-2 に示した。まず高齢者看護の現状把握のために文献レビューを行う。次に本研究は要介護高齢者を対象としているが、その前に地域高齢者の Generativity への関心と心理的側面との関連を調査する。その後、施設入所中の要介護高齢者における Generativity 的関心について調査を行う。さらに研究者自らが、要介護高齢者に対して Narrative approach を実施し、Generativity 的視点で要介護高齢者への看

介護介入としての Narrative approach による内容を分析する。それらの結果を踏まえて、要介護高齢者が Generativity を発揮し自己の存在価値を高めることができる看護ケアモデルを提示し、その有用性を検討する。

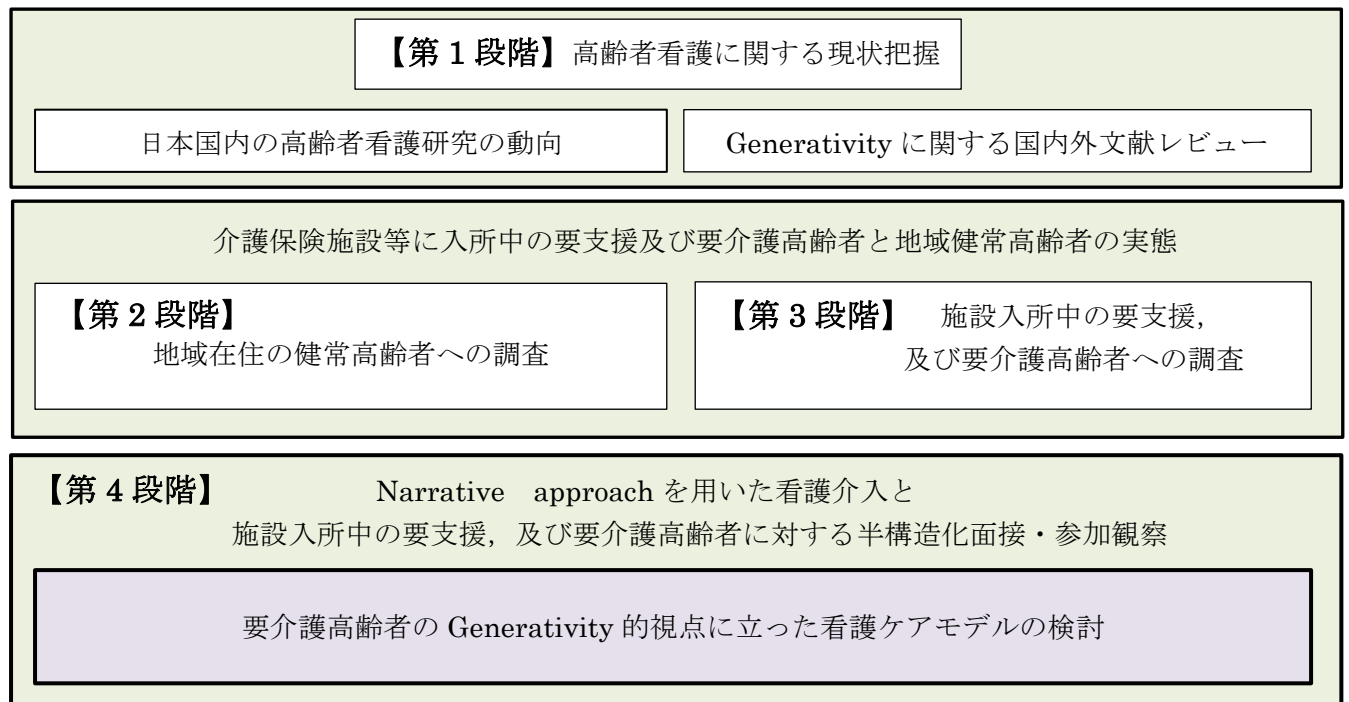


図 2-1-2 本研究の構成

第2節 本研究の目的と意義

第1項 本研究の目的

これまで述べてきたように、Generativity は老年期にとって他の世代にはない重要な意味をもつ概念である。地域で暮らす健康高齢者にとっては、自分のニーズに合わせて外部との交流や社会とのつながりを主体的に行動し、社会参加することが可能である。しかし介護が必要となった高齢者にとっては、外部との交流を持ちたくても、主体的に自由にその機会を獲得する行動をとることは難しくなる。特に、施設に入所する高齢者にとっては家族との距離が離れ、孤独感を感じるケースも少なくないと思われる。

核家族化が進んだ我が国においては、施設への入所が長期化することも多い。施設に入所されると、どんなによりケアを提供されている施設であっても、高齢者と職員の関係は、介護される側と介護する側である。その関係性は、高齢者にとって次世代からの敬意を感じられる関係性と言えるのだろうか。また、地域の中で生活してきた高齢者にとっては、施設に入所することは毎日支え合ってきた人との物理的距離が離れることになり、心理的負担は大きいものと考えられる。Generativity が高齢者の心理的社会的側面にどのように影響しているものなのか検討していく必要がある。

McAdams,D.P.ら（1992）によって示された Generativity の要素のひとつである「Generativity における関心」は次世代のための高齢者の行動を導くための重要な要素で

ある。しかし、施設に入所中の要介護高齢者は次世代への直接的な継承的行動を起こしにくい状況にある。本研究は直接的な継承的行動は困難であっても要介護高齢者の内面で行われている精神的活動を実証しようとするものである。従って、本研究では高齢者の「Generativityにおける関心」に焦点を当て研究を行うこととする。Generativityが要介護高齢者の心理的社会的側面にどのように影響しているのか。要介護状態であってもGenerativityは維持されるものであるのか。どのように質的に変容して人間の統合性を高めていくことができていくのか。また、その支援の方向性についても検討していく必要がある。

以上のことから、本研究の目的は、要介護高齢者のGenerativityにおける関心の概念構造を明らかにし、比較対象の地域高齢者との間においてどのような差異が認められるかを検討する。また高齢者のGenerativityの関心に影響を与える要因を特定する。さらにGenerativityを喚起する条件として、世代間交流と他者との交流が指摘されている。それゆえGenerativityを踏まえたNarrative approachによる要介護高齢者の反応からどのように自己の存在価値に対する変容効果があるのかについて、またGenerativityにおける関心を踏まえた看護ケアモデルについて検討する。これらのことに解を与えることによって、要介護高齢者がGenerativityを発揮でき、生活の充実感が得られるための看護的視点を検討する。

第2項 期待される成果

Generativityは高齢者の生活の質を高めるための様々な心理社会的要因と関連しており、高齢者の生活満足に影響を与えていることが推察できる。同世代や若者世代との繋がりがから影響を受けているならば、要介護状態であっても避けられない老いと病の状況であっても、高齢者自身は自己の存在は意義があると認識し、また価値ある自己と受け止めることが可能であろう。本研究は誰もが経験するであろう人生の終焉の時期であり、また支援や援助が必要な期間ともなるこの期間を心豊かに、穏やかに、自己の人生を振り返ってよい人生であったという自己の存在価値を見いだせるような支援の方向性を示すことに繋がる。

また、Narrative approachは要介護高齢者への介入効果により親近感及びラポールの形成につながる。そのことは要介護高齢者の認知・感情が表現でき、高齢者が自己開示することによりその人の開放性が促進でき、自己の価値を高めるという効果が期待できる。本研究の要介護高齢者のGenerativityに対する研究は、高齢者を一人の価値ある存在としてみなすことであり高齢者を尊重する態度に繋がる。また高齢者の生きてきた人生に意味を与え、高齢者は次世代にとって有用な存在であることを証明できる。これらのことは個人にも社会にも課題である要介護高齢者のQOLと尊厳性を高めるための質向上に役立つ。

第3項 学術的意義

本研究はこれまでの高齢社会や高齢者自身への負のイメージに対して、近年、心理社会学で注目されつつある高齢者の叡智・智恵・徳・善・価値等、Generativity概念を中心として、看護の視点で要介護高齢者の尊厳性、幸福感を高めるケア効果を検討するものである。我が国におけるGenerativityに関する報告は少なく看護学においてはほとんど見られ

ない。他学問領域においても要介護高齢者を対象に行われている研究は報告されていない。本研究の要介護高齢者の **Generativity** に対する研究は、高齢者を一人の価値ある存在としてみなすことであり、高齢者を尊重する態度に繋がる。また高齢者の生きてきた人生に意味を与え、他者にとって有用な存在であることを証明する。さらに要介護高齢者に対する **Generativity** を明らかにすることは、看護者が **Generativity** を包含した要介護高齢者観への確立ができ高齢者ケアの質向上に繋がる。これらの点において新規性、独創性があると考えられる。

また、本研究は「ネオ・ジェロントロジー」という新しい高齢者像の構築を目指した研究が推進されている現在において、社会の中で高齢者の役割意識が形成される過程を創造することに繋がる。様々な年代の集まりや同僚間において、高齢者から次世代等へ種々の遺産が継承されていくこととなり、社会の活性化が生じることが考えられる。そして、看護の現場においては、要介護高齢者への **Generativity** を踏まえた看護ケアの展開によって、また、若者世代からの高齢者が受ける尊重し尊敬するという関係性によって、長く生きてきた人生への価値と、自己の持つ遺産を次世代に繋げる役割を発揮できるという、健康であるなしに、あるいは地域在住であるか施設入所であるかに関わらず高齢者の **QOL** を保証するものになる。さらに、高齢者の生き方や活かし方・支え方に役立つ考え・思想を提供するものであり、超高齢社会で生きる高齢者の、社会的存在価値や役割発揮の可能性を論じており、高齢者が社会貢献できるという意味において研究的価値を持つものである。

第4項 社会的意義

今後、超高齢社会の我が国において、新しい高齢者像の構築を目指した研究が推進されている。「ネオ・ジェロントロジー」という新たな研究分野は、高齢者の社会的役割を再認識し、高齢者を含めた社会全体を新しく創造していくことが求められている研究分野である。本研究は、支援や介護が必要な状態であっても社会に存在する意義を持ち、そのことを高齢者自身が認識できるようにすること、また高齢者一人ひとりが自己の存在価値への認識が可能な社会・生活・環境の中で人生の終焉を迎えることができるよう、高齢者においても、次世代においても新しい高齢者像の構築を推し進めるものであり、高齢者の社会的意義の解明に寄与するものである。

また、次世代に生きる人々にとって高齢者と繋がり合うことは、高齢者の持つ価値を感じ取り、社会全体が明るく活気に満ちたものとなり、超高齢社会の我が国において、豊かな社会が形成されることに繋がると考えられる。**Generativity** 研究は、成熟した高齢社会を形成するための主要な位置づけにあり社会的価値を持つ。さらに看護教育においては、高齢者の **Generativity** の意味を学生に教授することは重要な意味を持つと考えられる。看護学生は **Generativity** の概念を明確に学ぶことにより、高齢者を肯定的な視点で見つめることができる。また、人間は繋がって生きているということの大切さに気付く、人間性の成長を育成することに繋がる。学生は看護実習において高齢者看護を展開するとき、学生の持つ **Generativity** の哲学・思想は実践の中で生かされ、高齢者とのかかわりにおいては高齢者の人生を大切に思い、高齢者その人をありのままに受け止めることによって、学生には多くの遺産が継承されていく。このような次世代と高齢者の関わりを促進することは、学生のみに限らず、社会への新しい高齢者像の構築に貢献できるのではないだろうか。

第3節 本研究における Generativity の概念規定

1. 老年期の Generativity

Generativity とは、我が国では「世代性」という訳語が多く用いられている（丸島，2005,2007；串崎，2005,2007；田渕ら，2009,2011,2012；大場ら，2013；小澤，2012）。本研究では高齢者の Generativity を以下のように定義する。ライフサイクルの最終段階の発達課題に影響を与えるものであり，統合された自己の経験から次世代に関心を持ち，自己の目標を感じて次の世代のために行動することである。次世代に自己の経験を伝える役割を果たすことにより，自己肯定できる心や，統合性を持った自己が確立され，希望や自己存在としての価値を持ち，目前に迫る自分自身の死の恐怖を乗り越え，老年期の心理社会的適応を促すものである。

2. Generativity における関心

「Generativity における関心」とは，McAdams,D.P.ら（1992,1998）の概念構成図に示されたように（図 1-2-1），内的希求（永続的な自己への欲求，象徴的な永遠の生命への欲求，必要とされることへの欲求のような個人の内面を突き動かす強い欲求（丸島，2000,2005,2007））と文化的要請（各々特定の文化において，個人が期待される社会貢献や社会的責任を果たそうとする動機（田渕，2005））の 2 局面から影響を受けて構成されている概念である。「Generativity における関心」は「Generativity への行動」に繋がっていく。つまり，この 2 局面は高齢者が Generativity を喚起するために必要かつ重要な誘因である。本研究はこの「Generativity における関心」に焦点を当てる。

3. 自己の存在価値

要介護高齢者が自身の世代性に関心を持ち，生きる意味，存在する意味を自覚すること。その結果，療養生活において「語ること」「笑うこと」「自発的にふるまうこと」「他者との関係性」「感謝し，感謝されること」が観察できるようになることをいう。

引用文献

- 串崎幸代(2005)：E.H.Erikson のジェネラティヴィティに関する基礎的研究 多面的なジェネラティヴィティ尺度の開発を通して，心理臨床学研究，23(2)，pp.197-208.
- 串崎幸代(2005)：ジェネラティヴィティの感覚と人生に対する態度の関連について，臨床心理学研究，23(5)，pp.591-596.
- 丸島令子(2000)：中年期の「生殖性（Generativity）」の発達と自己概念との関連性について，教育心理学研究，48，pp.52-62.
- 丸島令子(2005)：世代性尺度の作成 - 世代性の関心と行動モデルの測定 -，Journal of Japanese Clinical Psychology，23(4)，pp.422-433.
- 丸島令子,有光興記(2007)：世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性、妥当性の検討，心理学研究，78(3)，pp.303-309.
- 丸島令子(2009)：成人の心理学 世代性と人格的成熟，ナカニシヤ出版，東京。

- McAdams, D.P.,Aubin,E.S. (1992):A theory of generativity and its assessment through self-report, Behavioral acts, and narrative themes in Autobiography., Journal of Personality and Social Psychology, 62(6), pp.1003-1015.
- 小澤義雄(2012): 老年期の Generativity 研究の課題 - その心理社会的適応メカニズムの解明に向けて -, 老年社会科学, 34(1), pp.46-56.
- 田渕恵,藤田綾子(2009): 祖父母世代の地域子育て支援への意欲と世代継承性との関連に関する検討, 老年社会科学, 31(2), p.175.
- 田渕恵(2010): 世代性 (Generativity) の概念と尺度の変遷, 生老病死の行動科学, 15, pp.13-20.
- 田渕恵,権藤恭之(2011): 高齢者の次世代に対する利他的行動意欲における世代性の影響, 心理学研究, 82(4), pp.392-398.
- 田渕恵,中川誠,権藤恭之(2012): 高齢者における短縮版 Generativity 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討, 厚生指標, 59(3), p.1-7.

第3章 本研究における倫理的配慮

本研究は、広島文化学園大学看護学部倫理委員会の承認を得て研究を行った。以下に、各研究段階の内容を含めて、本研究における倫理的配慮について述べる。

1. 対象のプライバシーの保護

第2・第3段階で記載する調査票は無記名で統計的に処理し、入力されたデータは研究者が保管・管理を行った。研究が終了した時点で研究者によってシュレッダー等にかけて適切に破棄する。第4段階の半構造化面接法及び参加観察法の調査に関してはICレコーダー録音と逐語録は研究者及び指導教員以外が視聴することはない。特定の施設や名称は記号化し個人等が特定されること、内容が漏れることのないように管理し、録音された会話は研究が最終的に終了した時点で第三者の立会いの下で消去するなど十分に配慮した。

2. 対象が受ける利益及び看護上の貢献の予測

要介護高齢者の Generativity の実態を解明し、さらに要介護高齢者への Generativity 的視点にたった自己の存在価値を支援する看護ケアモデルを検討することは、要介護高齢者の Generativity 的行動への理解を可能にする。また Narrative approach という看護介入により、要介護高齢者は人生を振り返り自己を生成し直すことで、自己の価値を認識することが可能となる。そのことは長寿社会の課題である超高齢者、及び要介護高齢者の幸福感への変容効果、尊厳性を高めるなど QOL 向上が期待できる。また、要介護高齢者とケア提供者との尊重し合う関係性から、ケア提供者である次世代の高齢者観の変容に繋がり看護ケアの質の向上に寄与する。

3. 対象の心身の負担への配慮

第2段階で行う調査票の記入は地域高齢者の調査は40分～50分程度を要する旨説明し、同意が得られた方に自記式質問紙と同時に返信用封筒を配布し記入後投函してもらった。また第3段階で行う要介護高齢者への調査は対面で行い、体調に変化があるときには施設スタッフと管理者へ報告し、体調の変化によっては日程を調整・中止することを十分理解していただいた。中止の申し出があった場合は、すぐに調査を終了した。第4段階の Narrative approach の実践は対象者のご都合に合わせて時間と場所を確認した。また、時間は体調の良い時の30分～1時間程度とし、対象者の体調に変化が見られた場合には調査を途中で中止し、スタッフへ状態を報告することを十分理解していただいた。調査中に答えにくい質問には返答を強要せず、高齢者が理解しやすいように質問の方法を工夫し、調査と Narrative approach の介入が負担にならないように十分に配慮した。

4. 対象や施設に理解を求め同意を得る方法

第2段階の調査では、対象団体の理事長に研究の主旨に賛同していただき、理事長から会長会議に提案していただいた。各地域の会長の同意が得られたのちに、各会長から

地区会員に研究依頼書と調査書を配布していただいた。各会員の方には投函をもって同意とした。第3段階の調査は施設長及び看護部長の研究協力の承諾確認後、各病棟及び療養棟の管理責任者に相談のうえ対象者を決定した。その後、書面と口頭で、直接、対象者及び家族に主旨と方法を説明し、本人の自由意思で同意を得た。第4段階は、施設長の同意を得たのち、施設側から本人とご家族の同意を得ていただいたのち、研究者が施設を訪問し本人から書面で同意をいただいた。

5. 研究協力への撤回が自由にできること

調査及びケア実践中に協力の意思と協力の継続ができなくなった場合は、調査等を途中で中止することもできる。承諾書にその旨を記載し口頭で説明して、理解していただいたのちに調査を行った。また、要介護高齢者への聞き取り調査途中に本人から辞退の申し出があった場合はすぐに調査を中止し、データはその当日中に破棄した。

6. 対象が受ける不利益及び危険性に対する配慮

調査項目については表現等を十分に査定し、質問紙は記入と回答に対して対象者が負担を感じないように文字の大きさ、行間と配置、質問内容と選択肢の数から応えやすい質問から始められるように、また最終の質問は心地よく終われるように構成した。また異なる尺度であるが関連する質問項目が影響し合わないよう考慮して作成した。質問内容によって対象者が心身に負担等を感じることもある場合を考え、研究者の連絡先を伝えた。地域高齢者には投函期日までの余裕をもって依頼した。要介護高齢者の対面での聞き取り調査では、本人と家族、施設側に同席の希望の有無を確認して、場合によって同席していただきながら行った。要介護高齢者へは質問の方法について声の大きさ、質問の長さ、内容の補足等で工夫したにもかかわらず対象者が返答に苦慮する場合には無理な回答はしないでよいことをご理解いただいた上で実施した。また本人が質問に対し会話で回答する場合は、会話を中断せずにその内容を要約し、本人に確認しながら本人が回答できるまで待ちながら実施した。Narrative approachの実施は60分程度の時間を要し、また2回の面接を行なった。研究依頼書にその旨を記載し口頭で説明した。調査及びNarrative approach実施の日時・場所は対象者の希望に沿って行った。心身への負担が感じられた場合は調査及びNarrative approachの実践を途中で中止し、スタッフと管理者へ状況を報告し、看護部長と相談のうえ調査及びNarrative approachの実践を途中で中止し研究のデータとして除外するなど配慮することを十分理解していただいたことを確認して調査等を行った。

7. 研究結果の公表の仕方

研究結果は書面により施設へ報告する。また研究の成果を学会等で公表する際は正確なデータで報告し、口頭と書面で公表することを伝え、施設の承諾なしに公表しない。以上について調査依頼書に記載し、ご理解いただいた。

8. 利益相反

本研究における利益相反はない。

第4章 我が国における Generativity に関する文献的検討

これまで第1章・第2章で述べてきたように、Generativity が老年期の発達において重要な概念であることが報告されてきているが、本章では、我が国における Generativity 研究の動向から Generativity 研究の現状と老年看護学領域における今後の方向性を探る。

第1節 研究目的

我が国は超高齢社会を迎えている。今後ますます高齢者の疾病予防や健康の維持・増進対策が求められており、要介護高齢者に対してもより良い支援の在り方が問われている。近年、心理・社会学領域において Generativity という概念が注目されている。Generativity は、次世代を産み育てるという考え方のみならず、中年期・老年期において自己の創造性や生産性を発揮し、自ら培った知識・技能等を次世代に伝達するという意味も含んでいる。老年期が健康あるいは不健康といういかなる状態にあるにせよ、長い人生を歩んできた高齢者の英知や貢献度を問い直すとともに、高齢者自身が自己の存在価値や生きる意味を自覚し、次世代との交流を図ることが求められる。本調査では Generativity に関する研究動向から看護における高齢者研究への示唆を得ることを目的とした。

第2節 方法

2013年1月～2月の期間に医学中央雑誌、メディカルオンライン、CiNii のデータベースを用いて、2000年～2010年までのデータの「Generativity」「世代性」「継承性」「心理社会的適応」「老年期」「老年期と Generativity の2語」をキーワードとした文献検索した。さらに2015年8月～9月の期間に、同様のデータベースを用いて、2011年～2013年までの「Generativity」「世代性」をキーワードとした文献を検索した。抽出できた文献を学問領域別、掲載種別、公表年別に集計し内容を検討した。

第3節 結果

抽出した2000年～2013年の Generativity に関連する文献は118件であった。一覧を表4-1-1に示す。心理学・教育学領域が73件であり(61.9%：文献No.1～No.73)、医療・保健・看護領域が37件(31.3%：文献No.74～No.110)で、そのうち、母性・小児を対象としたものが21件(文献No.74～No.94)、成人・高齢者を対象としたものが16件(文献No.95～No.110)であった。その他は8件で社会学、情報学等であった(6.8%：文献No.111～No.118)。以下に、検索した時期別に抽出した文献の内容の詳細を述べる。

2000年～2010年の期間の検索結果は医学中央雑誌31件、メディカルオンラインが41件、CiNii が139件、累積では211件であった。学問領域別でみると心理・教育学領域が67件(31.8%)、看護・保健学領域が53件(25.1%)、建築学・生物学・物理学等その他の領域が91件(43.1%)であった。その他の領域を除外し重複した文献を整理すると75件が抽出できた。75件の内訳は学問領域別では心理・教育学領域が44件(58.7%)、看護・保健学領域が31件(41.3%)であり、ライフサイクル別でみると母子39件(52.0%)、老年17件(22.7%)、成人12件(16.0%)、その他7件(9.3%)であった。さらに老年期の17文献に焦点化した場合の学問領域別の文献数は心理・教育学領域16件(94.1%)、看護学領域1件(5.9%)で、掲載種別は原著論文3件、研究報告8件、展望等の総説4件、学会抄録2件であった。その内容は Generativity の概念と尺度の変遷、概念構造の分析、

中年期及び老年期の世代継承性の特質，そして世代継承性と看護について等であった。

さらに，2011 年～2013 年までの「Generativity」と「世代性」に限定したキーワード検索で，重複文献を除外した文献数は 43 件であった。内訳は心理学・教育学領域が 33 件（76.8%），社会学領域が 5 件（11.6%），看護学領域が 4 件（9.3%），その他 1 件（2.3%）であり，そのうち 21 件（48.8%）は老年期に関連した文献であった。

公表年別では 2000 年から 2009 年までは平均 5.4 件であったが，2010 年は 21 件であった。2011 年が 9 件，2012 年が 11 件，2013 年が 23 件であった。

第 4 節 考察

我が国の老年期の Generativity に関する研究公表数は，年々，徐々に増えてきている。そしていくつかの日本語版の尺度が開発され，その尺度に基づいた大規模調査や実証的研究が行われ始めたところである。しかし看護学領域における老年期の Generativity に関する研究は僅か 4 件（文献 No.99, No.107, No.108, No.109）のみであり，現在のところほとんど検討されていないと言える。このことは第 1 章でも述べてきたように，これまで老年期においては身体的健康を維持・改善するというところに目標を置いた支援の研究が中心に行われ，高齢者の強みを生かした心理社会的側面への検討が立ち遅れている現状を示していると考えられる。また Generativity が新しい概念であることから研究されてこなかったことに加えて，Generativity が人間の内面で起こっている心理的なプロセスであることから，その実態を明らかにするには限界もある。特に，高齢者は時代背景や長い人生の経験からの独特な，そして複雑な心理状況が存在することから，本人への聞き取り調査の実施が困難であり，限界があるということが影響しているのであろう。

今日の超高齢社会では健康・不健康を問わず，長生きをするということにおいて，さらに心理社会的ニーズを追究する必要がある。先行研究から中年期・老年期の心理社会的側面や発達の側面との関連があるとされる Generativity という概念は高齢者の存在価値を高めることが考えられ，高齢者の身体的側面だけでなく心理的側面や社会的側面の変化とそれに合わせた支援の検討に繋がる。そして個人あるいは集団におけるその人の尊厳を守りながら必要な生活上の支援をおこなうことに繋がると考える。さらに Generativity は世代間交流において各世代の心理社会的側面に影響を及ぼしあうことが報告され始めている（新木，2005；今西，2009；田渕ら，2013,2014；大場ら，2013；亀井ら，2013；糸井ら，2015）。このことは，高齢者だけでなくケア提供者においても高齢者の Generativity 的視点を理解することが重要な意味を持つことを示していると考ええる。以上のことから，看護独自の視点で老年期の Generativity を追究していくことは老年期の生活の質の向上に寄与することが考えられる。

第 5 節 第 4 章のまとめ

我が国の老年期の Generativity に関する文献から，看護学における高齢者看護への示唆を得ることを目的に文献検討を行った。その結果，看護における Generativity 研究の報告は僅かであった。しかし，高齢者支援の実証的研究もおこなわれるようになってきており，看護独自の視点で老年期の Generativity を追究し，ケアに活かせるような研究への発展が重要である。

表 4-1-1 2000～2013 年における Generativity に関連した 118 文献の一覧表

| | タイトル | 研究者 | 公表年 | 場所 | 種類 | 概要 |
|---|---|------------|------|---------------------------|-----------------------------------|--|
| | | | | | 対象・方法 | |
| 1 | 子どものいない女性の同一性の研究－中年期の同一性地位に関する考察－ | 森川早苗 | 2000 | 家族心理学研究, 14(1), 1-13 | 研究論文 35 歳以上の 6 名 | 中年期の子どものいない女性の事例。子どもを産まないこと、いないことの選択と中年期における同一性の違いを考察 |
| 2 | ライフサイクルにおけるうつと不安 壮年期のうつと不安 | 佐々木大輔 | 2000 | 臨床と研究, 77(5)892-896 | 特集 | 壮年期の自我同一性の葛藤が問題化、人生半ばの壮年期の危機について記述 |
| 3 | 障害児を育てる母親の generativity に関する研究 (1) 知的障害児を育てる母親の子育ての語りから | 船津守久, 季木明穂 | 2000 | 広島大学教育学部紀要, (49), 129-138 | 論文 21 歳の知的障がい児を育てている 45 歳の母親 | 21 歳になるまでの時間軸を 5 段階に区切って自由に話されたライフストーリーを Kotre の generativity の視点から検討している。 |
| 4 | 自閉症児を育てる母親の子育て－generativity のジレンマ (障害児教育) | 船津守久, 季木明穂 | 2000 | 学校教育実践学研究, (6), 139-149 | 論文 19 歳の自閉症児の子どもを育てている 46 歳の母親 | 1 対 1 のインタビュー。出産してから高等部卒業して作業所に通う現在までの子育てについて語ってもらった。理想と現実の間で揺れ動く母親の姿を明らかにした。 |
| 5 | 沖縄系移民の心理・社会的適応過程に関する研究 - - アルゼンチン移民一世のケーススタディから | 井村修 | 2000 | 産業総合研究調査報告書 (8-4), 31-41 | 報告 | 沖縄からのアルゼンチン移民 1 世 2 名を対象に、移民者の心理社会的適応過程を明らかにしている |
| 6 | 人生を物語ることの意味：なぜライフストーリー研究か？ | やまだようこ | 2000 | 教育心理学年報, 39, 146-161 | 展望 | ライフストーリー研究の意義をアイデンティティとジェネラティヴィティと関連させ物語る事による生成される意味について論述 |
| 7 | 中年期の「生殖性 (Generativity)」の発達と自己概念との関連性について | 丸島令子 | 2000 | 教育心理学研究, 48(1), 52-62 | 論文 390 名の一般成人と、41 名の成人患者 | Generativity は年齢が高いほど高値となること、中年期の自己概念の因子構造を検討している。また、健康群、リスク群で Generativity の達成に適応の因子が関係 |
| 8 | エリクソンの子どもたちと生成継承性 (ジェネラティビティ) --もう一人の子どもニールと、親としてのエリクソン (子供の問題) | やまだようこ | 2001 | 教育学年報 8 子どもの問題, 25-48 | 解説 | エリクソンと父親・4 人目の子息子ニールとの関係性からエリクソンの提唱した生成継承性についての解説 |

| | タイトル | 研究者 | 公表年 | 場所 | 種類 | 概要 |
|----|--|----------------------------------|------|--|------------------------------|--|
| | | | | | 対象・方法 | |
| 9 | 成人女性の世代性に関する研究 (2) | 西田裕紀子 | 2002 | 日本教育心理学総会発表論文集, (44), 26 | 抄録 成人女性 294名 | 5歳刻みで4つの年代に振り分け、世代性の感覚、就労状況、社会的活動参加度で分析した。 |
| 10 | 臨床的視点から見た教育研究と教師教育の再構築：福井大学教育地域科学部の取り組みを例に（＜特集＞教育における臨床の知） | 松木健一 | 2002 | 教育學研究, 69(3), 344-356 | 特集 | 教育研究と教師教育の課題を再構成し、理論と実践の関係の捉えなおし |
| 11 | さまよえる中年期から輝ける老年期へ；「英智」のひとは | 丸島令子 | 2002 | 女性学評論, 16, 89-120 | 研究ノート | 成人の自我の発達心理学的研究から、人生の最終段階での人間の能力は何かを「英知」をキーワードとして探る |
| 12 | 移住者のメンタルヘルス アメリカ合衆国におけるボスニア難民の心理社会的適応 | James K. Boehnlein M. D. | 2003 | こころと文化, 2(1) | 会議録（英語） | アメリカ合衆国へ移住した難民の心理社会的適応について課題提供 |
| 13 | 小児がん患者と両親における心理社会的適応 | Chia-Chen Chao , Sue-Huei Chen 他 | 2003 | Psychiatry and Clinical Neuroscience, 57(1), 75-81 | 原著論文（英語） | 8歳から17歳の小児がん患者とその両親に CDI を実施した |
| 14 | 世代性尺度の作成-世代性の関心と行動モデルの測定 | 丸島令子 | 2005 | 心理臨床学研究, 23(4), 422-433 | 原著論文 36～79歳の156名, 167名へ調査 | McAdams & Aubin による概念モデルと尺度を用いて日本語版世代性関心尺度を作成 |
| 15 | E. H. Erikson のジェネラティヴィティーに関する基礎的研究-多面的なジェネラティヴィティー尺度の開発を通して | 串崎幸代 | 2005 | 心理臨床学研究, 23(2), 197-208 | 研究論文 19～69歳の一般成人への調査 | 既存の尺度にはない否定的要素を含んだジェネラティヴィティー尺度の開発を試みている |
| 16 | 発達臨床心理学から見た「親に慣れない親」の理解と援助 | 岡本祐子 | 2006 | 母性衛生, 46(4), 480-483 | シンポジウム抄録 | 幼児虐待や養育への無責任性など親性の未熟さが課題となっていることから、発達臨床心理的側面から検討している |
| 17 | 喪失といのちのライフストーリー（焦点 健康と病いの語り（ナラティブ）） | やまだようこ | 2006 | 日本保健医療行動科学会年報, 21, 34-48 | 焦点：健康と病いの語り | 個々の喪失といのちの語りのとライフストーリーの意味を語り、個人にとどまらない文化の Generativity の働きを探っている |

| | タイトル | 研究者 | 公表年 | 場所 | 種類 | 概要 |
|----|---|--------------|------|-----------------------------------|---|---|
| | | | | | 対象・方法 | |
| 18 | 成人の心理社会的発達研究：Erikson 理論における「世代性 (generativity 測定の試み：世代性の関心，行動，ナレーションから) | 丸島令子 | 2006 | 人間科学科紀要, 2, 31-48 | 原著論文 | 日本における世代性関心尺度の尺度開発について成人期の心理社会的発達課題を検討 |
| 19 | 発達的に気がかりな幼児の発達の・行動的特徴 | 戸ヶ崎泰子，立元真 | 2007 | 日本行動療法学会発表論文集, 33, 412-413 | 抄録 幼稚園教諭 32 名，園児 138 名，養護者 446 名の 中から 28 名 を分析 | 発達障がい児の乳幼児の早期発見を可能にするために幼稚園教諭へのチェック項目などの調査を実施した結果を報告している |
| 20 | 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性，妥当性 | 丸島令子 有光興紀 | 2007 | 心理学研究, 78(3), 303-309 | 資料 大学生—28 歳同窓生へ 調査 | 2005 年の尺度開発で課題となった点を改定し信頼性・妥当性を検証 |
| 21 | 成人期のサスティナブルな信念の個人差に関する研究 (2) | 堀毛一也 | 2008 | 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, (17), 46-47 | 抄録 大学の学生 250 名の両親 のうち 391 名 | 世代性関心尺度と世代継承性信念をもたらすパーソナリティ特性や主観的充実感との関連を検討している。世代継承意識が flourishing(元気感)の有効な説明要因となる |
| 22 | 自己を書くことと記憶—アルヴァックスの自伝的記憶 (特集 自己と記憶) | 小林多寿子 | 2008 | 心理学評論, 51(1), 184-195 | 特集 | 自己の書くことと記憶について，既存の研究から明らかにしようとするもの |
| 23 | 企業における親密な対人関係とミドル期の世代継承性との関連性 (ミドル人材のブレイクスルーを考える) | 笠井恵美 | 2008 | Works review, 3, 60-73 | 論文 40～48 歳の 18 名 | 職業人生中心のライフストーリーインタビューを行い，ミドル期は企業内で親密な関係を有し，その関係は救われた，守られた，導かれた物語として語られた |
| 24 | 口唇裂口蓋裂児の母親の心理社会的適応と支援ニーズに関する研究 | 足立智昭，幸地省子 | 2008 | 宮城学院女子大学発達科学研究, (8), 51-69 | 紀要研究 対象疾患児の母親 71 名 | 口唇裂口蓋裂児の親の心理的社会的適応ニーズを質的分析で明らかにし，家族支援プログラムを検討している |

| | タイトル | 研究者 | 公表年 | 場所 | 種類 | 概要 |
|----|---|--------------------------|------|------------------------------|--------------------------------|--|
| | | | | | 対象・方法 | |
| 25 | 特集 小児気管支喘息のいま、喘息とうまく付き合うための援助 学童期喘息時のライフスキルを育む健康教育 自己管理と心理社会的適応向上に向けて | 村田恵子, 内正子 | 2008 | 小児看護, 31(10) 1409-1417 | 解説 | ライフスキル健康教育を応用した気管支喘息児と親への健康教育プログラムの研究的取り組みを紹介している |
| 26 | 不妊治療を経験した女性たちの語り「子どもを持たない人生」という選択 | 竹家一美 | 2008 | 質的心理学研究, 7, 118-137 | 原著論文 「子どもをもたない人生を選択した女性 9 名 | 受容プロセスを明らかにした。社会化を実現することで不妊を乗り越えていた。語りからは肯定的な意味付けと発達の側面が示唆された。 |
| 27 | 父親の育児関与の発達の意義 (特集 父親・父性と子どもー (父親・父性環境と子ども) | 大野祥子 | 2008 | 世界の児童と母性, 65, 23-27 | 特集 | 父親の役割と父親の育児が子どもの発達に与える影響について解説し、父親にとっての育児の意味を述べたのち、父親の育児関与を高めることについて述べている |
| 28 | 部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響：部活動のタイプ・積極性に注目して | 岡田有司 | 2009 | 教育心理学研究, 57(4), 419-431 | 研究論文 中学生 894 名 | 部活動をしている子は学校生活の心理的適応の得点は高く、運動部の生徒は反社会的傾向が高い、友人関係と教師との関係は適応に影響 |
| 29 | 中学生の能動的・反応的攻撃性と心理社会的不適応との関連：2 種類の攻撃性と反社会的行動欲求および抑うつ傾向 | 濱口佳和, 石川満佐育, 三重野祥子 | 2009 | 教育心理学研究, 57(4), 393-406 | 研究 中学生 603 名 | 反応的・能動的攻撃性の因子構造を明らかにした。反応的、支配的能動的、利己的の斜交 3 因子モデルが最適。攻撃性と鬱との関連を明らかにした |
| 30 | 大学生の perfectionism とメンタルヘルスとの関係：大学生版perfectionism Scaleの作成及び集団適応効力感を媒介変数とした検討 | 煙山千尋, 清水安夫 | 2009 | 学校メンタルヘルス, 12(2), 61-70 | 原著論文 首都圏 4 私立大学の大学生 240 名 | 大学生版perfectionism Scale作成の妥当性を検討している。探索的因子分析を行い 5 つの因子が抽出。今後は集団適応効力感をたかめる介入が必要 |
| 31 | 祖父母世代の地域子育て支援への意欲と世代継承性との関連に関する検討 | 田淵恵, 藤田綾子 | 2009 | 老年社会科学, 31(2), 175 | 抄録 50 代以上の 236 名への調査 | 祖父母世代の地域の子育て支援策に対する意欲を説明するモデルの検証。世代継承性が意欲を説明する重要な媒介要因 |

| | タイトル | 研究者 | 公表年 | 場所 | 種類 | 概要 |
|----|--|------------------------------|------|---------------------------------------|-------------------------------------|---|
| | | | | | 対象・方法 | |
| 32 | 大学生の愛着スタイルとソーシャルスキルおよび心理・社会的適応との関連 | 堀匠, 小林丈真 | 2010 | 学校メンタルヘルス, 13(1), 41-48 | 資料論文 大学生 650 名 | 愛着スタイル尺度に関してクラスター分析を行い, 安定群とアンビバレント群, 回避群に分け, これを独立変数として, ソーシャルスキル, 友人サポート, 精神的不健康度を従属変数とした一元配置分散分析を行い, アンビバレント群は感情統制等が低く, 回避群は関係維持が低いなどを明らかにした |
| 33 | 放課後の活動と中学校への心理社会的適応 (青年分科会) | 岡田有司 | 2010 | 心理科学, 30(2), 90 | 抄録 | 分科会での研究報告とコメント内容の報告。部活動と学校への心理社会的適応に関する報告と, 学校外活動と学校への心理社会的適応に関する発表へのコメントと分科会の内容報告 |
| 34 | 喉頭摘出術を受けた患者の心理的適応に関する検討 食道発声教室参加者を対象として | 白川陽子, 濱口佳和, 花澤豊行, 他 | 2010 | カウンセリング研究, 40(2), 93-102 | 原著論文 喉頭摘出者 503 名 | 心理社会的適応尺度原版, 自己肯定意識尺度, 不安・うつ尺度, 怒り喚起・持続尺度を使用し調査。喉頭摘出者の心理社会的適応として, 「再適応への努力」「日常生活の享受」「低対人過敏性」の3因子が抽出 |
| 35 | 中年期から老年期に至る世代継承性の変容 | 深瀬裕子 岡本祐子 | 2010 | 広島大学大学院教育学研究 科紀要, 59, 145-152 | 紀要論文 65-86 歳, 20 名に半構造 化面接 | 中年期と老年期の世代継承性の特質を検討し, その変容を明らかにしている |
| 36 | 老年期における心理社会的課題の特質:Erikson による精神的分析的個体発達文化の図式第Ⅷ段階の再検討 | 深瀬裕子 岡本祐子 | 2010 | 発達心理学 研究, 21(3), 266-277 | 原著論文 65-86 歳, 20 名に半構造 化面接 | エリクソンの8つの心理社会的課題の特質を肯定・否定のバランスの観点からとらえ, 日本における心理社会的課題を検討している |
| 37 | 世代性 (Generativity) の概念と尺度の変遷 | 田淵恵 | 2010 | 生老病死の行動科学, 15, 13-20 | 展望論文 | 欧米と日本における文献から, 世代性の概念と測定するための尺度の変遷を論述 |
| 38 | 世代間関係における Generativity の可能性-Narrative Approach の立場から | 西山直子 | 2010 | 京都大学大学院教育学研究 科紀要, (56), 345-357 | 紀要論文 | 重層的親子関係が希薄化。Narrative Approach と Generativity との関係から世代間の関係性への可能性を探る |

| | タイトル | 研究者 | 公表年 | 場所 | 種類 | 概要 |
|----|--|----------------------------------|------|---------------------------------|-------------------|--|
| | | | | | 対象・方法 | |
| 39 | 高齢者の「世代性 (Generativity)」行動と心理的 Well-being との関連-若年者からのフィードバックに着目して- | 田淵恵, 中川威, 石岡良子, 河崎円香, 権藤恭之, 丸島令子 | 2010 | 老年社会科学, 32(2), 164 | 抄録 | 高齢者の世代性の行動は心理的 Well-being に直接関係せず, 若者からのネガティブな高齢者へのフィードバックが媒介している。若者からポジティブなフィードバックが得られるシステムが必要 |
| 40 | 陶器職人における専門家アイデンティティの生成と継承 (1) 島袋常秀氏の人と仕事をめぐって | 岡本祐子 | 2010 | 広島大学心理学研究, (10), 121-145 | 紀要論文 沖縄の陶芸家の語り | 陶器職人の専門家アイデンティティの生成と継承のプロセス, それにかかわる要因を分析している。結果, 基本的信頼感, 自律性, 自主性, 勤勉性, アイデンティティ達成というテーマが重要な意味を持って発達・深化していた |
| 41 | 高齢者向けの generativity 尺度 (世代性尺度) の開発の試み-予備調査の方向- | 大場宏美, 藤原佳典, 中野久美子 | 2011 | 老年社会科学, 33(2), 288 | 抄録 | Hopkins Generativity Index を参考にした日本版尺度開発の予備調査 |
| 42 | 高齢者の次世代に対する利他的行動意欲における世代性の影響 | 田淵恵, 権藤恭之 | 2011 | 心理学研究, 82(4), 392-398 | 研究報告 | 高齢者の地域子育て支援意欲を, 高齢者の次世代に対する利他的行動意欲の一つとして高齢者の利他的行動が社会発展に寄与する社会システムとしての仮説モデルを検証 |
| 43 | 高齢者の世代性および世代性行動と心理的 Well-being との関連 若年者からのフィードバックに着目して | 田淵恵, 中川威, 石岡良子他 | 2011 | 老年社会科学, 33(2), 329 | 抄録 | 若年者から受けるフィードバックに着目してモデルの検証 |
| 44 | 伝承芸能の伝承の語りからとらえる generativity の型: Erikson の発達に対する文化という視座 | 竹内一真 | 2011 | 日本パーソナリティ心理学会退学発表論文集, (20), 125 | 抄録 | 特徴的な文化を継承する個人を対象としてどのように自らの人生を世代と世代の関係の中に意味づけているのかを考察している |
| 45 | 人格の研究 3 | 嶋崎裕志 | 2011 | 大成学院大学紀要, 13, 69-77 | 紀要論文 | 「意」は, 「今現在明らかでないことを何とか既知の枠を広げて理解していきたい, 言語化していきたい, という人間の取り組みであり, 営みである」と考えに至るまでの記述 |

| | タイトル | 研究者 | 公表年 | 場所 | 種類 | 概要 |
|----|--|-------------------------|------|-----------------------------------|--------------------|---|
| | | | | | 対象・方法 | |
| 46 | 陶器職人における専門家アイデンティティの生成と継承 (2) 島袋常秀工房の師弟関係から見た世代継承性のミクロな分析 | 岡本祐子 | 2011 | 広島大学心理学研究, 11, 173-187 | 紀要論文 | Erikson の精神分析的個体発達文意あての図式の視点から、陶器職人の熟達プロセスを実証的に検討している。 |
| 47 | 高齢世代が若者世代からポジティブなフィードバックを受け取る場面に関する研究 | 田淵恵, 権藤恭之 | 2011 | 日本世代間交流学会誌, 1 (1), 81-87 | 原著論文 | 高齢者世代が若者世代からポジティブなフィードバックを受け取る場面について自由記述を検討 |
| 48 | シングルファザーの子育てと親の発達 | 平沼晶子 | 2011 | 家族心理学研究 25 (1), 68-82 | 資料 シングルファザー22 名 | 生活や子育てにおける問題構造を明らかにし、親としての成長を検討している |
| 49 | オーラルヒストリーとピルグリメージ：日系アメリカ人の聖地とく巡礼＞（＜特集1＞四国遍路-ピルグリメージとオーラルヒストリー） | 小林多寿子 | 2012 | 日本オーラル・ヒストリー研究 (8), 31-46 | 特集 | ミニドカ・ピルグリメージをオーラルヒストリーとしての有効性について、進路論と併せて世代継承性と連動しての語り |
| 50 | 高齢者における短縮版 Generativity 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 | 田淵恵, 中川誠, 権藤恭之 | 2012 | 厚生指標, 59 (3), 1-7 | 原著論文 | これまでの世代性尺度から 5 項目による短縮版尺度を開発 |
| 51 | 高齢者の世代性及び世代性行動と心理的 Well-being の関係：若者からのフィードバックに着目した検討 | 田淵恵, 中川誠, 石岡良子 | 2012 | 日本世代間交流学会誌, 2 (1), 19-24 | 原著論文 中高年 287 名 | 感情的 Well-being 尺度を用いて若者からのフィードバックの媒介要因について検証 |
| 52 | 「経験の伝承」における生涯発達の視点からの先行研究の検討：generativity 研究に焦点を当てて | 竹内一真 | 2012 | 京都大学大学院教育学研究科紀要, (58), 383-395 | 紀要論文 | generativity 研究を振り返ることで、これまでどのように後続世代とのかかわりというテーマが生涯発達の中で取り上げられてきており、そして、生涯を通じて培ってきた経験を伝えるという観点からどのような研究が求められているのかを考察 |
| 53 | 老年期の Generativity 研究の課題：その心理社会的適応メカニズムの解明に向けて | 小澤義雄 | 2012 | 老年社会科学, 34 (1), 45-56 | 資料論文 | 老年期の Generativity 研究を概観し、今後の課題を提示 |
| 54 | 心理臨床家のプロフェッションの生成と継承 (2) 唯一無二の人生・体験への喜び | 深瀬裕子, 岡本祐子, 上手由香他 | 2012 | 広島大学心理学研究, (12), 117-126 | 研究論文 | 1 名の心理臨床家の語りから専門性生成と継承の特徴、後進である面接実施者に生じた継承を検討 |

| | タイトル | 研究者 | 公表年 | 場所 | 種類 | 概要 |
|----|---|-----------------------------|------|--|--|---|
| | | | | | 対象・方法 | |
| 55 | Austen Riggs Center の臨床活動と世代継承性 | 岡本祐子 | 2012 | 広島大学心理学研究, (12), 285-304 | 研究論文 | Erikson 等も臨床と研究に携わっていた Austen Riggs Center を紹介 |
| 56 | 心理臨床家のプロフェッショナルの生成と継承 (1) 理想の心理臨床家の追求 | 神谷真由美, 岡本祐子, 上手由香, 他 | 2012 | 広島大学心理学研究, (12), 103-115 | 研究論文 | 1 名の心理臨床家のライフストーリーから専門家アイデンティティ生成と継承の過程を検討 |
| 57 | 高齢者の世代性 (Generativity) および世代性行動と心理的 Well-being との関連 若者からのフィードバックに着目した短期パネル調査による検討 | 田渕恵, 中川誠, 権藤恭之 | 2012 | 日本心理学会大会発表論文集 76 回, 960 | 抄録 1 時点目は 1250 名, 2 時点目は 1280 名の高齢者 | 高齢者の世代性と世代性行動と, 若者からのポジティブ及びネガティブなフィードバックとの心理的 Well-being の関連について仮説検証 |
| 58 | 高齢者向け Generativity 尺度の開発の試み | 大場宏美, 村山陽, 野中久美子 他 | 2012 | 日本健康教育学会誌, 20, Suppl., 131 | 抄録 | 日本の実情に合った尺度開発調査の結果を報告 |
| 59 | 世代間交流プログラムの評価に向けた日本語版 Generativity 尺度の作成の試み | 大場宏美, 藤原佳典, 村上陽 | 2013 | 日本世代間交流学会誌, 3 (1), 59-65 | 原著論文 地域高齢者 3000 名 | 日本での世代間交流プログラムを評価するための尺度開発の検証 |
| 60 | 高齢者における世代性 (Generativity) と次世代とのかかわり行動の因果関係: 性差に着目した検討 | 田渕恵, 三浦麻子, 中川誠 | 2013 | 日本世代間交流学会誌, 3 (1), 35-40 | 原著論文 高齢者 400 名 | 中年期以降の世代性と, 次世代とのかかわり行動との因果関係を検討。男性は世代性と行動の双方向からの循環モデル, 女性は行動から世代性へのパスのみが有意 |
| 61 | 高齢者の利他的行動場面における世代間相互作用の実験的検討 (ライフサイクル 2: 青少年・高齢者の適応支援, コミュニケーションの心理及び一般) | 田渕恵, 三浦麻子 | 2013 | 電子情報通信学会技術研究報告, HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎, 112 (412), 119-123 | 研究論文 高齢者 18 名 | 高齢者の若者に対する利他的行動と若者からの反応によって心理発達の側面への影響を実験的に検証 |
| 62 | 成人・老人を対象とする発達研究の動向 | 若本純子 | 2013 | 教育心理学年報, 52 (0), 24-33 | 研究論文 | 2009 年～2010 年刊行の 4 雑誌と 1 発表論文集に掲載された成人期と老年期の発達研究の動向を検討 |

| | タイトル | 研究者 | 公表年 | 場所 | 種類 | 概要 |
|----|---|------------------------------|------|--------------------------------------|-------------------|--|
| | | | | | 対象・方法 | |
| 63 | 沖縄に学ぶ世代継承性とライフサイクル：－沖縄の伝統文化を次世代教育にどう生かすか－ | 岡本祐子, 坂本清治, やまだようこ | 2013 | 教育心理学年報, 52(0), 212-214 | 学会準備委員会企画シンポジウム報告 | 沖縄における世代継承性とライフサイクルについての話題提供と討論内容をまとめている |
| 64 | 高齢者の Generativity(世代性)と同居家族の種類との関連 | 大場宏美, 藤原佳典, 村上陽 | 2013 | 日本公衆衛生学会総会抄録集 72 回, 455 | 抄録 | 日本語短縮版 generativity 尺度を用いて同居家族との関連を検証 |
| 65 | 不登校の子どもをもつ母親の generativity に関する研究：ナラティブ・アプローチの視点から | 六車則子, 辻河昌登 | 2013 | 発達心理臨床研究, 19, 43-54 | 原著論文 | 不登校の我が子を持つ母親の generativity の様相をナラティブ・アプローチの枠組みから検討 |
| 66 | 心理臨床家のプロフェッションの生成と継承 (5) 専門性の中に個人的資質がいきること | 上手由香, 岡本祐子, 奥田紗史美 他 | 2013 | 香川大学教育学部研究報告, 第 1 部, (140), 45-58 | 研究論文 | 1 名の心理臨床家の語りをもとに理論的概念的な値と実践値がどのように統合されるか等を検討 |
| 67 | 心理臨床家のプロフェッションの生成と継承 (4) 活力と信じることをめぐって | 奥田紗史美, 岡本祐子, 上手由香他 | 2013 | 香川大学教育学部研究報告, 第 1 部, (140), 29-44 | 研究論文 | 中年期の心理臨床家に若手臨床家が面接をおこない、その語りから次世代への継承プロセスを検討 |
| 68 | 心理臨床家のプロフェッションの生成と継承 (3) 自己への直面化, 経験を言葉にすること | 前盛ひとみ, 岡本祐子, 上手由香 他 | 2013 | 香川大学教育学部研究報告, 第 1 部, (140), 11-28 | 研究論文 | 1 名の心理臨床家のライフストーリーから専門性の獲得や深化, 具体的継承性, 自己の発達等を検討 |
| 69 | ケアの与えに必要な心理的要因について：ジェネラティビティを支えるもの | 串崎幸代 | 2013 | 千里金欄大学紀要, 10, 79-83 | 研究ノート | 質の高いケアを提供するための資質を文献研究から考察している |
| 70 | ゲーム産業における女性開発者のキャリア発達：創造的専門家のライフストーリーからの展望 | 藤原正仁 | 2013 | 情報学研究 | 紀要論文 | ゲーム産業の女性に焦点を当て、開発者のキャリア発達過程と意識や行動の特徴を明らかにすることを目的としている |
| 71 | 女性運動に参加した女性たちのコミュニティ感覚と世代継承性について：「生活者」としての女性たちの語りを通して | 中川浩子 | 2013 | コミュニティ心理学研究, 17(1), 15-30 | 原著論文 | 1980 年代から 1990 年代に女性運動に参加した女性の語りからコミュニティ感覚の特徴, 次世代への継承について検討 |

| | タイトル | 研究者 | 公表年 | 場所 | 種類 | 概要 |
|----|--|--------------------|------|----------------------------------|------------------------------------|---|
| | | | | | 対象・方法 | |
| 72 | 老年期における世代間継承の認識を伴う自己物語の構造 | 小澤義雄 | 2013 | 発達心理学研究, 24(2), 183-192 | 原著論文 健康な高齢者 31 名のうちの 9 名 | 正の世代間継承と負の継承を分断する世代間緩衝の認識の語りの類型化と構造化を分析 |
| 73 | 青年性, 世代性, 個別性から見た青年期の気力ー無気力 (自主企画シンポジウム) | 大野久, 西平直喜, 三好昭子, 他 | 2013 | 日本教育心理学会総会発表論文集, (55), S172-S173 | 自主企画シンポジウム抄録 | 青年期の気力ー無気力を「青年性」「個別性」「世代性」の視点から話題提供 |
| 74 | 少子社会における個人及び社会の養育力に関する母子保健学的研究 (第一報) 文献研究 | 宮原忍, 千賀悠子, 齋藤幸子他 | 2001 | 日本子ども家庭総合研究所紀要, 37, 97-115 | 原著論文 プロジェクト報告 (文献研究) | チーム研究の第一報で, 文献の検討を行っている |
| 75 | 少子社会における養育力と価値観に関する研究 (1) EPSI (エリクソン心理社会的段階目録検査) とライフサイクル | 齋藤幸子, 宮原忍, 竹井操, 他 | 2003 | 日本子ども家庭総合研究所紀要, 40, 129-142 | 研究プロジェクト報告 15 歳～25 歳 男女 | 文献研究を元に作成した SOC13 項目と対人関係スキル 9 項目の尺度と EPSI の分析。EPSI と SOC, EPSI と対人関係スキルとの相関は高い |
| 76 | 次世代育成力を育む家庭環境についての一考察 | 齋藤幸子, 宮原忍 | 2003 | 日本子ども家庭総合研究所紀要, 40, 217-222 | 研究プロジェクト個別研究 25 歳～54 歳の男女 635 名 | 次世代の育成力を高めるための家庭支援策を考えるため, 親の養育態度と子の人格発達・次世代育成能力との関連を調査。家庭環境は雰囲気があることなどが要因である |
| 77 | 少子社会における養育力に関する研究 次世代育成に関するアンケート調査 | 齋藤幸子, 宮原忍, 星山佳治 | 2003 | 母性衛生, 44(3), 197 | 抄録 25～54 歳, 635 名の調査 | 人格の成熟度の高い人は次世代育成力が高い。養育力の高いほかの要因は成育過程, 両親, 家庭外の多様な人とのふれあい経験の豊富さである |
| 78 | 大腸がん非ストマ造設手術療法後患者の心理社会的適応に関する要因のライフステージによる比較研究 | 西垣昌和, 数馬恵子 | 2004 | 第 24 回日本看護科学学会学術集会講演集, 373 | 抄録 非高齢者 59 名, 高齢者 34 名 | 心理社会的適応の多次元測定尺度 (RAIS-SR) を用いて年代で比較, 高齢者群は身体症状, 個人的要素が心理社会面に影響 |
| 79 | 少子社会における育成力の背景とその育成に関する研究 (3) 乳幼児をもつ保護者の養育力と育児観に関する調査 | 齋藤幸子, 宮原忍, 竹井操 | 2005 | 日本子ども家庭総合研究所紀要, 42, 113-125 | 研究プロジェクト報告 乳幼児を持つ親 323 名 | EPSI を用いて育児観と養育力を分析。EPSI 高い群は肯定的な育児についての自己効力感を持っていた。SOC は有意味感が肯定的な育児意識に関連 |

| | タイトル | 研究者 | 公表年 | 場所 | 種類 | 概要 |
|----|---|------------------------------|------|------------------------------------|--|--|
| | | | | | 対象・方法 | |
| 80 | 少子社会における育成力の背景とその育成に関する研究 (1) ワーク・ライフ・バランスと養育力に関する調査 | 齋藤幸子, 宮原忍, 内山純子 | 2006 | 日本子ども家庭総合研究所 紀要, 44, 145-164 | 研究プロジェクト報告 大学生 199 名, その親 55 名, 乳幼児を持つ親 189 名 | EPSI と首尾一貫感覚 (SOC) を用いて, 大人観, 育児観, 生活バランス感覚を分析。人格の成熟度が高い群は育児を楽しいと感じ, 人づきあいが得意 |
| 81 | 若い成人期にある初産婦の特徴から見た養育力の要因とその構造 | 秋田早紀子, 遠藤俊子 | 2006 | 山梨県母性衛生学会 誌, 5, 31-40 | 研究論文 | 若い成人期の初産婦の特徴と養育力に関わる要因と構造を質的 (GTA) に解明 |
| 82 | 少子社会における育成力の背景とその育成に関する研究 (2) ワーク・ライフ・バランスとジェネラティビティ行動 | 齋藤幸子, 宮原忍, 近藤洋子 | 2007 | 日本子ども家庭総合研究所 紀要, 44, 141-164 | 研究プロジェクト報告 20-30 代の仕事をを持つ男女 440 名 | エリクソン心理社会的段階目録検査 (EPSI) とワークライフバランス, ジェネラティビティ行動, 大人観, 育児観の関連を調査 |
| 83 | 少子社会における養育力の背景とその育成に関する研究 (3) 高校生の性役割観と将来観に関する調査 | 齋藤幸子, 宮原忍, 内山純子 | 2008 | 日本子ども家庭総合研究所 紀要, 45, 143-169 | 研究プロジェクト報告 7 回にわたり延べ 2839 名への調査 | エリクソン心理社会的段階目録検査を用いて人格の成熟度と次世代育成力の関連を検証。次世代育成力を育むには成人前期までのケアが重要 |
| 84 | 青年期の次世代育成力尺度の開発とその検討 | 菱谷純子, 落合幸子, 池田幸恭, 他 | 2009 | 母性衛生, 50 (1), 132-140 | 原著論文 予備調査と 1091 名の本調査 | 青年期の次世代育成力測定尺度を開発。4 因子が抽出, 信頼性妥当性ともに確保された |
| 85 | ジェネラティビティを上位概念とした次世代育成力に関する研究—少子化の根底にあるもの— | 齋藤幸子, 宮原忍, 近藤洋子 | 2010 | 母性衛生, 51 (1), 180-188 | 研究報告 | 少子社会における世代継承からの文献研究。Generativity の概念説明, 日本人の養育性等の価値観の変容, 青年期の親子間の継承と不妊症の経年変化について報告 |
| 86 | 青年期の次世代育成力と親からの存在肯定メッセージとの関連 | 菱谷純子, 落合幸子, 池田幸恭, 他 | 2010 | 母性衛生, 50 (4), 552-559 | 原著論文 青年期の者 1091 枚中, 631 部回収 | 親からの存在肯定メッセージは, 次世代育成力と直接的に関連し, 基本的信頼感を介して間接的に関連している |
| 87 | 大学生における次世代育成力と母親に対する感謝との関係 | 池田幸恭, 菱谷純子, 高木有子, 他 | 2010 | 茨城県立医療 大学紀要, 15, 42-52 | 原著論文 大学生 223 名 | 青年者が母親に対する感謝を感じることは, 母親との関係だけでなく, 次世代の子どもたちを育てる自信につながる |

| | タイトル | 研究者 | 公表年 | 場所 | 種類 | 概要 |
|----|--|---------------------|------|-------------------------------|--------------------------------------|---|
| | | | | | 対象・方法 | |
| 88 | 女性の生殖性 (generativity) を意識した次世代養育健康教育の提案 | 上澤悦子 | 2010 | 日本不妊カウンセリング学会誌, 9(1), 15-16 | 抄録 合計 700 名 | PRECEDE-PROCEED Model を基に健康教育プログラムを実施し, 因子分析の結果を基に参加型プログラムの効果を評価 |
| 89 | 不妊女性のための次世代養育健康教室の検討 | 上澤悦子, 川口 毅 | 2010 | 心身健康科学, 6(1), 53 | 抄録 参加型群 40 名, 対象群 69 名 | 不妊治療中の女性を対象とした教室の効果を参加型教室と講義型教室で比較。参加型教室は次世代養育の意義の検討には有効 |
| 90 | 不妊女性の生殖性 (generativity) に焦点を当てた次世代養育プログラムの開発 | 上澤悦子, 川口 毅 | 2010 | 心身健康科学, 6(2), 82-90 | 原著論文 22 名 | 不妊治療中女性の参加型教育と情報提供型教育の意識調査からプログラム目標到達について検討 |
| 91 | 子どもを望んでいる女性の生殖性 (generativity) 意識の影響因子 | 上澤悦子, 川口 毅 | 2010 | 日本生殖看護学会誌, 7(1), 12-19 | 原著論文 不妊女性 313 名, 経産婦 256 名 | 子どもを望む女性の generativity 意識は 11 因子抽出でき, 両者の比較の結果で不妊女性群の子ども希求意識, 影響因子がわかった |
| 92 | 未来をつくる思春期の若者たちに今, 求められる支援 | 高村寿子 | 2010 | 泌尿器ケア, 15(7), 677 | 巻頭言 | ホンジュラスの若者の現状は日本の若者が抱える問題でもある。その解決策にふれる |
| 93 | 入院切迫早産妊婦の心理社会的適応状態について | 中村康香, 吉沢豊予子, 跡上富子 | 2010 | 日本看護科学学会学術集会講演集, 第 30 回, p342 | 抄録 189 名を対象 | ローリスク妊婦と入院切迫早産妊婦の心理社会的適応から必要な支援を検討している |
| 94 | 低身長児が自分の身長に抱くイメージと心理社会的適応の関連 対面式イメージ身長法と従来法の比較 | 西村直子, 遠藤有里, 南前恵子, 他 | 2010 | 日本成長学会雑誌, 16(2), 124 | 抄録 6 歳~18 歳 正常身長群 455 名と低身長群 81 名 | 開発した対面式は従来のシルエット式より生徒が正しいイメージ身長を評価できる可能性を示唆 |
| 95 | 外来通院中の成人造血器主要患者の心理社会的適応に関連する要因の研究 | 永田智子 | 2001 | 日本がん看護学会誌, 15(1), 5-15 | 原著論文 | 対象である患者の適応を職業, 家庭, 社会活動, 情緒の 4 側面から関連する要因を検討している |
| 96 | 難病の子どもの将来について - 成長・発達に伴う生活上の問題について心理学からのアプローチ | 足立智昭 | 2002 | 小児看護, 25(12), 1596-1600 | 特集 | 難病の小児慢性疾患児の心理的課題から発達段階における援助のポイントを概説 |
| 97 | 資料 糖尿病を持つ思春期の子どもと病気管理: クリティカルレビュー | 戸村道子 | 2002 | 日本赤十字広島看護大学紀要, 2, p83-89 | 資料論文 | 糖尿病を持つ思春期の子どもに関する文献的検討 |

| | タイトル | 研究者 | 公表年 | 場所 | 種類 | 概要 |
|-----|---|------------------|------|-----------------------------------|-------------------------------|---|
| | | | | | 対象・方法 | |
| 98 | 脳血管障害による歩行障害のある成人-高齢者の身体的-心理社会的適応と家族介護者の介護負担感と満足感の関係 | 新田静江 | 2003 | 看護研究, 36(1), 41-52 | 原著 歩行障害のある18歳以上, 施設利用中の91組 | 歩行障害をもつ成人・高齢者が障害を持ちながら生活するうえでの適応とその家族介護者の負担感・満足感の関係を明らかにしている |
| 99 | Erikson の祖父母的世代継承性と高齢者の看護-臨床実習の場は「世代間交流の場」でもある | 新木真理子 | 2005 | 総合看護, 40(3), 17-23 | 解説 | 世代継承性の説明, 及び看護学生と高齢者の関係性を祖父母的世代継承性の視点で解釈している |
| 100 | 基調講演 がん看護における適応看護理論の有効性 - 特に心理社会的適応様式統合の検討をととして - | 小野興子 | 2005 | 日本適応看護理論研究会学術論文集, 4(1), 1-20 | 研究 | 婦人科がん治療後のがん体験者の語りをロイ適応看護モデルで分析, モデルの有効性を検証 |
| 101 | 「障害受容」概念の文献的考察 - 社会的文脈からとらえる新しい障害受容の概念 | 下村晃子 | 2007 | 国際リハビリテーション看護研究会誌, 6(1), 33-39 | 総説 | PubMed, J-DreamII を用いて文献検索を行い, 得られた58件を分析。結果5つの概念を抽出した |
| 102 | がん体験者の適応に関する研究の動向と課題 | 砂賀道子, 二渡玉江 | 2007 | 群馬保健学紀要, 28, 61-70 | 紀要論文 医学中央雑誌で文献190研究 | 原著論文のみで記述統計値と内容分析を行っている。2001年を境に研究数が増加し, 因子探索研究が7割を超えていた |
| 103 | 訪問リハビリテーションにおける老年期のクライアントからのセラピストへの祖父母性 (grandparenthood) の発現と生きることの質 | 今西美由紀 | 2009 | 作業療法, 28(2), 157-166 | 原著論文 1症例研究 | 老年期のクライアントとセラピストとの関係は相互性・世代性に添って発達するとクライアントに祖父母性が発現しクライアントの主体性やQOLが向上する。セラピストの相互性・世代性の認識が必要 |
| 104 | 子育て経験を持つ成人女性による一時預かり活動-支援することによる発達 | 加藤道代 | 2010 | 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 50(2), 153-168 | 紀要論文 49～59歳の女性5名 | 半構造化面接を行い, 乳幼児一時預かり活動の支援者自身の意味を検討している |
| 105 | 障害に対し心理・社会的に適応していった脳血管障害後遺症者の事例 - ICFモデルにおける「活動」への働きかけを通して | 中越竜馬, 横井輝夫, 加藤美樹 | 2010 | 吉備国際大学保健福祉研究所研究紀要, (11), 1-4 | 紀要論文 | ICFの視点から活動から参加へ至った1事例を検討している |

| | タイトル | 研究者 | 公表年 | 場所 | 種類 | 概要 |
|-----|--|-------------------|------|----------------------------|-------------------|--|
| | | | | | 対象・方法 | |
| 106 | 特別養護老人ホーム職員のジェネラティビティと仕事の有能感の関連 | 新木真理子 | 2011 | 日本老年医学学会雑誌, 48(6), 679-685 | 原著論文 介護施設の職員 | 介護施設の職員のジェネラティビティ発達と仕事の有能感の関連を明らかにしている |
| 107 | 地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果：文献レビュー | 糸井和佳, 亀井智子, 高田悦子他 | 2012 | 日本地域看護学会誌, 15(1), 33-44, | 総説 | 26 論文を対象にアウトカムモデルを使用して分析し、高齢者と子どもの寮世代には相互理解、世代継承性の増加、心理的・身体的・社会的 Well-being 等に効果があり、プログラムの確立が必要と指摘 |
| 108 | 地域で生活する健常高齢者の Generativity の概念分析、及び主観的幸福感、自尊感情との関係性 | 讃井真理, 河野保子 | 2013 | 第 33 回日本看護科学学会学術集会講演集, 530 | 抄録 地域健常高齢者 | 高齢者の generativity の因子分析後に、主観的幸福感と自尊感情との相関関係を確認 |
| 109 | 看護における老年期の Generativity に関する文献検討 | 讃井真理, 河野保子 | 2013 | 日本看護研究学会雑誌, 36(3), 277 | 抄録 過去の世代性関連文献 | 過去 10 年間の Generativity に関連した文献レビュー |
| 110 | 日常生活活動の価値序列に関する予備的研究：世代・性別による比較 | 金山祐里, 土屋景子, 小野健一他 | 2013 | 作業療法, 32(4), 374-382 | 実践報告 | 世代や性別の違いによる日常生活活動の価値観の特徴を検討 |
| 111 | 特別な教育的ニーズ (SEN) とピア・サポート経験の類似性・同世代性・訓練の度合い | 森定薫 | 2002 | SNE ジャーナル, 99-117 | 資料 | ピアサポートの概念を紹介し、事例を展開し、どの程度の、どのようなサポートが必要であるかを検討し、課題を提示 |
| 112 | 慢性疾患患児や障害児をきょうだいに持つ高校生のきょうだい関係と心理社会的適応性や出生順位による影響を考慮して | 大嶋巖 | 2003 | こころの健康, 18(2), 29-40 | 研究報告 | 慢性疾患児・障がい児を兄弟にもつ高校生の兄弟関係や心理社会的適応を検討し、メンタルヘルスに配慮ある対応の必要性を指摘 |
| 113 | ヒューマン・サービスへの意欲を保つには一福祉への動機づけ規定因の縦断的検討ー | 佐々木美加 | 2003 | 日本応用心理学学会大会発表論文集, 70, 87 | 抄録 福祉系大学生 35 名 | 適応は福祉への動機づけを強めている。在学期間が長くなると福祉に関連する課題に取り組めるかどうか重要であることを解明 |
| 114 | モバイルビジネスとジェネラティヴィティ(多分野に広がるモバイル研究の最新の最前線) | 八木良太 | 2013 | シンポジウムモバイル研究論文集, 27-32, | シンポジウム | 分析方法がジェネラティヴィティであり、本研究とは概念が違う |

| | タイトル | 研究者 | 公表年 | 場所 | 種類 | 概要 |
|-------------|---|------|------|---|----------------------------------|---|
| | | | | | 対象・方法 | |
| 1 1 5 | 移民都市アムステルダム の生成 | 水島治郎 | 2013 | 千葉大学人文 社会科学研究 科研究プロジ ェクト報告 書, 257, 44-49 | 報告書 | 移民を多数受け入れてきた長い歴史をもつアムステルダムの過去を具体的に検討し、今後のグローバル化への視座を検討 |
| 1 1 6 | 新しい住宅政策に向けてー多 様化, ポスト近代, そしてコ ミュニティー | 水戸哲平 | 2013 | 千葉大学人文 社会科学研究 科研究プロジ ェクト報告 書, 257, 31-43 | 報告書 | 空間的分析(国際比較)から「多様化」, 原理的分析から「ポスト近代」, そして歴史的分析(日本住宅政策史)から「コミュニティ」, 以上3つの視点から、日本の住宅政策を考え、問題を分析している |
| 1 1 7 | 消費社会の変化とごっこ遊び ー「遠足型消費」の概念およ び「IKEA」の事例からー | 阿部学 | 2013 | 千葉大学人文 社会科学研究 科研究プロジ ェクト報告 書, 257, 18-30 | 報告書 | 「IKEA ごっこ」の事例を取り上げ、その「遠足型消費」型ごっこ遊びとしての特徴について考察 |
| 1 1 8 | はじめに (「都市コミュニテ ィにおける相互扶助と次世代 育成」) | 水島治郎 | 2013 | 千葉大学人文 社会科学研究 科研究プロジ ェクト報告 書, 257, 2-2 | 紀要論文(プ ロジェクト 報告書)のは じめに | プロジェクト報告の編著者の「はじめに」の記述 |

引用文献

- 新木真理子(2005) : Erikson の祖父母的世代継承性と高齢者の看護-臨床実習の場は「世代間交流の場」でもある, 総合看護, 40(3), pp.17-23.
- 今西美由紀(2009) : 訪問リハビリテーションにおける老年期のクライアントからのセラピストへの祖父母性(grandparenthood)の発現と生きることの質, 作業療法, 28(2), pp.157-166.
- 糸井和佳, 亀井智子, 田高悦子ら(2015) : 地域における高齢者と子どもの世代間交流観察スケールの開発 CIOS-E、CIOS-C の信頼性と妥当性の検討, 日本地域看護学会誌, 17(3), pp.14-22.
- 亀井智子, 山本由子, 梶井文子(2013) : 聖路加式世代間交流観察 (SIERO) インベントリーの開発と信頼性・妥当性の検討, 聖路加看護学会誌, 17(1), pp.9-18.
- 大場宏美, 藤原佳典, 村山陽他(2013) : 世代間交流プログラムの評価に向けた日本語版 generativity 尺度作成の試み, 日本世代間交流学会誌, 3(1), pp.59-65.
- 田渕恵, 三浦麻子, 中川誠(2013) : 高齢者における世代性(Generativity)と次世代とのかかわり行動の因果関係 ; 性差に着目した検討, 日本世代間交流学会誌, 3(1), pp.35-40.
- 田渕恵, 三浦麻子(2014) : 高齢者の利他的行動場面における世代間相互作用の実験的検討, 心理学研究, 84(6), pp.632-638.

第5章 地域高齢者の Generativity における関心の概念検討、 及び Generativity への関心と心理社会的要因との関連

本研究は、要介護高齢者の Generativity 的視点における看護ケアを検討することを目的としている。しかし Generativity という概念は、国内外において研究者それぞれが概念規定をしながら、また研究者の目的に合わせた概念によって尺度が開発され、実態及び介入調査が行われているのが現状である。従って、本研究では、まず Generativity の概念を解明するため、また既存の尺度が本研究対象者に適応できる尺度であるかどうかを検討したうえで研究を進めていく必要がある。そこで第5章では、地域在住の健常高齢者を対象（以後、地域高齢者という）として地域高齢者の Generativity を解明し、その他の心理社会的側面との関係から Generativity の現状を検討する。

第1節 研究目的

健全に老い、充実した人生を送って天寿を全うするということは人間誰しもが望むことである。人間にとって健全に生きるということは、長い人生において加齢などによる身体的機能の喪失を認めつつも、それでもなお直面する様々な問題を解決し、人間として発達し続ける存在であり続けることにある。Erikson, E.H. (1952, 1982, 1990) は、老年期の発達段階とライフタスクを英知である人間の強さや賢さをもって、統合性を持った人間として発達しながら生きることであるとした。しかし人間は生老病死を避けて通ることはできない存在でもある。超高齢社会を迎えた我が国において、生・老・病・死を包含しながら人間としての統合性を発揮させ、老年期に QOL (Quality of life) をいかに高めて生きる存在となるかは、高齢者自身にも、また高齢者を取り巻く社会においても課題である。

第1章で述べてきたように、Generativity は生活満足度や精神的健康、抑うつ状態などの適応的・非適応的な心理特性との結びつきについて報告され (McAdams, D.P., 1992, 1993, 1997; 丸島; 2009; 小澤, 2012; 田渕, 2010, 2011), また幅広い年齢層を対象とした Generativity 尺度やその短縮版などが開発されている (丸島, 2005, 2007; 串崎, 2005a, b; 田渕, 2012; 大場, 2013)。丸島ら (2000, 2005, 2007) の世代性関心尺度を使用する意味についても簡単に述べてきた。ここで、再度、丸島らの尺度を使用する理由の詳細を述べる。丸島らの世代性関心尺度は、McAdams, D.P. らが示す7つの心理社会的要素の概念 (図 1-2-1) に基づいて「Generativity における関心」と「Generativity への行動」を基本として開発された「Loyola Generativity Scale (LGS)」を元に、日本語版としての尺度を作成したものである。その信頼性、妥当性はすでに検証されている。そして本調査においては、地域高齢者の「Generativity における関心」の特質を明らかにすること、また地域高齢者の生活にとって「Generativity への関心」がどのように影響を及ぼしているかを検討すること、さらに今後の高齢者の心理社会的ケアの方向性を探ることが目的である。そのため、尺度として信頼性と妥当性が検証されており、質問項目内容が妥当であること、高齢者を対象として用いていることなどを考慮して丸島らの改訂版世代性関心尺度を使用し、高齢者の Generativity と高齢者の QOL を追究していくこととした。

以上のように、高齢者が Generativity における要素のひとつでもある「Generativity への関心」を生活の中でどのように捉え、自己を肯定し心理社会的適応に向かうのかを明らかにすることは、高齢者自身にとってもケア提供者にとっても重要である。なぜなら、そのような心理社会的適応は高齢者の QOL に影響を与えると考えるからである。

そのため本調査は、地域高齢者の「Generativity における関心」の特質を明らかにし、地域高齢者の生活に及ぼす Generativity の影響について検討することを目的とする。

第2節 方法

第1項 対象及び方法

対象は、2013 年 3～5 月に A 市の老人クラブ会員で、地域に在住している健常高齢者 598 名に調査票を配布した。その対象者は 65 歳以上で日常生活動作が自立し、かつ、Activity が高い生活、すなわち、自らの意思をもち自立した生活を営んでいる者である。A 市の高齢化率は 30%、そのうちの老人クラブ加入率は 20.8%である。調査対象の老人クラブは 25 ブロックに分かれており、全ブロックを対象に調査を依頼した（資料 1）。

方法は老人クラブの会長に研究の主旨と方法を説明し協力の同意を得た。会長を通して各地区役員会で説明が行われ、各地区の役員からそれぞれの集会時に会員に調査票が配布された。会員は自宅で調査票を記入し郵送で回収した。

第2項 調査内容（資料 4）

調査内容は対象の基本属性と心理的尺度で構成した。本調査の目的は高齢者の「Generativity における関心」の特質を明らかにし、高齢者の生活に及ぼす Generativity について検討することにある。高齢者の世代性認識は生活全般の様々な心理・行動ニードから生じると考えられるため、それらの解明には多様な心理的尺度の適用が必要になると思われるが、本調査では、Generativity に深く関係があると判断した心理的尺度で構成した。

1. 基本属性：

性別、年齢、家族構成、家族交流、友人交流、若い世代との交流、健康状態について尋ねた。基本属性は、調査研究において重要な位置づけをもち、対象集団の特質を表すものである。

2. 心理的尺度：

①Generativity 尺度（丸島, 2007）：丸島らの改訂版世代性関心尺度（Generativity concern Scale-R :以後, GCS-R）；創造性・世代継承性・世話の 3 因子 20 項目で構成されている。得点が高いほど世代性への関心が高いことを意味する。本研究の中心課題を明確にするための尺度である。また、中心課題である Generativity における関心という概念に、影響を及ぼすであろうと考えられる心理的要因との間で分析を試みるために、本研究では必須の尺度である。

②生活満足度（古谷野ら, 1990）：古谷野らの LSI-K（Life Satisfaction Index-K）；人生全体の満足感、心理的安定、老いについての評価の 3 因子 9 項目で構成されている。点数が高いほど満足感が高い。高齢者の生活満足度と Generativity との間には、高齢

者を対象にした研究ではないが、正の相関があると報告されている。高齢者を対象にした場合は関係がみられるのか検証する必要があると判断した。満足度尺度には幾つかあるが、LSI-Kは、高齢者の人生全体の総合評価と、心理的な安定、更には、老いについての自己の評価を示す尺度である。本研究の目的から、生活が満足しているかどうかの問いは、高齢者の生活全般にかかわる心理的側面の調査の基本と考え採用した。また、LSI-Kは、様々な高齢者の心理社会学調査にも用いられている尺度であり、他の研究対象者等の結果との比較検討が可能であることから本尺度を用いた。

- ③主観的健康統制感（堀毛，1991,2001）：堀毛の日本語版 Health Locus of Control（以後、HLC）；自分自身，家族，専門職，偶然，超自然の5下位尺度ごと各5項目の合計25項目で構成されている。点数が高いほど健康への自己統制感が高い。高齢者は長い人生を経てきた中で、健康の重要性を自覚している。自らの健康をどのように統制しているのか、健康統制感と Generativity とにおいて関係性はあるのか、について検討する必要があると判断した。高齢者の健康は、生活する上において重要な項目であり、健康と Generativity との関係性に注目した。
- ④スピリチュアリティ健康感（竹田ら，2007）：竹田らの高齢者版スピリチュアリティ健康尺度（以後、SP健康感）；生きる意味・目的，死と死にゆくことへの態度，自己超越，他者との調和，よりどころ，自然との融和の6因子18項目で構成されている。得点が高いほどスピリチュアリティが高いことを意味する。近年，研究が進められているスピリチュアリティ健康感とは，心の奥底に存在する魂の課題というべきもので，生きる意味や死への問い，今後のこと等について自己を深く見つめるという内容で構成されている。高齢者のスピリチュアリティ健康感とは精神的健康にも通じ，自己の生き方と Generativity との間には関係性があるのではないかと考えた。また，あらゆる心の動きに関係していると考えたため，尺度として採用した。なお，本研究では精神的負担のかからない表現に一部改正して使用した。
- ⑤自己効力感（坂野ら，1986）：坂野らの General Self-Efficacy Scale（GSES）；行動の積極性，失敗に対する不安，能力の社会的位置づけの3因子16項目で，点数が高い方が自己効力感が高い。逆転項目がいくつか設定されている。本研究では性別による影響を排除した標準化得点を用いた。自己効力感とは，ある仕事（行為）をする時の自分の能力に対する自信，確信であり，自分の目標を達成するための能力がどのくらいあると信じているか，自分に対する信頼感や有能感を意味する。高齢者が自己効力感を高く持つときは，Generativity を発揮するという仮説を持ったため，本研究では，高齢者が自己に対する価値をどのように認識しているかを理解する必要があると判断した。
- ⑥孤独感（諸井ら，1991,2001）：諸井らの改訂版 UCLA 孤独感尺度日本語版（以後，孤独感）；20項目のうち逆転項目が10項目設定されている。点数が高いほど孤独感が強い。高齢者を対象とした研究ではないが，Generativity は，抑うつなどの非適応的心理特性と負の相関が見られることは報告されている。高齢者を対象とした場合は関係性が見られるのか，検討する必要があると判断した。高齢者の孤独感は閉じこもりやうつ傾向と関連しており，Generativity の発揮の有無とも関係性があると考えた。
- ⑦自尊感情（山本ら，1982,2001）：山本らの作成した自尊感情尺度；自己の能力や価値に

についての評価的感情や感覚を示す尺度である。10 項目の評定を加算する。逆転項目は 5 項目設定され、点数が高いほど自尊感情は高い。自尊感情とは、自分自身に対する肯定的な認知や感情を指す。自尊感情なくして他者尊重はありえず、他者を思う態度は次世代を思う気持ちに通じる。自尊感情は Generativity の関心・育成へと繋がっていると考え、本研究の尺度として用いた。

以上のように、基本属性と 7 つの心理的尺度を用いて調査を行った。すべての尺度における逆転項目は点数を逆転させて集計した。

第 3 項 分析方法

SPSS Statistics 18.0j , SPSS Amos 21.0j を使用し、以下の分析を行った。対象者の属性については記述統計量を算出した。GCS-R の 20 項目、及びその他の心理的尺度に対して天井効果・床効果・I-T 相関・G-P 分析を行い、削除項目がなく、尺度として信頼性と妥当性を確認した。その後、GCS-R に対して探索的因子分析（主因子法、Promax 回転）を行った結果、5 項目が削除され 3 因子 15 項目が抽出された。信頼性の検討は Cronbach's α 係数を算出した。次に、3 因子 15 項目の尺度としての妥当性を確認するため、確認的因子分析を行い、モデルの適合度を適合指標 (GFI)、自由度修正済み適合度指標 (AGFI)、比較適合度指標 (CFI)、平均二乗誤差平方根 (RMSEA) で確認した。その後、因子分析で得られた 3 因子の合計を合成得点とし、各心理社会的尺度との相関 (Pearson の相関係数)、及び、各変数間の関連性の影響を除外した各変数との相関関係を検討するために偏相関係数を求めた。さらに、高齢者の Generativity における関心を潜在変数とし、各心理社会的尺度を観測変数とした仮説モデルを作成し、モデルの適合性を検証するため共分散構造分析を行った。その際、各心理社会的尺度と Generativity における関心との関係を検討し、分析を繰り返して、適合度のより高いモデルを探索的に検討した。さらに、その後、性別、及び前期と後期高齢者別に多母集団分析でそれぞれの心理的構造の差異を検討した。

第 4 項 倫理的配慮

調査票には研究の主旨と調査票記入に必要な時間、回収方法、及び、プライバシーは守られること、また、負担と感じた場合は、調査への記入を中断してもよいことを明記した。そして調査票回収後の取り扱いへの配慮等を記載した依頼文書を付し、投函をもって研究協力への同意とした。

第 3 節 結果

1. 対象者の特徴

対象者の概要を表 5-3-1 に示した。本調査において調査票を 598 名に配布し、回収ができたのは 378 名 (63.2%) であった。そのうちの全調査項目に欠損値のない 276 名 (最終有効回答 46.2%) を分析対象とした。全体の平均年齢は 75.6 ± 5.7 歳 (最低年齢 65 歳～最高年齢 90 歳)、前期高齢者が 122 名 (平均年齢 70.36 ± 2.84 歳) であり、後期高齢者は 154 名 (平均年齢 79.74 ± 3.48 歳) であった。その内訳は男性 166 名 (60.1%)、女性 110 名 (39.9%) であった。月に 1 回以上の家族交流について 0～1 人あると答えた者が 53 名 (19.2%) で、2～3 人と答えた者が 115 名 (41.7%)、4 人以上と答えた者が 108 名 (39.1%)

であった。友人との交流は気兼ねなく話せる友人が、0～1人あると答えた者が60名(21.7%)、2～3名と答えた者が146名(52.9%)、4人以上と答えた者が70名(25.4%)であった。若い世代との交流は全く或は減多に交流がないと答えた者が57名(20.6%)、少し或はいつも交流している者が219名(79.4%)であった。健康状態は症状がないと答えた者が114名(41.3%)で、何らかの身体的症状がある者が162名(58.7%)であった。

表5-3-1 対象である地域高齢者の基本属性 n=276

| | | | |
|----------|--------------|------------|----------|
| 年齢 | 全体 | 75.59±5.67 | |
| | 前期高齢者(n=122) | 70.36±2.84 | (65～74歳) |
| | 後期高齢者(n=154) | 79.74±3.48 | (75～90歳) |
| | | 人数 | (%) |
| 性別 | 男性 | 166 | (60.1) |
| | 女性 | 110 | (39.9) |
| 家族構成 | 1人暮らし | 47 | (17.0) |
| | 夫婦二人 | 164 | (59.4) |
| | 子ども夫婦と同居 | 15 | (5.4) |
| | 三世帯世帯 | 11 | (4.0) |
| | その他 | 39 | (14.1) |
| 家族との交流 | 0人～1人 | 53 | (19.2) |
| | 2人～3人 | 115 | (41.7) |
| | 4人以上 | 108 | (39.1) |
| 友人との交流 | 0人～1人 | 60 | (21.7) |
| | 2人～3人 | 146 | (52.9) |
| | 4人以上 | 70 | (25.4) |
| 若い世代との交流 | 全く交流していない | 18 | (6.5) |
| | めったに交流していない | 39 | (14.1) |
| | 少しは交流している | 149 | (54.0) |
| | いつも交流している | 70 | (25.4) |
| 健康状態 | 症状はない | 114 | (41.3) |
| | 症状がある | 162 | (58.7) |

2. 地域高齢者の Generativity における「関心」の特質

丸島らの GCS-R において天井効果・床効果・I-T 相関・G-P 分析を行った結果、その20項目には削除項目はなく、全項目で探索的因子分析(主因子法, Promax 回転)を行った。その結果は表5-3-2の通りである。固有値の変化量から因子数を3に定め、因子負荷量.40以上の項目を採用し、3因子15項目を抽出した。第1因子は「私は大多数の人と違ったところがあるように感じる」等の項目であり【創造性; $\alpha = .82$ 】と命名した。第2

因子は「他人の面倒をよく見る」等で【世代継承性； $\alpha = .74$ 】と命名した。第3因子は「私は何かを考えて、いい考えが浮かんだ時とてもうれしく感じる」等で【積極性； $\alpha = .68$ 】と命名した。次に、探索的因子分析で得られた因子構造の妥当性を検証するため、確認的因子分析を行った。その結果を図5-3-1に示す。GFIが.90、AGFIは.86であった。また、CFIは.88、RMSEAは.08で適合度に問題はなく、基準に達していると判断した。

表5-3-2 地域高齢者のGCS-Rの探索的因子分析結果(主因子法,プロマックス回転)

| 全 体 $\alpha = .89$ | | 第1因子 | 第2因子 | 第3因子 |
|---|----------------------------------|-------|-------|-------|
| 第1因子：創造性 $\alpha = .82$ | | | | |
| GCS2 | 私は大多数の人と違ったところがあるように感じる | .771 | -.027 | -.279 |
| GCS4 | 私は他人がびっくりするようなことをしたり、ものを作ったことがある | .658 | -.025 | .013 |
| GCS10 | 物を考えるときに変わった考えができます | .628 | .078 | .026 |
| GCS1 | 私は変わったことや珍しいことをするのが好きだ | .622 | .225 | -.065 |
| GCS5 | 私は自分がすることは、たいてい新しく創造的であるように努めている | .607 | .221 | .011 |
| GCS6 | 私は夢のようなことを考えるのが好きだ | .570 | -.165 | .325 |
| 第2因子：世代継承性 $\alpha = .74$ | | | | |
| GCS11 | 他人の面倒をよく見る | .022 | .717 | -.100 |
| GCS19 | 困っている人を見ると、つい手助けしたくなる | -.026 | .682 | .106 |
| GCS17 | 私の死後にも、私が貢献したことは残っているように思う | .136 | .465 | .101 |
| GCS20 | 自分の経験を通して得た知識などを他人に伝える努力をしてきた | .194 | .453 | -.072 |
| GCS18 | 奉仕活動に喜んで参加する | -.039 | .411 | .287 |
| 第3因子：積極性 $\alpha = .68$ | | | | |
| GCS8 | 私は何かを考えて、いい考えが浮かんだ時とてもうれしく感じる | .267 | -.143 | .694 |
| GCS7 | 私は問題をといたり、ものを作ったりしている時が一番楽しい | .337 | -.114 | .560 |
| GCS13 | 相手の話に耳を傾ける | -.301 | .382 | .540 |
| GCS14 | 子どもの世話をよくする | -.108 | .080 | .442 |
| 因子間相関 | | | | |
| 第1因子 | | 1.000 | | |
| 第2因子 | | .332 | 1.000 | |
| 第3因子 | | .502 | .515 | 1.000 |
| 削除された項目 | | | | |
| GCS9 | 私は自分のこれまでの生き方を若い人に伝えていくように努めてきた | | | |
| GCS3 | 悲しんでいる人を見たらなぐさめる | | | |
| GCS15 | 次世代のために環境汚染に繋がることをしないように極力努めている | | | |
| GCS16 | 私は自分の死後に残るようなことは何もしていないと思う | | | |
| GCS12 | 私は他人に寄与するような価値のあることは何もしていない | | | |

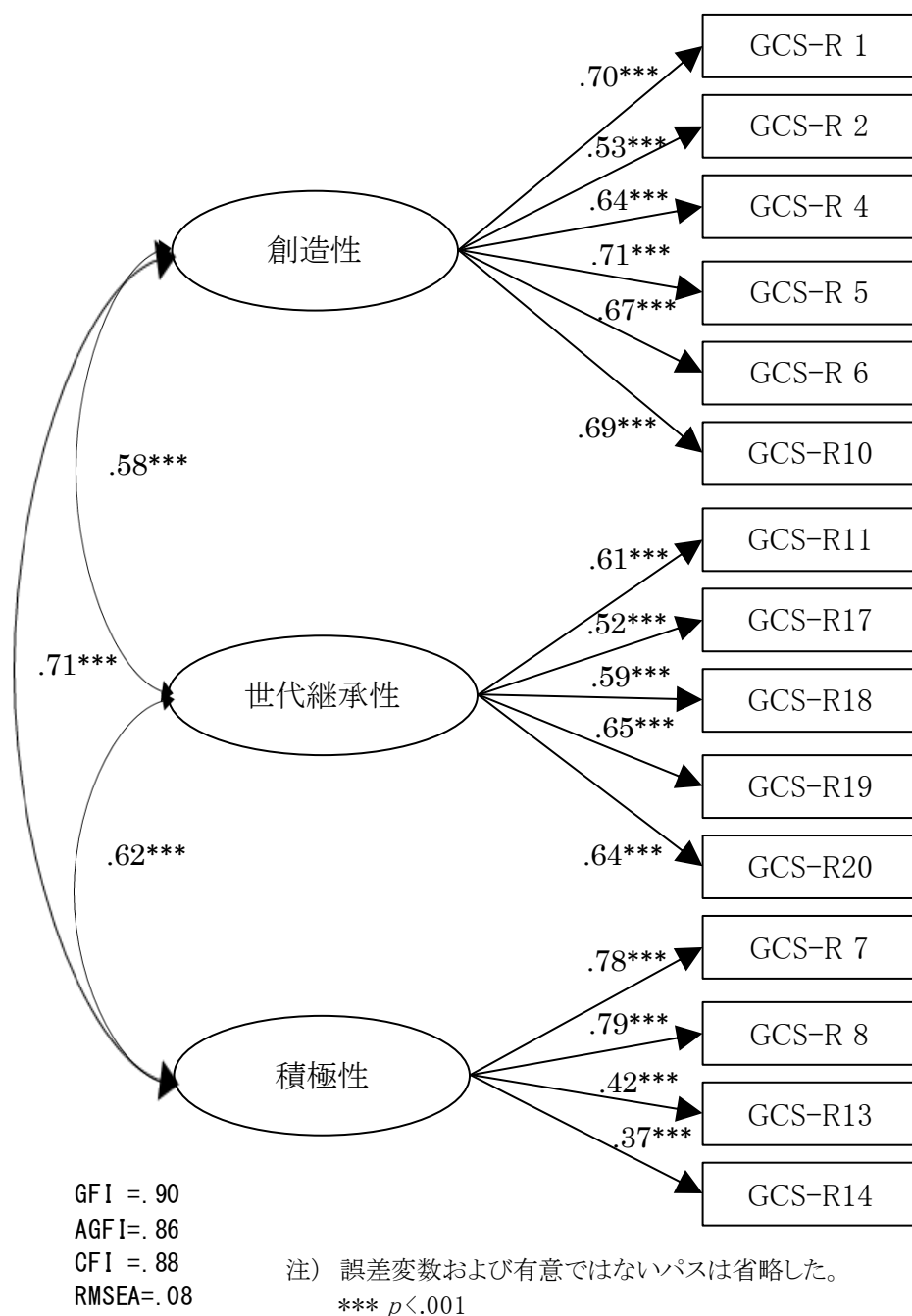


図5-3-1 地域高齢者のGenerativityにおける関心の確認的因子分析

3. 地域高齢者の Generativity における関心の 3 因子の合成得点と各心理的尺度との相関関係, 及び偏相関関係

本研究で得られた地域高齢者の Generativity における関心の 3 因子の合成得点と各心理的尺度得点の平均と, 相関係数及び偏相関係数を表 5-3-3 に示した。各尺度の平均得点は GCS 合成得点が 37.21 ± 5.79 , 生活満足度は 4.89 ± 2.1 , 主観的健康統制感 95.96 ± 13.0 , SP 健康感が 66.41 ± 7.9 , 自己効力感が 47.9 ± 11.1 , 孤独感が 39.97 ± 7.8 , 自尊感情は 35.34

±5.04 であった。Generativity 合成得点は、生活満足度を除く全ての尺度と相関していた ($r=.17, p<.01$, $r=.44, p<.001$, $r=.39, p<.001$, $r=.22, p<.001$, $r=.37, p<.001$,)。主観的健康統制感は SP 健康感と相関し ($r=.46, p<.001$)、SP 健康感是自己効力感、孤独感、自尊感情とそれぞれ相関していた ($r=.21, p<.001$, $r=.32, p<.001$, $r=.22, p<.001$,)。各変数間の関連性の影響を除外した偏相関係数を求めた結果、Generativity 合成得点と相関がみられなかった変数は生活満足度、主観的健康統制感、孤独感であり、各変数間の影響を除外しない場合の相関は認められたが、その他の変数による影響を除外した場合、孤独感と生活満足度、自尊感情と SP 健康感との間に相関関係は認められなかった。

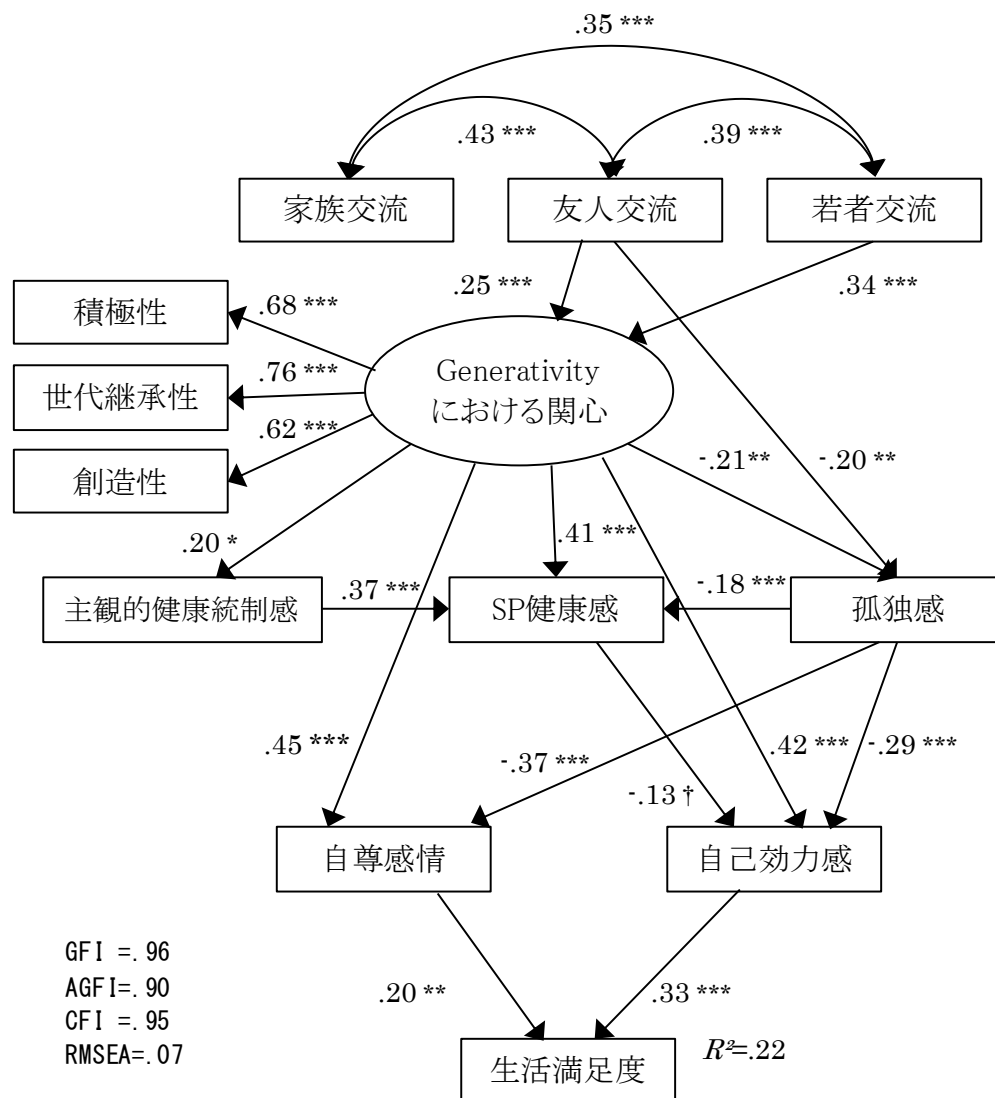
表5-3-3 地域高齢者のGenerativity合成得点と各要因の平均及び相関(右上段)と偏相関(左下段)

| | 平均 | 標準偏差 | GCS合成 得点 | 生活 満足度 | 主観的 健康統制感 | SP健康感 | GSES標準化 得点 | 孤独感 | 自尊感情 | α 係数 |
|-----------|---------------|------|-------------|-----------|--------------|-----------|---------------|-----------|-----------|----------------|
| GCS合成得点 | 37.21 ± 5.79 | | — | .107 | .174 ** | .436 *** | .388 *** | -.219 *** | .374 *** | 0.89 |
| 生活満足度 | 4.89 ± 2.11 | | -.066 | — | -.110 | .008 | .422 *** | -.249 *** | .364 *** | |
| 主観的健康統制感 | 95.96 ± 13.77 | | .038 | -.033 | — | .455 *** | -.054 | -.005 | -.040 | 0.88 |
| SP健康感 | 66.41 ± 7.90 | | .317 *** | -.074 | .446 *** | — | .213 *** | -.320 *** | .222 *** | 0.89 |
| GSES標準化得点 | 47.93 ± 11.16 | | .238 *** | .288 *** | -.081 | .038 | — | -.395 *** | .527 *** | 0.89 |
| 孤独感 | 39.97 ± 7.86 | | .073 | -.070 | .089 | -.266 *** | -.167 *** | — | -.436 *** | 0.85 |
| 自尊感情 | 35.34 ± 5.05 | | .206 *** | .180 ** | -.059 | .025 | .279 *** | -.254 *** | — | 0.76 |

p<.01 *p<.001

4. 地域高齢者の「Generativity における関心」と心理社会的要因との関係

「Generativity における関心」を潜在変数とした仮説モデルを元に探索的に検討し、分散構造分析を行った。すべての要因間にパスを設定し分析を行ったが、図 5-3-2 には有意なパスのみを記載し、高齢者の Generativity における関心を介在した生活要因モデルを示した。GFI=.96, AGFI=.90, CFI=.95, RMSEA=.07 でモデルの適合度は良いと判断した。地域高齢者の「Generativity における関心」は他者との交流（家族交流のみ除く）から影響を受け、「Generativity における関心」を介在して SP 健康感、孤独感、自尊感情、自己効力感を高めていた。SP 健康感、孤独感、自尊感情、自己効力感是他者との交流から直接的にも影響を受けていたが、それぞれは「Generativity における関心」を介する影響のほうがパス係数は高かった。また「Generativity における関心」、SP 健康感、主観的健康統制感、孤独感、自尊感情、自己効力感は、生活満足度に直接的、間接的に影響し、それらの影響による生活満足度の決定係数は、 $R^2=.22$ であった。



注) 誤差変数および有意ではないパスは省略した。

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

図5-3-2 地域高齢者のGenerativityにおける関心を介在した生活要因モデル

5. 性別、及び年代別の「Generativity における関心」と心理社会的要因との関係における構造

性別、及び前・後期高齢期において、Generativity における関心と心理社会的要因との関連における構造の相違について多母集団分析で検討した。その結果、性別においては若者交流から Generativity における関心に向かうパスは、男女とも有意な関連が認められたが、友人交流から Generativity における関心へ向かうパスは男性では若者交流ほど強くなり、女性では関連は認められなかった。また、男性は、友人交流、及び Generativity における関心から孤独感へ向かうパスが有意であったが、女性では有意な関連は認めなかった。男女とも Generativity における関心から自尊感情と自己効力感へのパスは有意であった。

しかし、自尊感情と自己効力感から生活満足度へのパスは男性では有意であるのに対し、女性は男性ほど関連が認められなかった（図 5-3-3, 図 5-3-4）。

前期高齢者と後期高齢者の Generativity における関心と心理社会的要因の構造における違いについては、若者交流から Generativity における関心のパスは前期及び後期ともに有意であったが、友人交流から Generativity における関心に向かうパスは前期高齢者のみが有意であった。また後期高齢者は友人交流から孤独感へのパスが有意であった。孤独感 は前期高齢者及び後期高齢者ともに自尊感情と自己効力感に有意に影響し、後期高齢者は自尊感情、自己効力感から生活満足度への影響が有意であったのに比べて、前期高齢者は自尊感情から生活満足度へのパスは有意とは言えなかった（図 5-3-5, 図 5-3-6）。

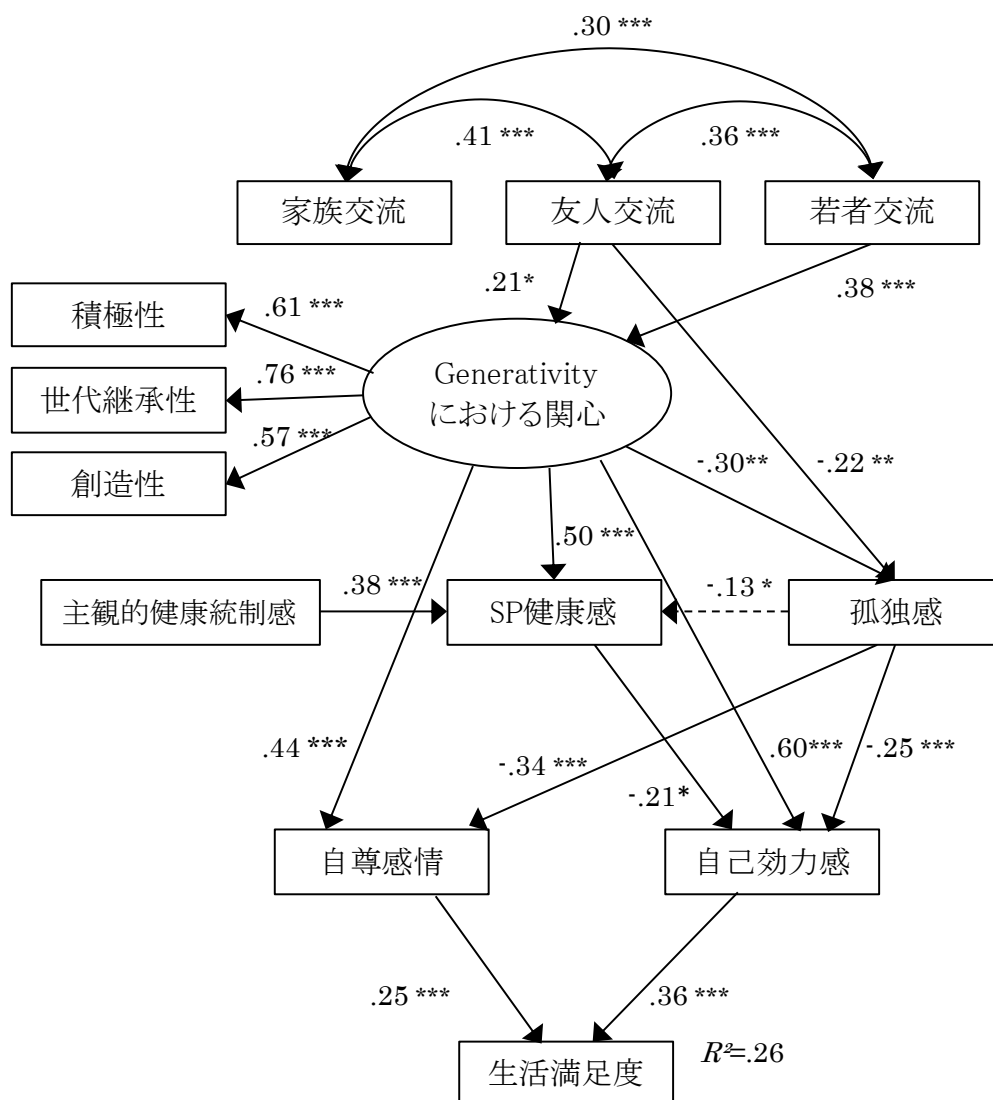
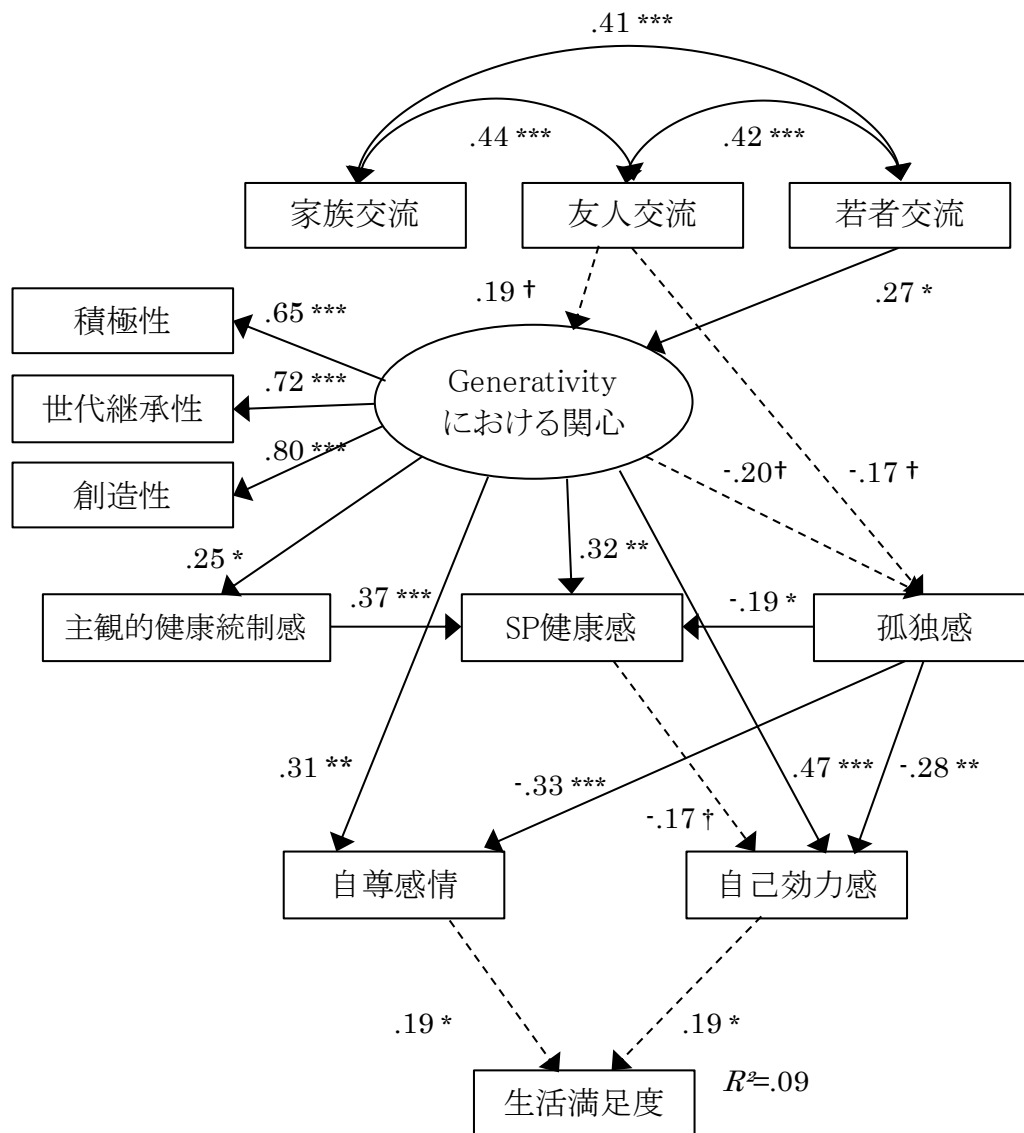


図5-3-3 Generativityにおける関心を介在した生活要因モデル(男性)

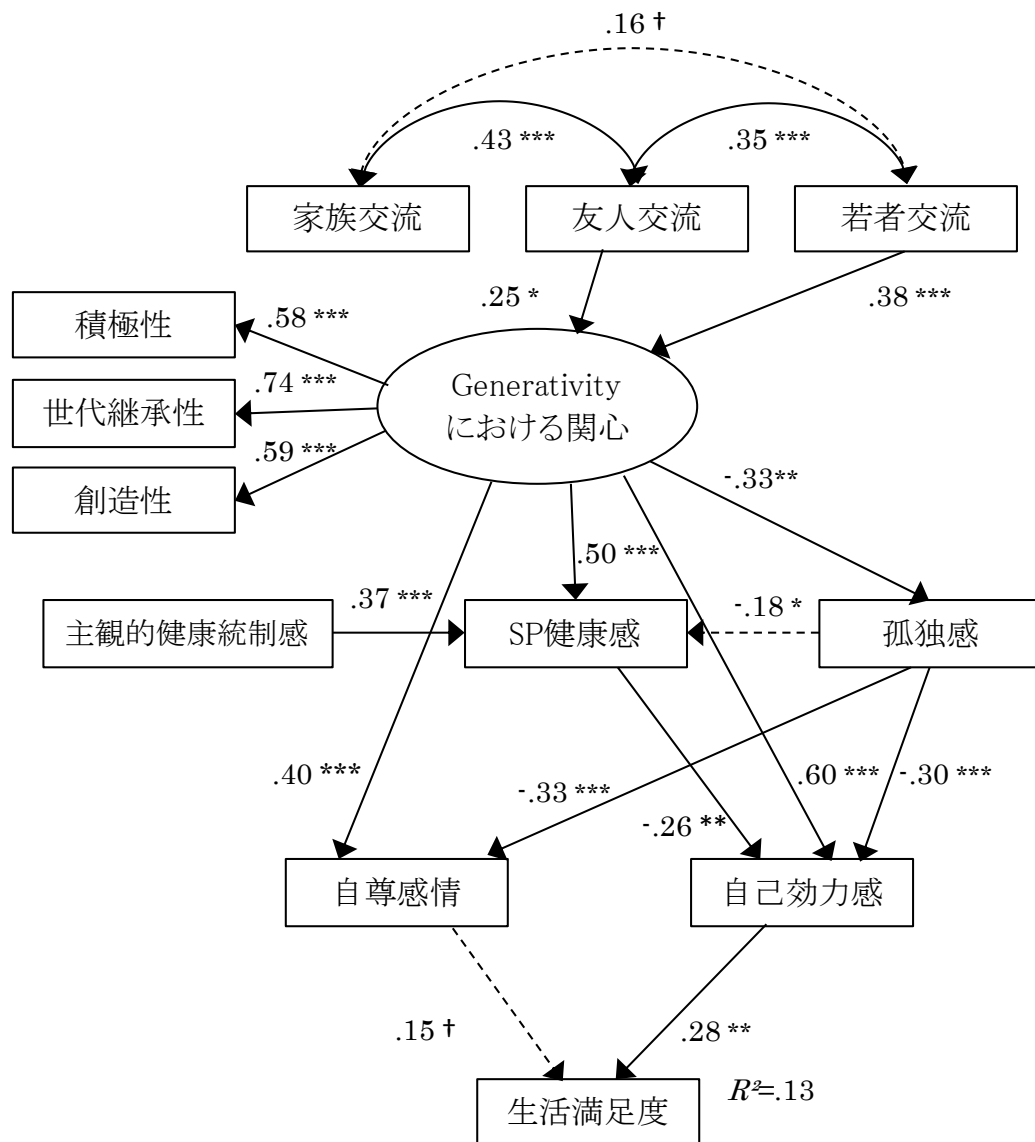


注) 誤差変数および有意ではないパスは省略した。

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

破線は係数が.20以下のものを示す

図5-3-4 Generativityにおける関心を介在した生活要因モデル(女性)

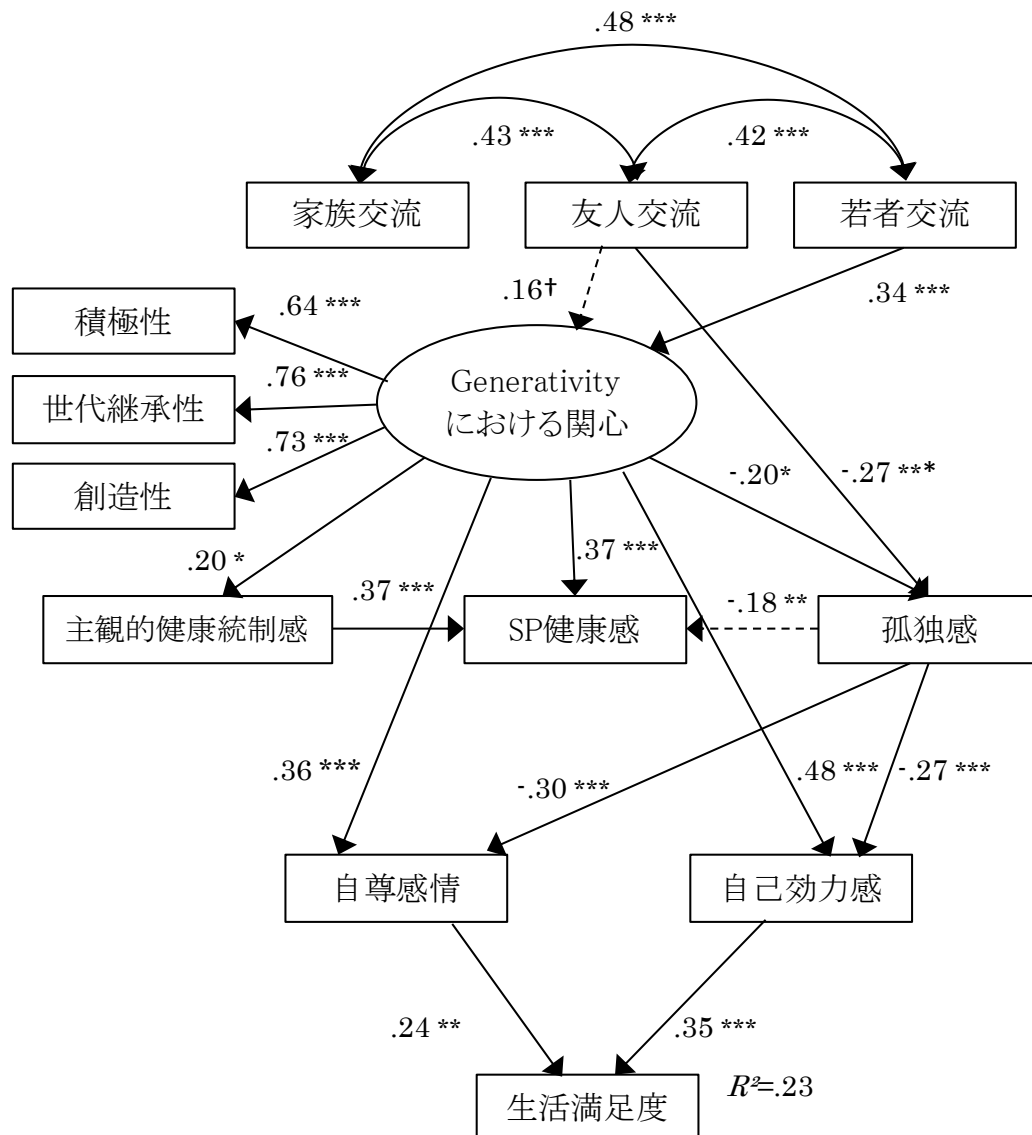


注) 誤差変数および有意ではないパスは省略した。

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

破線は係数が.20以下のものを示す

図5-3-5 Generativityにおける関心を介在した生活要因モデル(前期高齢者)



注) 誤差変数および有意ではないパスは省略した。

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

破線は係数が.20以下のものを示す

図5-3-6 Generativityにおける関心を介在した生活要因モデル(後期高齢者)

第4節 考察

超高齢社会を迎える我が国において、高齢者の生活の質を保証するケアの追究は今後ますます論じていく必要性が高まると予測できる。老年期の **Generativity** は次世代を産み育てた出来事を回想し人生の意味を再評価することと、自己が培ってきた人生の産物を次世代に経験として伝えることが両輪となり、それらが自我統合の軸として機能しながら、かつ老年期の終盤に訪れる死の意味とその適応に向かって生を営んでいくという特徴を持

つ。それゆえ、老年期の Generativity に関する研究は人間が幸福に生きるための重要な糸口を提供する。

丸島ら (2007) は Generativity 関心尺度の開発によって Generativity の関心が創造性・世代継承性・世話の 3 因子構造であることを報告している。丸島らの研究は、25～75 歳という広い年齢層を対象として尺度開発を行っており、抽出された 3 因子は高齢者特有の Generativity 関心尺度とは言えない。しかし丸島らの尺度は、高齢者の経験を伝え、継承するという意味にとどまらず、人生の意味や人として適応に向かっていく生の営みを表現することのできる尺度と考えたため、本研究では丸島らの尺度を用いて研究を進めた。その Generativity の意味を踏まえて、地域高齢者における Generativity における関心の特質と、Generativity と心理社会的側面との関連について、また、Generativity が与える高齢者の生活への影響について論じる。さらに、性別と高齢各期における Generativity と関連要因の構造的相違について検討する。

1. 地域高齢者の Generativity における関心の特質

本調査の結果から、地域高齢者の「Generativity における関心」は創造性・世代継承性・積極性の 3 因子が抽出された。本調査は老人クラブという居場所で、積極的に生活している 65 歳以上の高齢者を対象としたものであり、得られた 3 因子は地域高齢者の「Generativity における関心」の特質を示している。生涯発達の観点から老年期を見た場合、老年期は成人期と比べて、子育てから解放され、いわゆる産み育てるという直接的な役割から離脱するステージである。しかし、高齢者個人が社会的な生活を営んできた中で培ってきた知恵や技術は失われるものではなく、次の世代へ受け継がれ、継承されていくものである。高齢者が「Generativity における関心」を発揮するときは、McAdams らが指摘するように内的希求と文化的要請が存在する。永続的な自己 (丸島, 2006) として存在することへの欲求、期待される社会的責任を果たそうとする高齢者の動機 (田淵, 2010) という 2 つの局面によって、本研究の下位概念は抽出されたものと考ええる。

第 1 因子：創造性は「大多数の人と違ったところがあるように感じる」「他者がびっくりするようなことをした」「人とは違った考えができる」から構成されており、個人が生きてきた中で他者とは違った unique かつ個性的で、個人の内面を突き動かすニードとして、自己の存在意義を Generativity の中に表現しているものと考ええる。第 2 因子：世代継承性は「他人の面倒をよく見る」「私の死後にも、私が貢献したことは残っているように思う」「自分の経験を通して得た知識などを他人に伝える努力をしてきた」などから構成されており、個人が生きてきた知恵や英知を他者や社会に残すという社会的責任を Generativity の中で表現しているものと考ええる。第 3 因子：積極性は「いい考えが浮かんだ時にうれしい」「何かを考え、制作しているのが楽しい」「相手の話に耳を傾ける」「子どもの世話を良くする」で構成されており、中年期の直接的世代継承性から老年期の祖父母的世代継承性へ世代性は変容 (深瀬ら, 2010) しつつも、直接的世代継承性への希求は強く存在し、なおかつ、先祖から自己に引き継がれたものを、一歩引いた立場から次世代に残し、守り、案ずる (深瀬ら, 2010) といった形で自己を最大限に活用しようとするものが表現されていると考ええる。

以上の3因子は、高齢者が自己を完結させるために Generativity に関心を持ち、行動するために必要な、地域高齢者の Generativity の特質であると考ええる。特に、創造性、積極性が「Generativity における関心」の下位概念として抽出されたことは、高齢者が次世代のために何かを伝えるということだけではなく、高齢者自身が自己完結させる(丸島, 2006)ための関心であることを包含している。

2. 地域高齢者の Generativity における関心と心理的尺度との関係

本調査結果で得られた生活満足度、主観的健康統制感、SP 健康感、自己効力感、孤独感、自尊感情のそれぞれの尺度の平均得点を既存の調査(青木, 2001; 森ら, 2008; 深堀ら, 2009; 木村ら, 2005; 竹内ら, 2001; 古川ら, 2007; 則定ら, 2009; 中澤ら, 2007; 橋本ら, 1997; 末田ら, 2002; 河野ら, 2011)と比較した結果、本調査対象者は既存の文献の対象者よりも平均年齢は高いものの、各尺度の平均得点は他の文献結果と大きな差は認められなかった。このことは本調査対象者が老人クラブという場所で自分らしく他者と繋がりながら生活できていることから、精神的健康度が保たれている集団であることが伺えた。また、本調査の Generativity 合成得点について、心理的尺度と相関していたことは、既存の研究(小澤, 2012)と同じ結果であり、Generativity への関心は高齢者の心理社会的発達に関連しており、心理的健康において重要な要素であると言える。特に、Generativity 合成得点と偏相関が認められた自己効力感と自尊感情は、Generativity への関心に直接的な影響を与えていることが考えられる。

3. 地域高齢者の生活と Generativity

Generativity が地域高齢者の生活にどのような影響を及ぼしているのかを、基本属性である他者との交流と高齢者の「Generativity における関心」、及び各心理的側面から、その関連性を探索的に分析した。その結果図 5-3-2 から説明できるように、友人や若者との交流が「Generativity における関心」に影響を与えていた。また「Generativity における関心」が介在し地域高齢者の SP 健康感、自尊感情、自己効力感に影響していた。さらにそれらが高齢者の生活満足に繋がっていた。これらのことは、地域高齢者にとって他者との交流が刺激となり、自己の中の創造性や培ってきた経験を継承することや、生活を積極的に捉え、自己を活用することに繋がっていることを証明している。またそれらは、高齢者の「Generativity における関心」を高め、永続的な自己への欲求と社会への責任を果たすことへの関心を喚起させることに繋がる。そして「Generativity における関心」は高齢者自身の自己を完結させ、自己の存在価値を高めることに繋がっていると言えよう。そのことは高齢者が自身の生活に対する満足度を高めることにも繋がる。

このように、地域高齢者の「Generativity における関心」は、高齢者の生活にとって、高齢者の自己を完結させ、自己の存在価値を認識し、生活満足を感じるために必要な媒介要因であると推察された。そして、他者との交流は「Generativity における関心」を喚起するために必要な外的要因でもあり、他者と繋がることはまた、他者から必要とされることへの自己の認識となり、高齢者の内面にある脈々と継承されてきた「Generativity における関心」を行動に移すことに繋がる。しかし、今回の結果では家族との交流は「Generativity における関心」とはつながらなかった。それは、本調査対象の高齢者は子

供や孫との直接的な関係性のステージにあった対象というより、平均年齢も高く象徴的な世代性への関心へと変容（深瀬ら，2010）していることが影響しているものと考ええる。高齢者一人ひとりの背景にあった「Generativity における関心」が喚起することによって、高齢者が自己を肯定的に捉えられる心に影響する。そして自己を完結する、つまり、高齢者の心理社会的適応を促す要因となる。したがって、Generativity における関心と高齢者の心理社会的要因は深い関係にあり、高齢者の生活は高齢者の心の持ち方、他者との交流、満足している生活、孤独でないという積極的な生き方を持つことにより、高齢者の QOL を高めていき、地域高齢者の生活にとって重要なキーワードとなっていた。

このように、Generativity における関心は高齢者の生活に影響していると考えられるが、さらに詳細にその影響を検討するため、性別及び年齢別（前・後期高齢者）に区分した Generativity と心理社会的要因との関連構造について解明した。

性別においては、男女ともに若者交流が高齢者の Generativity における関心を強めていた。しかし、男性は友人交流から Generativity における関心のパスも有意であるのに対し、女性では関連を認めなかった。また、男性は友人交流によって孤独感を改善させていたが、女性では関連がなかった。さらに、男性は女性よりも Generativity への関心から自尊感情、及び自己効力感への関連が強く、それに引き続き自尊感情と自己効力感は生活満足度を高めていたが、女性では Generativity における関心は自尊感情、及び自己効力感へ関連はあるものの、男性ほど強くなく、自尊感情と自己効力感は生活満足度へ関連を示さなかった。これらのことは、男性は家族以外の他者との交流によって Generativity を発揮する機会を得て、自己の価値を高め、そのことが生活満足度を高めることに繋がる。しかし女性では友人交流では Generativity を発揮するとは言えず、さらに Generativity における関心が自尊感情や自己効力感を高めるが、生活満足度に与える影響は小さいことが示唆された。

田渕らは、Generativity と高齢者の次世代とのかかわり行動について、男女ともに次世代とのかかわり行動が Generativity を高めるを報告している（田渕ら，2013）。そして、男性は行動することによって Generativity が高まり、Generativity が高まることで行動を起こすという循環型モデルの様式を取っているのに対して、女性では次世代とのかかわり行動から Generativity が高まるという単一方向の因果関係のみであることを報告している。そして、Generativity と次世代とのかかわり行動との関連における性差の違いについて、男性は目標達成や自己実現といった個人的な合目的な他者交流を行っており、女性は地域の人間関係の維持といった社会的ネットワークに影響されることを指摘している（田渕ら，2013）。本調査においては、男女ともに高齢者は若者との交流によって Generativity における関心を高めており、高齢者が次世代である若者と交流することは、男性高齢者にとっては自己が存在する価値を発揮する場となり、若者との関係性が自己実現感を感じさせ、自尊感情を高めることができ、それらのことが生活満足感に影響していたと考えられる。一方、女性高齢者においては、若者に対する Generativity 発揮は自己の社会的の一員であることを実感させることになり、そのことが自己の存在価値を高めることに繋がっていることが考えられる。

次に、前期高齢者と後期高齢者における Generativity における関心と心理社会的側面との関連構造をみると、前期高齢者は友人と若者との交流によって Generativity における関心が喚起され、後期高齢者は若者交流のみによって Generativity における関心が喚起され

ていた。このことは、前期高齢者においては **Generativity** における関心を形成するためには、友人交流が重要な他者関係にあると推察された。また前期高齢者の生活満足度に影響を及ぼす要因は、**Generativity** における関心を基盤として SP 健康感、孤独感、自己効力感であったが、後期高齢者は孤独感、自己効力感、自尊感情であった。これらのことから、前期高齢者は SP 健康感が、また後期高齢者は自尊感情が生活満足度において重要な位置づけにあることが推察された。**Erikson, J.H** は、**Generativity** は高齢者にとって負担となる一方で、支援を受ける必要があるライフサイクルの終盤においては不死の感覚を得るのに役立つとしている (**Erikson, E.H.**, 1990, 1997)。つまり、本調査において前期高齢者と後期高齢者のそれぞれにおいて、生活満足度へ至る構造に相違が認められたことは、**Generativity** における関心が年齢によって相違することを示したと考える。

4. 高齢者の **Generativity** を検討することの意義と看護への示唆

高齢者にとって次世代である若者と交流を持つことの意義は大きい。さらに性別によって、また前期高齢者と後期高齢者という年代によって、**Generativity** における関心を喚起させる要素、及びそのことが高齢者の生活満足に繋がる構造に違いがあることが明らかとなった。地域高齢者は老年期特有の高齢者の **Generativity** を発揮し、変容させながら他者と関わり、老年期の心理社会的発達に寄与している。糸井らは高齢者と子どもの世代間交流における両者の相互作用を観察するスケールを開発した。このスケールは高齢者が子どもを迎え入れ教える行動と、子どもが高齢者に教わりながら自他への尊重を学ぶという、交流を通して他者への信頼を育む過程として捉えられとした (糸井ら, 2015)。そのことは、地域高齢者の **QOL** や自己評価との関連を課題とした糸井らの研究と、**Generativity** における関心が生活満足度に影響している、また **Generativity** が自己を完結させるために必要な要素であるという本研究結果とが方向性を同じくするものであると言える。そして性別や年代によって **Generativity** に関連する要素やそれらの構造に違いはあっても、若者や友人との交流は地域高齢者の **Generativity** における関心を喚起させる要素となり、また **Generativity** における関心は生活満足度や自己の存在価値の認識に影響を与えていることが示唆される。このことは、高齢者が次世代である若者と交流することの意義を示している。今後の地域看護活動において、どのような個人、あるいはどのような集団であるか、また、他者との関わりがどのような影響をもたらしかうのかを考えることにより、より有効な世代間交流的支援が検討できるものと考ええる。

また、高齢者と子どもとの関係性が互いの信頼を育むのであれば、老年看護学教育において看護を学ぶ若者が高齢者と関わり、高齢者を理解し、高齢者像を構築する意味は大きい。**Generativity** は、学生の高齢者像構築の一助となることが考えられ、そのことが看護的視点で **Generativity** を検討する意義でもある。

第5節 第5章のまとめ

超高齢社会の我が国において、延伸する老年期を如何に豊かに過ごすかという課題は誰もが切望し期待するニーズであろう。この章では老年期の心理社会的発達や幸福感等の心理的尺度と関連があるとされ、老年学の領域でクローズアップされている **Generativity** の概念を看護の視点で解明し、高齢者ケアの方向性を探ることを目的とした実態調査研究

について述べた。既存の世代性関心尺度を用いて地域高齢者の **Generativity** における関心を構成する因子を特定し、その尺度が本研究対象者に使用可能かどうかを検証し、その後心理社会的要因である基本属性と 7 つの心理的尺度との関係性、及びそれらの尺度の全体構造を明らかにした。

対象者は、地域に在住しており、老人クラブで活動している健常高齢者であった。地域高齢者の **Generativity** における関心は「創造性」「世代継承性」「積極性」の 3 因子構造であることが明らかとなった。また、**Generativity** における関心は、その他の心理的尺度と相関が認められた。そして、地域高齢者の **Generativity** への関心は他者との交流（家族交流のみ除く）から影響を受け、SP 健康感、孤独感、自尊感情、自己効力感を高めていた。**Generativity** における関心を介して SP 健康感、主観的健康統制感、孤独感、自尊感情、自己効力感に影響し、それらは生活満足度に直接的、間接的に影響していた。

高齢者の **Generativity** における関心は、中年期の直接的世代継承性から老年期の祖父母的世代継承性へ **Generativity** が変容し、直接的世代継承性への希求は強く存在しつつも、なおかつ、先祖から自己に引き継がれたものを一歩引いた立場から次世代に残し、守り、案ずるといった形で自己を最大限に活用しようとするのが表現されている。そして、高齢者の **Generativity** における関心は、高齢者の生活にとって高齢者の自己を完結させ、自己の存在価値を認識し、生活満足を感じるために必要な媒介要因であると推察された。また、他者との交流は **Generativity** における関心を喚起するために必要な外的要因でもあり、他者と繋がることはまた、他者から必要とされることへの自己の認識となり、高齢者の内面にある脈々と継承されてきた **Generativity** における関心を行動に移すことに繋がると考えられた。そして、高齢者一人ひとりの背景にあった **Generativity** における関心が喚起することによって、高齢者が自己を肯定的に捉えられる心に影響する。そして自己を完結する、つまり、高齢者の心理社会的適応を促す要因となると考えられた。したがって **Generativity** における関心と高齢者の心理社会的要因は深い関係にあり、高齢者の生活は高齢者の心の持ち方、他者との交流、満足している生活、孤独でないという積極的な生き方を持つことにより老年期の **QOL** を高めていくことが可能である。

本章においては、地域で比較的積極的に活動している高齢者を対象として、既存の尺度の妥当性を検証しつつ **Generativity** における関心について解明し、心理社会的要因との関係性と構造を検討した。中年期だけでなく老年期において、**Generativity** が自己完結のために重要な概念であり、高齢者の心理社会的発達を促す要因であることが実証された。このことは、地域における高齢者と若者世代との世代間交流という高齢者ケアの方向性を探るために **Generativity** を視点におくことの意義を示す結果であり、要介護高齢者の **Generativity** の解明と看護ケアの検討に繋がるものである。

さらに、**Generativity** という概念は、次世代である私たちの高齢者像の構築に影響するものと考えられたことは、今後のケア提供者への教育的視点を示すものであると考えるところからも本章で取り上げた地域高齢者の **Generativity** を検討する価値を示すものである。

引用文献

- 青木邦男(2001): 在宅高齢者の孤独感とそれに関連する要因 - 地方都市の調査研究から -, 社会福祉学, 42(1), pp.125-136.
- Erikson,E.H.(1952)/仁科弥生訳(1963): 幼児期と社会 I, みすず書房, 東京. (Childhood and society.2nd ed. W.W.Norton & Company Inc, New York), pp.272-273.
- Erikson,E.H.(1982)/村瀬孝雄,近藤邦夫訳(2001): ライフサイクル, その完結, みすず書房, 東京. (The life cycle completed, W.W.Norton & Company Inc, New York,)
- Erikson,E.H.(1990)/朝長正徳,朝長梨枝子訳(1997): 老年期—生き生きしたかかわりあい—, みすず書房, 東京. (Erikson,J.M,Kivnick,H.Q.:Vital involvement in old age. W.W.Norton & Company Inc, New York.)
- Erikson,E.H.,Erikson,J.M.(1997)/村瀬孝雄, 近藤邦夫訳(2001): ライフサイクルその完結 (増補版), みすず書房, 東京. (The life cycle completed, A review, Expanded edition, W.W.Norton & Company Inc, New York)
- 堀毛裕子(1991): 日本版 Health Locus of Control 尺度の作成. 健康心理学研究,4(1),pp.1-7.
- 堀毛裕子(2001): 日本版 HLC (主観的健康統制感) 尺度 (堀洋通監修, 松井豊編) 心理測定 の尺度集Ⅲ心の健康をはかる (適応・臨床), pp.84-93, サイエンス社, 東京.
- 深瀬裕子,岡本祐子(2010): 中年期から老年期に至る世代継承性の変容, 広島大学大学院教育学研究科紀要, (59), pp.145-152.
- 深堀敦子,鈴木みずえ,グライナー智恵子他 (2009): 地域で生活する健常高齢者の介護予防 行動に影響を及ぼす要因の検討, 日本看護科学会誌, 29(1), pp.15-24.
- 古川秀敏,国武和子(2007): 地域在住高齢者の抑うつに関連要因 - N 県 N 町の老人クラブ の調査結果 -, 日本看護研究学会雑誌, 30(4), pp.61-66.
- 橋本有理子,本村汎(1997): 老年期の自尊感情に関する一研究, 大阪市立大学生活科学部紀 要, 45, pp.1-11.
- 糸井和佳,亀井智子,田高悦子ら(2015): 地域における高齢者と子どもの世代間交流観察ス ケールの開発 CIOS-E、CIOS-C の信頼性と妥当性の検討, 日本地域看護学会誌, 17(3), pp.14-22.
- 河野保子(2011): 認知症患者の尊厳性に関する加増対処行動と支援システムの構築, 平成 20 年～22 年度科学研究費補助金研究成果報告書.
- 木村紗矢香,松田修(2005): 老いと向き合う対処尺度の作成と検討—信頼性と妥当性の検討 —, 東京学芸大学紀要 1 部門, 56, pp.173-178.
- 串崎幸代(2005a): E.H.Erikson のジェネラティヴィティに関する基礎的研究 多面的な ジェネラティヴィティ尺度の開発を通して, 心理臨床学研究, 23(2), pp.197-208.
- 串崎幸代(2005b): ジェネラティヴィティの感覚と人生に対する態度の関連について, 臨 床心理学研究, 23(5), pp.591-596.
- 古谷野亘,柴田博,芳賀博,須山靖男(1990): 生活満足度の構造—因子構造の不変性—, 老年 社会科学, 12, pp.102-116.
- 丸島令子(2000): 中年期の「生殖性 (Generativity)」の発達と自己概念との関連性につい て, 教育心理学研究, 48, pp.52-62.
- 丸島令子(2005): 世代性尺度の作成 - 世代性の関心と行動モデルの測定 -, Journal of

- Japanese Clinical Psychology, 23(4), pp.422-433.
- 丸島令子(2006):成人の心理社会的発達研究:Erikson 理論における「世代性(generativity)」測定を試み: 世代性の関心,行動,ナレーションから, 人間科学科紀要, 2, pp.31-48.
- 丸島令子,有光興記(2007): 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性, 妥当性の検討, 心理学研究, 78(3), pp.303-309.
- 丸島令子(2009)成人の心理学 世代性と人格的成熟, ナカニシヤ出版, 京都.
- McAdams, D.P.,Aubin,E.S. (1992): A theory of generativity and its assessment through self-report, Behavioral acts, and narrative themes in autobiography., Journal of Personality and Social Psychology, 62(6), pp.1003-1015.
- McAdams, D.P.,Aubin,E.S., Logan.R.L. (1993): Generativity among young, midlife, and older adults, Psychology and Aging, 8(2), pp.221-230.
- McAdams, D.P.,Diamond, A,Aubin,E.S.,et al.(1997): Stories of commitment ; The psychosocial construction of generative lives., Journal of Personality and Social Psychology, 72(3), pp.678-694.
- McAdams, D.P., Aubin,E.S.(1998): Generativity and adult development, How and why we care for the next generation, American Psychological Association Washinton,DC.
- 森美保子,福島脩美(2008): 自己対面法によるライフレビューが高齢者に与える影響, 目白大学心理学研究, (4), pp.85-99.
- 諸井克英(1991): 改訂版 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討, 人文論集, 42, pp.23-51.
- 諸井克英(2001): 改訂版 UCLA 孤独感尺度日本語版(堀洋通監修, 山本眞理子編)心理測定尺度集 I 人間の内面を探索〈自己・個人内過程〉, pp.222-225, サイエンス社, 東京.
- 中澤世都子(2007): 高齢者の孤独感と文化的自己感の類型が適応におよぼす影響, 老年社会科学, 29(3), pp.384-391.
- 則定百合子,齋藤誠一(2009): 老年期の孤独感と生活意識に関する研究, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3(1), pp.101-106.
- 大場宏美,藤原佳典,村山陽他(2013): 世代間交流プログラムの評価に向けた日本語版 generativity 尺度作成の試み, 日本世代間交流学会誌, 3(1), pp.59-65.
- 小澤義雄(2012): 老年期の Generativity 研究の課題-その心理社会的適応メカニズムの解明に向けて-, 老年社会科学, 34(1), pp.46-56.
- 末田啓二(2002): 高齢者の「教える」行為と心理的適応との関係 - 「教える」行為に対する高齢者と青年の意識 -, 近畿大学教育論叢, 13(2), pp.1-10.
- 坂野雄二,東條光彦(1986): 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み. 行動療法研究, 12(1), pp.73-82.
- 田渕恵(2010): 世代性 (Generativity) の概念と尺度の変遷, 生老病死の行動科学, 15, pp.13-20.
- 田渕恵,権藤恭之(2011): 高齢者の次世代に対する利他的行動意欲における世代性の影響, 心理学研究, 82(4), pp.392-398.
- 田渕恵,中川威,権藤恭之他(2012): 高齢者における短縮版 Generativity 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討, 厚生指標, 59(3), pp.1-7.
- 田渕恵,三浦麻子,中川威他(2013): 高齢者における世代性 (Generativity) と次世代とのか

かわり行動の因果関係, 日本世代間交流学会誌, 3(1), pp.35-40.

竹内香織,磯和勅子,福井享子(2011):地域高齢者における主観的幸福感に関連する社会活動要因, 三重看護学誌, 13, pp.23-30.

竹田恵子,太湯好子,桐野匡史他(2007):高齢者のスピリチュアリティ健康尺度の開発ー妥当性と信頼性の検証ー, 日本保健科学学会誌, 10(2), pp.63-72.

山本眞理子,松井豊,山成由紀子(1982):認知された自己の諸側面の構造, 教育心理学研究, 30(1), pp.64-68.

山本眞理子,松井豊,山成由紀子(2001):自尊感情尺度(堀洋通監修, 山本眞理子編)心理測定尺度集 I 人間の内面を探索〈自己・個人内過程〉, pp.29-31, サイエンス社, 東京.

<http://www.kokoronet.ne.jp/fukui/gses/> (こころネット株式会社:自己効力感を測定する質問紙 GSES 一般性セルフ・エフィカシー尺度, 2012.7.29)

第6章 要介護高齢者の Generativity における関心の概念検討、 及び Generativity における関心と心理社会的要因との関連

第6章では、施設入所中の要介護高齢者の Generativity を解明するために、地域高齢者に行った調査とほぼ同様の調査を行った。そして、要介護高齢者の Generativity における関心と心理社会的側面との関連から、要介護高齢者の Generativity における関心について検討する。

第1節 研究目的

我が国においては多様な高齢者施設が存在し、あらゆる健康状態の高齢者に対して、様々なサービスが提供されている。しかし、各施設での高齢者の生活は、前向きに自律して過ごそうとする人ばかりではなく、また地域における生活者の一人という実感を持てないまま日々を過ごしておられる人も多いと推察できる。施設に入所した高齢者自身が、自己イメージを介護される側、あるいは介護を受ける人という立場に身を置かざるを得ない高齢者も少なくないのが現状であろう。Erikson, J.H. は、老年期のコミュニティの考え方として、健康管理のための介護という関わり合いであっても、尊敬に満ちた人間味溢れる配慮を持って行うことによって、その人は介護が必要な人として扱われることなく、人間としての尊厳を感じることができると述べている (Erikson, E.H., 1997)。このことは、要介護状態となってもより善い高齢者観が構築された次世代からの長寿者への関わりやケアが、要介護高齢者の尊厳性を高めることに繋がる可能性を示唆するものと考えられる。

これまで述べてきたように、先行研究においては、健康な高齢者の Generativity の尺度開発や、高齢者の Generativity における関心と心理社会的側面との関係性、Narrative approach による高齢者の心理過程を明らかにすることが試みられている。しかし、小澤は、今後の研究において、高齢者の Generativity 研究の課題として、心身の機能が大きく損なわれる老年期の終盤における Generativity の心理的適応機能がどのように維持されているかについての検討が必要であると指摘している (小澤, 2012)。要介護状態で施設に入所している超高齢者、すなわち老年期の終盤を迎えている高齢者を対象とした Generativity の様相を明らかにし、Generativity を踏まえた要介護高齢者へのケアの方向性を追求していくことは、高齢者の尊厳性をいかに高めるかを追究することになり、そして尊厳性を高めるケアの追究は Generativity 研究にとっても重要である。特に、尊厳性が低下しやすい環境におかれていると推察できる要介護高齢者の Generativity を解明することによって、高齢者の生活の質を高めるケアの方向性を示すことが可能と考える。そこで、本調査では要介護高齢者の Generativity における関心の様相とは如何なるものか、心理社会的側面を含めて要介護高齢者の Generativity について明らかにする。

第2節 方法

第1項 対象及び方法

2013年10月～2014年12月に、A県B市を中心とした介護老人保健施設等に入所中

の要介護認定を受けている 65 歳以上の高齢者（以後、要介護高齢者）を対象とした。B 市及びその周辺の介護保険施設等の施設長と看護責任者の同意と協力が得られた 11 施設に入所中で、書面で高齢者本人の同意が得られた者を対象とした（資料 2）。

施設長、及び看護管理者らに研究と調査の趣旨を説明して、同意が得られたのちに、各施設の病棟責任者等から対象者を紹介していただいた。調査は研究者らが施設を訪問し、1 対 1 で聞き取り調査を行った。その際、調査への同意は得られても、正確な回答が得られないと研究者が判断した場合は調査を中止した。

第 2 項 調査内容（資料 4）

本調査の内容は、第 5 章の地域高齢者への調査同様に基本属性と心理的尺度で構成した。基本属性として年齢、性別、家族構成、家族交流、友人交流、若者世代との交流、施設種、介護度、健康状態を調査した。心理的尺度として Generativity における関心については丸島の改訂版世代性関心尺度を使用した。本尺度を選考した理由は、前述の内容に加えプレテストにおいて複雑な用語がなく超高齢者でも回答が容易であったこと、Generativity とその他の心理的側面との関連を検討するための質問項目数と内容が妥当であると判断したためである。以下にその他の使用した心理的尺度を記載する。

1. 基本属性：

性別、年齢、家族構成、家族交流、友人交流、若い世代との交流、施設種、介護度、健康状態について尋ねた。基本属性は、調査研究において重要な位置づけをもち、対象集団の特質を表すものである。

2. 心理的尺度：

使用した心理的尺度は、①改訂版世代性関心尺度（GSC-R：丸島，2007）、②生活満足度（LSIK：古谷野ら，1990）、③主観的健康統制感（堀毛，1991,2001）④スピリチュアリティ健康感（SP 健康感：竹田ら，2007）、⑤自己効力感（GSES：坂野ら，1986）、⑥孤独感（諸井ら，1991,2001）、⑦自尊感情（山本ら，1982,2001）であった。

第 3 項 分析方法

基本属性については記述統計量を算出した。丸島らの GCS-R の 20 項目に対して項目分析を行った。その結果、1 項目を削除して探索的因子分析（主因子法、Promax 回転）を行い、分析結果の妥当性を検証するため確認的因子分析をおこなった。モデルの適合度を適合指標（GFI）、自由度修正済み適合度指標（AGFI）、比較適合度指標（CFI）、平均二乗誤差平方根（RMSEA）で確認した。その後、因子分析で得られた 3 因子の合計を合成得点とし各心理社会的尺度との相関（Pearson の相関係数）を求めた。さらに、高齢者の Generativity における関心を潜在変数とし、他者交流の状況と心理的尺度を観測変数とした仮説モデルを作成し、モデルの適合性を検証するため共分散構造分析を行った。その際、各心理社会的尺度と Generativity における関心との関係を検討し、分析を繰り返して適合度のより高いモデルを探索的に検討した。その仮説モデルの適合性を共分散構造分析で検証した。分析は SPSS Statistics 18.0j，SPSS Amos 21.0j を使用した。

第4項 倫理的配慮

健康状態を把握している病棟責任者等から対象者を紹介していただき、本人及びご家族に研究の主旨と方法、所要時間、協力するかしないかは自由意思で行われることを書面と口頭で説明した。また、調査に協力しないことによって、施設側の対応が変わることはなく、不利益は被らないことを説明した。調査が負担であると感じた場合には中止することが可能であることを十分に理解してもらい聞き取り調査を始めた。また調査中は対象者の言動から負担を感じるような様子が見られた場合には、その時点で対象者が不快に感じないように調査を中止し、病棟スタッフ等に状況を報告した。事前に口頭と書面で施設長に研究の主旨と方法等を説明する際に、施設側が必要とする場合には施設側からも対象者本人に説明書類が作成された。

第3節 結果

1. 対象者の特徴

対象者の概要を表 6-3-1 に示した。11 施設で約 12 ヶ月間に聞き取り調査を実施し、分析可能と判断できた対象者は 67 名であった。平均年齢は 88.06 ± 6.17 歳（72 歳～99 歳）であった。年齢期別では、ほとんどが後期高齢者で 66 名（98.5%）であった。そして男性が 10 名（14.9%）、女性が 57 名（85.1%）であった。介護度は要支援者が 7 名（10.4%）、要介護 1 が 21 名（31.3%）、要介護 2 が 14 名（20.9%）、要介護 3 が 16 名（23.9%）、要介護 4 が 6 名（9.0%）、要介護 5 は 3 名（4.5%）であった。

家族交流については、月に 1 回以上の交流がある人数が 0～1 人であると答えた者が 33 名（49.3%）で、2～3 人であると答えた者が 25 名（37.3%）、4 人以上であると答えた者が 9 名（13.4%）であった。友人との交流は、気兼ねなく話せる友人の数が、0～1 人であると答えた者が 42 名（62.7%）、2～3 名であると答えた者が 15 名（22.4%）、4 人以上と答えた者が 10 名（14.9%）であった。若い世代との交流は、若い人との交流が全く或は減多に交流がないと答えた者が 27 名（40.3%）、少し或はいつも交流している者が 40 名（59.7%）であった。健康状態は、特に症状がないと答えた者が 16 名（23.9%）で、何らかの身体的症状があると答えた者が 51 名（76.1%）であった。

施設長及び看護管理者の研究承諾、及び同意が得られた施設は 5 市町、全 11 施設であった。施設の概要は以下の通りである。施設の種類は介護療養型医療施設が 1 施設、介護老人保健施設が 6 施設で、そのうち 2 施設は系列病院が隣接している施設であった。そして介護老人福祉施設 3 施設と、回復期リハビリテーション病床が 1 施設であった。市街地の施設が 6 施設、島嶼地域が 3 施設、山間地域が 2 施設で、施設の収容人数は平均 78.7 床（46 床～100 床）であった。

2. 要介護高齢者の Generativity における「関心」の特質

丸島らの GCS-R において天井効果・床効果・I-T 相関・G-P 分析を行った結果、20 項目のうち GCS-R 12 は I-T 相関の係数が低値のため項目として削除した。合計 19 項目で探索的因子分析（主因子法、Promax 回転）を行った。結果は表 6-3-3 に示した。固有

値の変化量から因子数を3に定め、因子負荷量0.4以上の項目を採用し、3因子15項目を抽出した。第1因子は「私は変わったことや珍しいことをするのが好きだ」等の項目であり【創造性； $\alpha=.79$ 】と命名した。第2因子は「私は自分のこれまでの生き方を若い人に伝えていくように努めてきた」等で【世代継承性； $\alpha=.77$ 】と命名した。第3因子は「困っている人を見ると、つい手助けしたくなる」等で【他者貢献性； $\alpha=.67$ 】と命名した。次に、探索的因子分析で得られた因子構造の妥当性を検証するため、確認的因子分析を行った。その結果を図6-3-1に示す。GFIが.81, AGFIは.74であった。また, CFIは.90, RMSEAは.07で適合度に問題はなく、基準に達していると判断した。以上のように、要介護高齢者のGenerativityにおける関心は、3因子15項目で構成されていた。

表6-3-1 対象である要介護高齢者の基本属性 n=67(11施設)

| 平均年齢 | | 88.06±6.17 (72～99歳) |
|----------|-------------|---------------------|
| | | 人数 (%) |
| 性別 | 男性 | 10 (14.9) |
| | 女性 | 57 (85.1) |
| 年代 | 前期高齢者 | 1 (1.5) |
| | 後期高齢者 | 66 (98.5) |
| 家族構成 | 1人暮らし | 37 (55.2) |
| | 夫婦二人 | 3 (4.5) |
| | 子ども夫婦と同居 | 7 (10.4) |
| | 三世帯世帯 | 6 (9.0) |
| | その他 | 14 (20.9) |
| 家族との交流 | 0人～1人 | 33 (49.3) |
| | 2人～3人 | 25 (37.3) |
| | 4人以上 | 9 (13.4) |
| 友人との交流 | 0人～1人 | 42 (62.7) |
| | 2人～3人 | 15 (22.4) |
| | 4人以上 | 10 (14.9) |
| 若い世代との交流 | 全く交流していない | 14 (20.9) |
| | めったに交流していない | 13 (19.4) |
| | 少しは交流している | 29 (43.3) |
| | いつも交流している | 11 (16.4) |
| 要介護度 | 要支援 | 7 (10.4) |
| | 要介護1 | 21 (31.3) |
| | 要介護2 | 14 (20.9) |
| | 要介護3 | 16 (23.9) |
| | 要介護4 | 6 (9.0) |
| | 要介護5 | 3 (4.5) |
| 施設の種類 | 介護療養型医療施設 | 7 (10.4) |
| | 介護老人保健施設 | 44 (65.7) |
| | 介護老人福祉施設 | 4 (6.0) |
| | その他 | 12 (17.9) |
| 健康状態 | 症状がある | 16 (23.9) |
| | 症状がない | 51 (76.1) |

表6-3-2 要介護高齢者のGCS-Rの探索的因子分析結果(主因子法,プロマックス回転)

| 全 体 $\alpha = .84$ | | 第1因子 | 第2因子 | 第3因子 |
|---|----------------------------------|-------|-------|-------|
| 第1因子：創造性 $\alpha = .79$ | | | | |
| GCS1 | 私は変わったことや珍しいことをするのが好きだ | .758 | -.215 | -.030 |
| GCS7 | 私は問題をといたり、ものを作ったりしている時が一番楽しい | .711 | .068 | -.084 |
| GCS4 | 私は他人がびっくりするようなことをしたり、ものを作ったことがある | .659 | -.107 | .066 |
| GCS10 | ものを考えるときに変わった考えができます | .596 | .220 | -.055 |
| GCS15 | 次世代のために環境汚染に繋がることをしないように極力努めている | .568 | .188 | -.139 |
| GCS8 | 私は何かを考えて、いい考えが浮かんだ時とてもうれしく感じる | .436 | .205 | .079 |
| GCS6 | 私は夢のようなことを考えるのが好きだ | .429 | -.224 | .233 |
| 第2因子：世代継承性 $\alpha = .77$ | | | | |
| GCS9 | 私は自分のこれまでの生き方を若い人に伝えていくように努めてきた | -.097 | .825 | .083 |
| GCS20 | 自分の経験を通して得た知識などを他人に伝える努力をしてきた | .037 | .815 | -.171 |
| GCS17 | 私の死後にも、私が貢献したことは残っているように思う | .161 | .755 | -.122 |
| GCS13 | 相手の話に耳を傾ける | -.054 | .401 | .005 |
| 第3因子：他者貢献性 $\alpha = .67$ | | | | |
| GCS19 | 困っている人を見ると、つい手助けしたくなる | .055 | -.064 | .696 |
| GCS3 | 悲しんでいる人を見たらなぐさめる | -.247 | .088 | .669 |
| GCS2 | 私は大多数の人と違ったところがあるように感じる | .126 | -.102 | .431 |
| GCS11 | 他人の面倒をよく見る | .377 | .141 | .400 |
| 因子間相関 | | | | |
| 第1因子 | | 1.000 | .517 | .490 |
| 第2因子 | | | 1.000 | .441 |
| 第3因子 | | | | 1.000 |
| 削除された項目 | | | | |
| GCS5 | 私は自分がすることは、たいいて新しく創造的であるように努めている | .303 | .116 | .299 |
| GCS14 | 子どもの世話をよくする | -.032 | .326 | .371 |
| GCS16 | 私は自分の死後に残るようなことは何もしていないと思う* | .002 | -.100 | .317 |
| GCS18 | 奉仕活動に喜んで参加する | .196 | .185 | .247 |
| GCS12 | 私は他人に寄与するような価値のあることは何もしていない* | .412 | -.410 | -.089 |

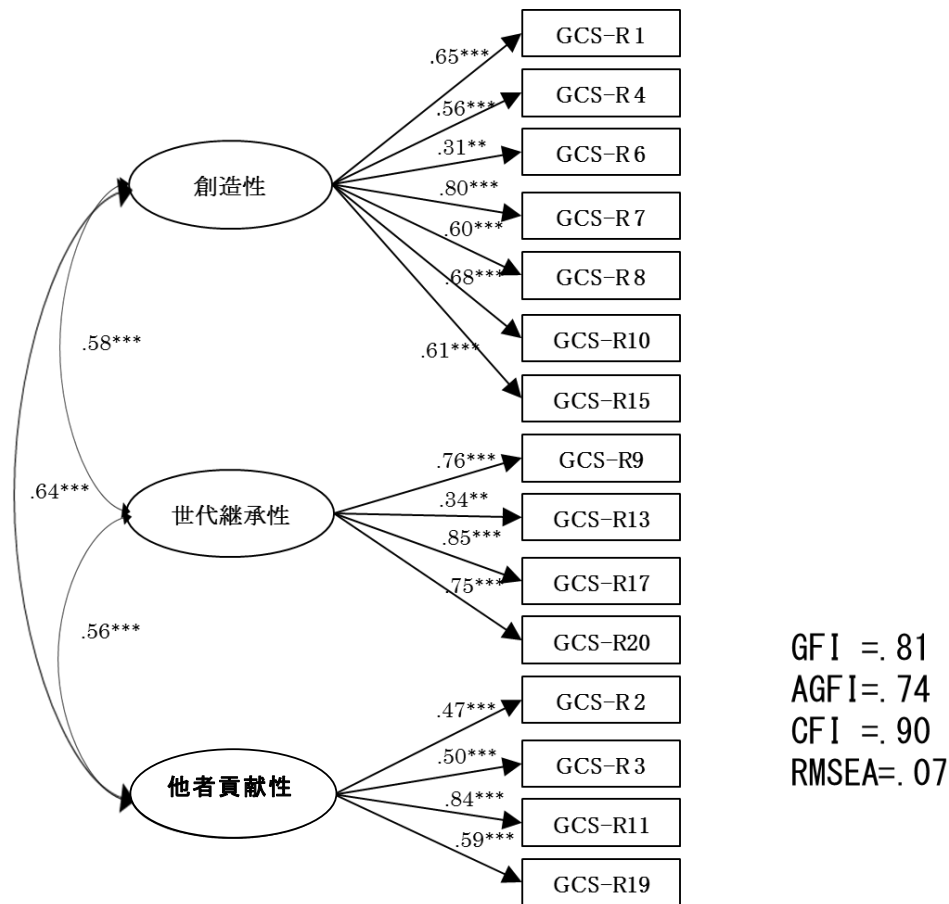


図6-3-1 要介護高齢者のGenerativityにおける関心の確認的因子分析

3. 要介護高齢者の Generativity における関心の 3 因子の合成得点と各心理的尺度との相関関係、及び偏相関関係

因子分析の結果で得られた【創造性】【世代継承性】【他者貢献性】の 3 因子 15 項目を要介護高齢者の Generativity における関心尺度とし、各因子の合計を合成得点として算出した。Generativity 合成得点と各心理的尺度得点の平均を表 6-3-3 に、相関係数と、SP 健康感及び孤独感を制御変数とした偏相関の結果を表 6-3-4 に示した。主観的健康統制感 (HLC) については本調査では十分な回答が得られなかったと判断し分析から除外したことから、基本属性と 6 つの心理的尺度を用いて調査を行った。すべての尺度における逆転項目は点数を逆転させて集計した。各尺度の平均得点は要介護高齢者の Generativity 合成得点が 40.79 ± 7.01 、生活満足度は 4.66 ± 2.13 、SP 健康感が 66.10 ± 8.70 、自己効力感が 48.03 ± 10.50 、孤独感は 37.43 ± 8.97 、自尊感情は 32.05 ± 5.19 であった。Generativity 合成得点は生活満足度を除く全ての尺度と相関していた ($r = .38, p < .01$, $r = .51, p < .05$, $r = -.41, p < .05$, $r = .46, p < .001$)。SP 健康感は孤独感、自尊感情とそれぞれ相関していた ($r = -.54, p < .05$, $r = .35, p < .01$)。自己効力感は孤独感と自尊感情に相関しており ($r = -.29, p < .05$, $r = .65, p < .001$)、孤独感は自尊感情と相関していた ($r = -.35, p < .01$)。

表6-3-3 要介護高齢者の各心理的尺度得点

| | (得点範囲) | n | 平均 | ± | 標準偏差 | α 係数 |
|-----------|---------|----|-------|---|-------|------|
| GCS合成得点 | (15～60) | 67 | 40.79 | ± | 7.01 | .84 |
| 生活満足度 | (0～9) | 64 | 4.66 | ± | 2.13 | |
| SP健康感 | (18～90) | 59 | 66.10 | ± | 8.70 | .82 |
| GSES標準化得点 | (23～68) | 64 | 48.03 | ± | 10.50 | |
| 孤独感 | (20～80) | 61 | 37.43 | ± | 8.97 | .89 |
| 自尊感情 | (1～50) | 62 | 32.05 | ± | 5.19 | .67 |

表6-3-4 要介護高齢者のGenerativity合成得点と各心理的尺度との相関(右上段)と偏相関(左下段)

| | GCS 合成得点 | 生活 満足度 | SP健康感 | GSES標準化得点 | 孤独感 | 自尊感情 |
|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------|
| GCS合成得点 | — | -.075 | .376 ** | .509 *** | -.405 *** | .463 *** |
| 生活満足度 | -.147 | — | .137 | .192 | -.356 ** | .150 |
| SP健康感 | .185 | -.071 | — | .178 | -.542 *** | .349 ** |
| GSES標準化得点 | -.492*** | .191 | -.021 | — | -.294 * | .645 *** |
| 孤独感 | -.298* | -.338*** | -.453*** | -.261* | — | -.352 ** |
| 自尊感情 | .411** | .100 | .204 | .609*** | .202 | — |
| | *p<.05 | **p<.01 | ***p<.001 | | | |

4. 要介護高齢者の「Generativity における関心」と心理社会的要因との関係

「Generativity における関心」を潜在変数とした仮説モデルを元に探索的に検討し、共分散構造分析を行った。地域高齢者の結果を基に要因間にパスを設定し分析を行ったが、図 6-3-2 には有意なパスのみを記載し、要介護高齢者の Generativity への関心を介在した生活要因モデルを示した。共分散構造分析の結果、高齢者の Generativity における関心は友人交流から影響を受け、Generativity における関心を介在して SP 健康感、自己効力感、孤独感、自尊感情に影響していた。自己効力感は自尊感情に、孤独感は SP 健康感に影響しており、さらに、自己効力感と孤独感は、生活満足度に影響していた。また、Generativity における関心は直接的に生活満足度に負の影響を与えていた。それらの影響による生活満足度の決定係数は $R^2=.27$ で、モデルの適合度は $GFI=.86$, $AGFI=.79$, $CFI=.92$, $RMSEA=.07$ であった。

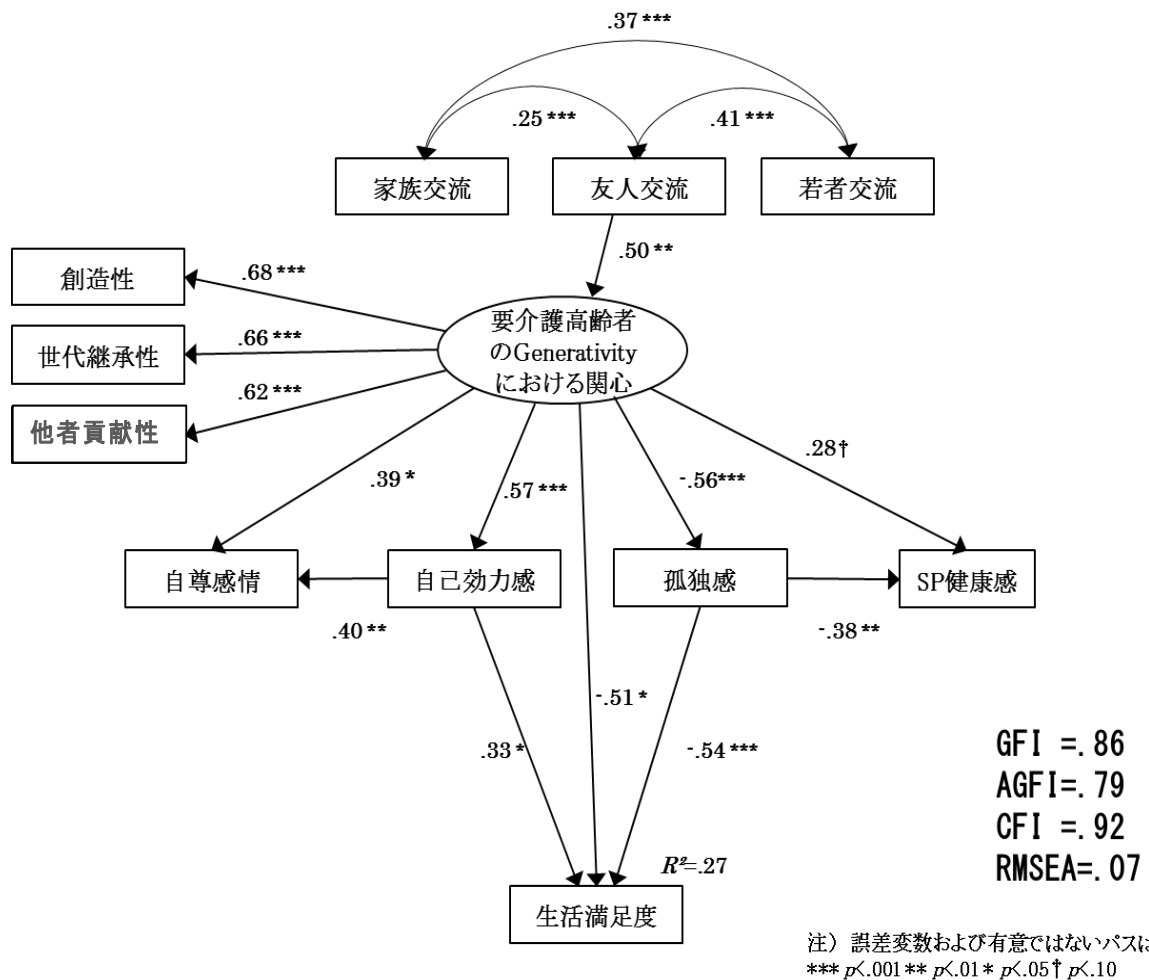


図6-3-2 要介護高齢者のGenerativityにおける関心を介在した生活要因モデル

第4節 考察

超高齢社会を迎えた我が国において、要介護高齢者は600万人に達し、今後ますます増加すると予想される。看護にとって要介護高齢者の生活の質を高めるためのケアを追究することは重要課題である。介護が必要な状態であっても、ベッド上で自由に動くことすらできない状態であっても、他者から尊敬を受け、人としての尊厳を維持しながら過ごすことは、最期の時まで人間として『生ききる』ために最も重要な要素であろう。その尊厳性に関連するとされるGenerativityについて、丸島ら（2007）はGenerativityにおける関心が創造性、世代継承性、世話の3因子構造であることを報告した。本研究者ら（2014）は地域高齢者を対象に調査を行い創造性、世代継承性、積極性という3因子構造であったことを報告し、第5章でも述べてきた。丸島らの作成した尺度は経験を伝え、次世代を育てるという意味だけでなく、人生の意味や人としての生の営みを表現することが可能であり、高齢者ケアへの方向性を示すことのできる尺度と考えられたため、要介護高齢者への調査への適応も可能と判断した。要介護高齢者のGenerativityを検討した先行研究はなく、

本調査は超高齢者の **Generativity** の特質と、老年期に **Generativity** がどのように変容していくのかを解明することに繋がるものと考ええる。

1. 要介護高齢者の **Generativity** における関心の特質

本調査の対象者は、要介護認定を受けている高齢者であり、多くが女性で、そしてほとんどが後期高齢者であった。また半数が独居であり、家族や友人との交流も少なかった。それゆえ、本調査結果は後期高齢者、女性、要介護高齢者という状況にある集団とみなすことができる。これらは現在の高齢者施設の高齢者像の現状を反映するものであるといえよう。本調査において、要介護高齢者の **Generativity** における関心は創造性・世代継承性・他者貢献性の3因子が導き出された。丸島ら(2005,2007)が示した創造性、世代継承性、世話の3因子とはその構成内容に相違を認めた。特徴的な本調査結果との相違は、丸島らの研究対象は25~75歳であり、生み育てるという子ども・孫との強い直接的関係性をもっていることが影響していると考えられる。丸島らが示した「世話」という因子は、直接的に他者を世話し、育むといった意味を持つ因子であろう。しかし、本研究の対象である要介護高齢者は、積極的な、また、直接的な世話という行為を行うには厳しい身体的・環境的状况にある。そうした限られた物理的・人的環境の中にあっても、対象者は自己が存在する環境の中で自然な形で他者を想い、他者を気にかけるといふ他者への関心を寄せていた。それゆえ、本調査では世話というより他者貢献性と命名した。このことは、いかなる状態にあっても誰かを気にかけ、自己にできることを創造的に継承的に見出そうとする高齢者の強み、価値と捉えることができる。種橋(2012)は、意思疎通の困難な高齢者へのケアの、高齢者と介護者の相互関係において、高齢者は社会的存在であることを報告している。本調査では、高齢者が **Generativity** を発揮して限られた環境の中、限られた人との関わりあいの中で自己の社会的存在意義を高めていることが考えられ、他者貢献性という因子は要介護高齢者にとって、自己を社会的存在とするための重要な因子であると考えられる。

また、丸島らの結果と同様に抽出された創造性、世代継承性という因子は、命名した用語は一緒であっても、その内容には若干の相違が認められる。創造性という因子については、身体的活動に制限があつて実際にモノを作り上げることはできなくても、自己の内面で過去に創造してきたもの、あるいは現在の環境の中で創造・工夫していることが示されていると推察できる。また、世代継承性については、地域高齢者の場合にはより直接的な世話をする項目で構成されていたが、要介護高齢者の場合には直接的な、行動的な貢献というよりも、過去に自己が達成してきたことや、現在できる範囲で他者を想い、他者を気遣うという情的な貢献性であった。

以上のように、要介護高齢者の **Generativity** における関心の特質は、身体的には自由に活動して他者を世話することは難しいが、自己にできる可能な範囲での他者貢献を発揮していることが伺える結果であった。そして、次世代のために何をしてきたか、過去に継承してきたことや、やり遂げてきたことを、現在の限られた環境の中で振り返り、そのことを反映させながら現在もなお継続させている様子が伺えた。それらの特質は加齢により、身体に障がいを持っているからこそ低下することなく、身体障がいを抱えたから可能となった **Generativity** の変容であろう。すなわち、老年期の **Generativity** における関心は、

人生の終盤になって、なお変容を遂げることが可能であり、その変容は、情的な他者貢献性として高齢者の内面に存在することが示唆された。その変容は生きてきた人生を肯定的に受け止めることを可能にし、また自己の存在に価値を見出すことを可能にするものである。以上のことから、要介護高齢者、超高齢者においても、**Generativity** は発揮され、そのことによって、高齢者が自己の存在をポジティブに捉えることを可能にすることが考えられた。

2. 要介護高齢者の **Generativity** と心理的尺度との関係

GCS-R の尺度とそれ以外の心理的尺度の平均得点を先行する文献と比較すると、本研究の対象者の生活満足度は谷口 (2013)、深堀ら (2009)、竹内ら (2011)、及び讃井ら (2014) の結果に比べてやや低い値を示す集団といえる。先行研究のほとんどは地域高齢者であり、自律して生活をしている集団である。本研究の対象者が要介護の状態であることから考えると、やや低い得点になることは想定内であろう。しかし、施設に入所し家族と離れ、地域とのつながりにも変化をもたらした障がいをもつ本研究の対象者らは、比較的、生活への満足度は保たれていた。また、自己効力感については青木 (2001)、森 (2008) の対象に比べて、そして **SP** 健康感も古川 (2007) と比較して、大きな差はなかった。孤独感については中澤 (2009) と比較すると、本調査の対象者の方がやや孤独感を感じていたが、自尊感情は楠本 (1997) と比べると低値を示し、中澤 (2007) と比べると大きな差はなかった。つまり、本調査対象者は施設の中で、地域で暮らしているときと同程度に自己を認識し、自分の存在を活かしながら、友人・隣人との関係性を維持しているものと推察できる。

Generativity における関心の合成得点は自己効力感、自尊感情との間で中程度の正の相関を認め、孤独感と負の相関を認めたことは、先行研究の結果と同様であり、**Generativity** が精神的な健康と関連が見られることを示している。特に、**SP** 健康感と関連が見られたことは **Generativity** が高齢者の発達や適応という心理的側面にとって重要な視点であることを示していると考ええる。生活満足度、及び **SP** 健康感と孤独感と負の相関があり、また **SP** 健康感と自尊感情と正の相関が、さらに自己効力感と孤独感と負の相関、自尊感情と正の相関を認めた。そして、孤独感と自尊感情と負の相関を認めたことは既存の研究結果と同様の結果を示していると考えられる。これらのことから第 5 章でも述べた本調査対象者らが地域高齢者に行った調査 (讃井ら, 2014) と同様に、**Generativity** における関心が高齢者の心理社会的発達に関連しており、心理的健康において重要な要素であると考えられる。

以上のことから、本調査の対象である要介護高齢者は、介護が必要な状態で施設という限られた人間関係の中での生活を送りながら自己の経験を、置かれた環境に適応して、他の高齢者や職員の状況を見極めて自己を表現していると言える。そして、対象者の多くが女性であることを考えると、地域で生活しているときに少しずつ感じてきた、自宅で暮らすことへの限界と不安といった精神的負担の中では感じるができなかった自己の活かし方の再発見を行っているとも考えられる。

3. 要介護高齢者の生活と Generativity

要介護高齢者は、友人交流が Generativity における関心に影響し、Generativity における関心が介在して SP 健康感、自己効力感、孤独感、自尊感情に影響を与え、さらに、自己効力感と孤独感が高齢者の生活満足度に影響していた。要介護高齢者にとって、友人交流は自己の創造性や培ってきた経験の継承を共有し、気かけあうことを認識させる。その結果、自己の行ってきたことを肯定的に捉えることができ、自己効力感を高めたものと考えられる。喪失体験の多い高齢者は、たとえ一人であっても友人との交流は人生を共有できる数少ない他者となる。その友人との交流は生きてきた過去を想起させるきっかけであり、過去を共有することのできる貴重な存在である。その友人との交流によって過去を振り返ることができ、あるいは過去を想起することができることは、要介護高齢者にとって人としての統合性を高めるきっかけとなる。また、それら貴重な存在を認識することは、孤独感を低下させることに繋がると考える。

以上のように、要介護高齢者にとって、友人交流は重要で貴重な外的要因と言えるが、一方では、家族との物理的距離の乖離や、現在の生活の中において次世代との関係の希薄さが友人交流のみの関連という結果になっている可能性も否定できない。第5章で述べた地域高齢者の場合、若者との交流が外的要因として重要であることが示されたが、要介護高齢者にとっての若者交流の在り方を検討していくことの重要性が示されているものと考えられる。またこれらのことは、たとえ手段的な気に掛けるという言動がなくとも、自己ができる範囲で、できる配慮を行っているが高齢者自身が自己認識できることが重要であることを示している。

以上のことから、本調査においては要介護高齢者の Generativity における関心が自己効力感と孤独感に影響することで、自己の存在価値と SP 健康感を高めることに繋がっていた。スピリチュアリティは生きる意味や目的とも関連しており、高齢者の発達課題を「統合」へと導くことに繋がる。つまり、Generativity における関心は要介護高齢者の生活満足を感じるため、人間としての統合性を培うために必要な媒介要因であり、友人交流は Generativity における関心を喚起するために必要、かつ重要な外的要因といえる。

しかし、本調査結果の一方では、要介護高齢者の Generativity における関心は直接には生活満足度を低下させることも示している。このことは、次世代への関心を高めることができて、実際にはその機会が存在しないか、あるいは行動に移せない、行動していることを認識できないことから、生活満足度を低下させる結果となっていることも考えられる。また、Erikson, J.H. が述べているように、人生の最終段階に入る時期の Generativity は高齢者にとって自己を継承することが負担となる可能性を示しているとも考えられる (Erikson, E.H., 1997)。このことについては今後の課題となった。

4. 要介護高齢者の Generativity を検討することの意義と看護への示唆

要介護高齢者は施設という限られた生活環境の中で、自己を活かしながら、他者を気遣い、自分にできる何らかの言動と情動を発揮しながら生活を維持していた。要介護高齢者の生活の中における Generativity の意味は、表面上では表現しにくく、またその表現は気づきにくいものが多いことが容易に想像できる。しかし、どのような Generativity 的情動が要介護高齢者の内面で起こっているかを追究することは、その高齢者の自己効力感や自

尊感情、または孤独感や人生の意味を実感することに繋がると考える。そして、それらを介して生活満足に繋がることが示唆されたことは、要介護高齢者への Generativity 的視点をもったケアの可能性と必要性が示されていると考える。そのゆえ、要介護高齢者の Generativity は如何にして喚起させられるのか、その Generativity は要介護高齢者にとってどのような意味を持つのかを明らかにしていく必要がある。そして、それらを明確に示すことによって、看護の視点で Generativity を検討し、Generativity 的視点に立った看護介入を検討することができる。

本章の最期に、本調査で協力していただいた要介護高齢者の方々は、施設入所中であってもかなり自律的に過ごしておられる方であった。また 11 施設からのご協力をいただき継続的に調査を行ったにもかかわらず、実際に調査が可能であり、データ分析が可能な高齢者はごく少数であった。このことは、我が国が置かれている高齢者社会の現状、介護保険施設等に入所されている高齢者の身体的・精神的な状況が既に深刻な状況であることを反映している。それと同時に、超高齢者研究の難しさと限界を示している。当然のことながら、本調査だけでは対象者数が少ないこと、文化的背景に影響されることが予想されることを考えると、本結果を単純に一般化することは難しい。しかし、本調査対象者は介護を受けつつも自己の創造性を発揮し、他者に対し施設内でも可能な限り自己を活かしながら生活していることが推察できた。このことは要介護高齢者の豊かさや存在価値を示すものであり、今後の高齢者ケア研究の方向性を示すものであったと考える。つまり、要介護高齢者が Generativity への関心から行動へ移行できるように支えるためには、自己を語ることを意味を検討していくことの重要性が示されたものと考え。これらのことは、Generativity 的視点に立った高齢者ケアの可能性を示しており、高齢者が尊厳性を保持しながら、また自己の存在を感じながら人生を全うする支援のために Generativity という概念を高齢者看護に組み入れることの意義を示すものであると考える。

第 5 節 第 6 章のまとめ

本章では、人として避けては通れない介護が必要な状態、つまり人生の終盤を迎えている高齢者を対象に Generativity における関心の様相を解明することを目的とした調査結果を示した。

介護老人保健施設に入所中の要介護高齢者に対して Generativity 関心尺度、及び基本属性と 6 つの心理的尺度を用いて調査を行った。その結果、要介護高齢者の Generativity における関心は第 5 章で述べた地域高齢者と同様に 3 因子で構成されていることが明らかとなった。「創造性」「世代継承性」「他者貢献性」の 3 因子である。創造性は地域高齢者とほぼ変わらない項目で構成された因子であったが、要介護高齢者の世代継承性は地域高齢者に比べて「自分のこれまでの生き方を若い人に伝えていくように努めてきた」「経験を通して得た知識などを他者に伝える努力をしてきた」「私の死後にも、私が貢献したことは残っているように感じる」など、動的な内容というより情的な内容の項目で構成されていた。また、さらに情的な傾向を示したのが他者貢献性である。「困っている人を見ると、つい手助けしたくなる」「悲しんでいる人を見たらなぐさめる」など自由に行動することが困難な状況ではあるが、他者を想い、他者が幸せであることを願うという形で、

Generativity における関心を示していた。

また、要介護高齢者の Generativity も地域高齢者同様に心理的尺度との相関関係を認め、友人との交流が外的要因となり Generativity を喚起させていたことが明らかとなった。生活満足度に繋がる構造には違いがあった。友人との交流が Generativity における関心を介在して SP 健康感、自己効力感、孤独感、自尊感情に影響していた。自己効力感は自尊感情に、孤独感も SP 健康感に影響しており、さらに、自己効力感と孤独感も、生活満足感に影響していた。これらのことから、障がいによって介護が必要な状態であり、また人生の終盤を迎えつつある後期高齢者であっても、本調査の対象高齢者は自己のできる範囲で他者を想うという内面的な、情的な形で Generativity における関心を示していることが明らかとなった。また、自由に行動ができなくなったからこそ自分にできることを創造的にを行い、それが自己効力感に繋がっている。

本章においては、要介護高齢者の Generativity における関心を解明し、心理社会的要因との関係とそれらの構造を明らかにした。また、要介護高齢者が友人との交流から Generativity を喚起し、自己効力感と孤独感が生活満足度に影響することを明らかにした。要介護高齢者は他者からの介護が必要な状態にあっても他者を想い、自己を活かそうとすることで自己の存在を認識し、その価値を高めていることも理解できたことは、要介護高齢者へのケアの方向性を示している。つまり、要介護高齢者が Generativity への関心から行動へ移行できるように支えるためには、自己を語ることの意味を検討していくことの重要性が示されたものである。これらのことは、Generativity 的視点に立った高齢者ケアの可能性を示すものであり、高齢者が尊厳性を保持しながら、また自己の存在を感じながら人生を全うする支援のために Generativity という概念を高齢者看護に組み入れることの意義を示すものである。

引用文献

- 青木邦男(2001):在宅高齢者の孤独感とそれに関連する要因－地方都市の調査研究から－, 社会福祉学, 42(1), pp.125-136.
- Erikson,E.H.,Erikson,J.M.(1997)/村瀬孝雄, 近藤邦夫訳(2001): ライフサイクルその完結(増補版), みすず書房, 東京. (The life cycle completed, A review, Expanded edition, W.W.Norton & Company Inc, New York)
- 深堀敦子,鈴木みずえ,グライナー智恵子他(2009): 地域で生活する健常高齢者の介護予防行動に影響を及ぼす要因の検討, 日本看護科学会誌, 29(1), pp.15-24.
- 古川秀敏,国武和子(2007): 地域在住高齢者の抑うつに関連要因 - N 県 N 町の老人クラブの調査結果 -, 日本看護研究学会雑誌, 30(4), pp.61-66.
- 古谷野亘,柴田博,芳賀博他(1990): 生活満足度の構造 - 因子構造の不変性 -, 老年社会科学, 12, pp.102-116.
- 楠本有理子,本村汎(1997)老年期の自尊感情に関する一研究, 大阪市立大学生生活科学部紀要, 45, pp.231-241.
- 丸島令子(2005): 世代性尺度の作成 - 世代性の関心と行動モデルの測定 -, Journal of Japanese Clinical Psychology, 23(4), pp.422-433.
- 丸島令子, 有光興記(2007): 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性、妥当性

- の検討, 心理学研究, 78(3), pp.303-309.
- 丸島令子(2009): 成人の心理学 世代性と人格的成熟, ナカニシヤ出版, 東京.
- 森美保子, 福島脩未(2008): 自己対面法による大輔レビューが高齢者に与える影響, 一目白
大学心理学研究, (4), pp.85-99.
- 諸井克英(1991): 改訂版 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討, 人文論集, 42, pp.23-51.
- 諸井克英(2001): 改訂版 UCLA 孤独感尺度日本語版(堀洋通監修, 山本眞理子編) 心理測
定尺度集 I 人間の内面を探索〈自己・個人内過程〉, pp.222-225, サイエンス社, 東
京.
- 中澤世都子(2007): 高齢者の孤独感と文化的自己感の類型が適応におよぼす影響, 老年社
会科学, 29(3), pp.384-391.
- 則定百合子, 斉藤誠一(2009): 老年期の孤独感と生活意識に関する研究, 神戸大学大学院人
間発達環境学研究科研究紀要, 3(1), pp.101-106.
- 小澤義雄(2012): 老年期の Generativity 研究の課題・その心理社会的適応メカニズムの解
明に向けて-, 老年社会科学, 34(1), pp.46-56.
- 坂野雄二, 東條光彦(1986): 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み, 行動療法研究,
12(1), pp.73-82.
- 讃井真理, 河野保子(2014): 高齢者の Generativity における「関心」の概念分析, 及び高
齢者の生活に及ぼす Generativity の検討, 看護学統合研究, 16(1), pp.6-17.
- 竹内香織, 磯和勅子, 福井享子(2001): 地域高齢者における主観的幸福感に関連する社会活
動要因, 三重看護学誌, 13, pp.23-30.
- 竹田恵子, 太湯好子, 桐野匡史他(2007): 高齢者のスピリチュアリティ健康尺度の開発 - 妥
当性と信頼性の検証 -, 日本保健科学学会誌, 10(2), pp.63-72.
- 谷口奈穂, 桂俊樹, 星野明子他(2013), 地域在住の前期高齢者と後期高齢者における QOL 関
連要因の比較, 日本農村医学会雑誌, (2), pp.91-105.
- 種橋征子(2012): 意思疎通困難な寝たきりの高齢者に対する援助の視点 - 介護職員との「ケ
ア」の関係性に着目して -, 高齢者のケアと行動科学, 17, pp.52-56.
- 山本眞理子, 松井豊, 山成由紀子(1982): 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究,
30(1), pp.64-68.
- 山本眞理子, 松井豊, 山成由紀子(2001): 自尊感情尺度. (堀洋通監修, 山本眞理子編) 心理
測定尺度集 I 人間の内面を探索〈自己・個人内過程〉, pp.29-31, サイエンス社, 東京.

第7章 Generativityを踏まえた Narrative Approach による 要介護高齢者への看護介入、及び看護ケアモデルの検討

第5章では地域高齢者における、第6章では要介護高齢者における Generativity の解明のために、その実態について述べてきた。地域高齢者においても、要介護高齢者においても、家族以外の友人や若者との交流が Generativity を喚起することが明らかとなった。また、Generativity における関心は性別や年齢など基本属性に影響をうけるが、そのどちらも自己効力感や自尊感情など人間の心理発達の側面と関連が見られ、それらを介して最終的には生活満足に影響していることが明らかとなった。そして、高齢者看護に Generativity 的視点を組み入れたケアの重要性を論じてきた。以上のことから、第7章では、Narrative approach による看護介入を実施することによって、要介護高齢者が如何に人生を語り、自己の存在を意識しているのかを検討し、また、その反応から Generativity を踏まえた看護ケアモデルを試作する。さらに、要介護高齢者への Narrative approach 実施の意義と有用性について検討する。

第1節 研究目的

第6章で行った要介護高齢者への実態調査の結果から、要介護高齢者は地域高齢者と比較しても心理的健康は保たれており、さらに、他者と交流することによって Generativity への関心が喚起され、自己効力感を高め孤独感を改善させ、そのことが生活満足に影響していることが明らかとなった。そして、要介護高齢者が Generativity における関心を発揮するようなケアを検討することの重要性が示された。また、要介護状態であっても Generativity は維持されることも実証された。しかし、要介護高齢者、超高齢者はどのように Generativity を質的に変容させ、心理社会的健康と心理的発達を遂げて人間としての統合性を高めながら生活を送っているのかという課題は解明されていない。そして、それらを解明することは要介護高齢者の心理社会的支援の方向性をより具体的に示すことに繋がると考える。

第1章でも述べたが、McAdams,D.P.らが示した Generativity の概念図（図1-2-1）では、高齢者の Generativity のための動機づけとして《内的希求》と《文化的要請》があり、それにより喚起した「世代性の関心」という要素によって《世代性への行動》をとらせる。そして、これら全体の過程を通して、その過程を《物語る》ことにより世代性の全容を明確にでき（McAdams,D.P.ら、1992）、そのことは世代性のテーマを持った内容のライフヒストリーであることが示されている（丸島、2009）。また、先行研究において老年期は Generativity の回想に関する語りが増える傾向にあり、それを語ることで自己が次世代に遺してきたことを老年期でしかできない思考の構成によって再評価をする（小澤、2012）という Narrative approach に関する報告もある。他方、Cheng,S.T.や田渕らは若者からの敬意の反応が多いことが老年者の Generativity に影響するという報告（Cheng,S.T., 2009 ; 田渕ら、2012,2013）等に見られるように、高齢者と他者との関係性から老年期の Generativity を検討している研究もある。これらのことは、高齢者が自らの生き様を語ることの重要性を示すとともに高齢者の Generativity は、その高齢者が過去の人生を物語る

ことによって、人生を再構成し高齢者自身が自己の価値を高めることを意味している。要介護高齢者へ Narrative approach というケアを実施することによって、親近感及びラポールの形成につながり、要介護高齢者の認知・感情が表現でき高齢者が自己開示することにより、その人の開放性が促進でき、人生の再構成を促し、結果として高齢者が自己の価値を高めるという効果が期待できる。

以上のことから、本章では要介護高齢者にとっては次世代となる研究者に Generativity を踏まえて『語る』という看護介入に対する要介護高齢者の状況を分析により、要介護高齢者の Generativity における関心の概念を質的に解明するとともに、要介護高齢者が次世代に語ることによる反応から看護介入の効果を検討する。そして、Generativity を踏まえた Narrative approach による看護ケアモデルを試作する。それらのことは、高齢者を一人の価値ある存在としてみなすことであり、高齢者を尊重する態度に繋がる。また高齢者の生きてきた人生に意味を与え、高齢者は次世代にとって有用な存在であることを証明できる。これらのことは、個人にも社会にも課題である要介護高齢者の QOL と尊厳性を高めるための質向上に役立つと考える。

第2節 方法

第1項 対象及び方法

対象は介護保険施設に入所中の認知症でない65歳以上の高齢者2名である。施設長、及び看護管理者らに研究と調査の趣旨を説明して同意が得られたのちに、各施設の病棟責任者等から対象者を紹介していただいた。調査は研究者が施設を訪問し1対1で Narrative approach を実施した。その際、調査への家族の同意は、施設側スタッフから家族に説明が行われ口頭で同意をいただいたことを確認した後に調査を行った（資料3）。対象が体験してきた生活史とこれまでの人生の中で若い世代に伝えてきたこと・伝えたいことについて半構造的に研究者が問いかけながら対象者に語ってもらった。語りの内容は承諾を得て録音し逐語録にした。Narrative approach 実施中に語りの妨げにならないよう参加観察法を用いてフィールドノートに、意図的な項目として語ることによる表情の変化、自発的な言動、研究者とのコミュニケーション状況、前身で示すジェスチャーの4側面と、語りが終了した後に気づいたことを追記した。1回目の語りに要する時間は60分程度であった。3～4日の間隔を開けて2回目の Narrative approach は、意味の違いの確認を中心に、10分程度行った。

第2項 調査期間と内容

2015年10月～11月に調査を行った。Narrative approach は研究者が対象者と対面し、身近な例、すなわちお生まれはどちらですか、お住まいはお近くですかというような質問から行い、また「子どもさんのことについて教えてくださいか」「ご両親のことについて教えてくださいか」「これまでの人生をどのように感じておられますか」「次の世代に伝えてきたこと・伝えたいこと」の4側面からなるインタビューガイドを用いて半構造化面接法を用いて実施した。

第3項 分析方法

Narrative approach 実施中の会話とフィールドノート記述内容を繰り返し読み、聞いて全体を把握した。対象者の語りと語ることによる表情の変化、自発的な言動、研究者とのコミュニケーション状況、感謝することと感謝されることについて、対象者が何を語っているかの意味を一つの主張に要約し記録単位を付した。次に文脈を熟読したうえで類似した記録単位を集め、その意味内容を損ねないようにコード化した。そして各コードを意味内容からサブカテゴリーに類型化した。最後にサブカテゴリーと単位化した意味内容からコアカテゴリーを導きだした。単位化からコアカテゴリー抽出までの過程は、高齢者看護及び質的研究に精通する看護学教育研究者からスーパーバイズを受けながら行い、単位化、類型化の妥当性と信頼性を確保した。

第4項 倫理的配慮

施設長及び看護部長の研究協力の承諾確認後、各病棟及び療養棟の管理責任者に相談のうえ対象者を決定した。その後対象者及び家族に調査依頼書をもって書面と口頭で説明し本人の自由意思で同意を得た。半構造化面接法の調査に関しては IC レコーダー録音と逐語録は研究者及び指導教員以外が視聴することはないように管理した。特定の施設や名称は記号化し個人等が特定されること、内容が漏れることのないように管理し、録音された会話は研究が最終的に終了した時点で消去するなど十分に配慮することを説明したうえで同意をいただいた。Narrative approach の実践は、対象者の体調の良い時の 60 分程度とし、対象者の体調に変化が見られた場合には調査を途中で中止し、スタッフへ状態を報告するように手順の確認を行って実施した。調査中に答えにくい質問には返答を強要せず、高齢者が理解しやすいように質問の方法を工夫し、調査と Narrative approach の介入が負担にならないように十分に配慮した。質問の方法を工夫したにもかかわらず対象者が返答に苦慮する場合には無理な回答は避けるようにした。心身への負担が感じられた場合は調査及び Narrative approach の実践を途中で中止し、スタッフと管理者へ状況を報告し、看護管理者と相談のうえ調査及び Narrative approach の実践を途中で中止し研究のデータとして除外するなど配慮することを研究依頼書に記載し、十分説明したうえで実施した。

第3節 結果

第1項 対象者の概要と抽出されたコアカテゴリー

1. 対象者の概要

対象者は介護保険施設に入所している後期高齢者 2 名であった。個人特性は表 7-3-1 に示す。A 氏は 89 歳の男性で、要介護 1 の認定を受けていた。急性腎不全の治療後に体力等低下がみられ、介護老人保健施設に入所された。投薬治療とリハビリテーションを受けていた。B 氏は 88 歳の女性で、要介護 1 の認定を受けていた。右膝関節骨折の手術後にリハビリテーション目的で入所されていた。

表 7-3-1 対象者の概要

| | 年齢 | 性別 | 疾患名 | 状況 |
|---|---------|-----------------------|-----|--|
| A | 89 歳、男性 | 急性腎不全 | 他 | 今年の夏に脱水で倒れているのを息子が発見し総合病院へ入院となる。一時的に意識等不良であったが、徐々に改善した。しかし、自宅が階段の上であり、現在の体力では退院は無理との判断で、リハビリ目的で入所された。 C 県出身、34 歳の時に転勤して以後、D 市在住。息子は 2 人、同県内と他県に在住している。妻は以前から同施設に入所している。 歩行器でゆっくり歩行し、入浴は見守りと一部介助、排泄はほぼ自立。 |
| B | 88 歳、女性 | 右膝関節骨 折固定術後 高血圧 | | 本年初め、夜中に自宅で転倒し救急車で運ばれて手術をしたが、加齢により治癒が遅れている。自宅で過ごせるようにとリハビリ目的で入所された。10 ヶ月たっても未だに痛みがある。右膝関節の可動域制限有り。息子は 1 人、E 県に在住している。夫は 20 年前に亡くなって以後は、一人暮らし。F 県出身、G 死には結婚して以後に在住。 歩行器でゆっくり歩行、入浴は一部介助、排泄は自立、夜はポータブルトイレ使用。 |

2. 抽出されたコアカテゴリー

2 名の要介護高齢者の語りからのコードは A 氏が 26 個、B 氏が 51 個であった。その後 A 氏が 9 個、B 氏が 14 個のサブカテゴリーに類型化された。最終的に 4 個のコアカテゴリーが抽出された。最終的な概念は【他者貢献性】【社会貢献性】【健康への希求】【世代継承性】であった。コアカテゴリー抽出までの過程を表 7-3-2、表 7-3-3 に示す。

以下、各コアカテゴリーと、コアカテゴリーを構成するサブカテゴリーと、代表的なコード内容のみ抜粋して述べる。なお、【 】はコアカテゴリー、『 』はサブカテゴリー、《 》はコード、〈 〉は記録単位で記載する。

1) 【他者貢献性】に集約された語りの内容

このコアカテゴリーは、A 氏は 3 個、B 氏は 6 個のサブカテゴリーで構成された。A 氏のサブカテゴリーは『相手への配慮』『息子との関係』『親・兄弟との関係』の 3 個であり、B 氏のサブカテゴリーは『他者への配慮』『感謝すること』『他者への気遣い』『人を敬うこと』『家族との関係性』『次世代への愛情』の 6 個であった。

A 氏の『相手への配慮』は 5 つのコードから成り〈話しかけると笑顔で丁寧なお辞儀をしてくださる〉《自分が役に立つかどうかかわからないと謙遜される》《相手への関心を示す》という記録単位とコードの内容で構成されていた。『息子との関係』は《子供を育ててきたが自分とは同じ道には進まなかった》ことが否定的ではなく肯定的に語られた。『親・兄弟との関係』は《自分は多数の兄弟の中の長男である》ことから《弟や妹の世話をさせられたことを》うれしそうに語られた。

B 氏の『他者への配慮』は〈インタビューの時間ちょうどに合わせて、ちょうどよい場所を見つけて待っておられる〉《もっと良い話をして役に立てればいいのだがと謙遜する》といった 3 コードから構成された。『感謝すること』についてはポータブルトイレを朝になってスタッフが片付けることについて《相手が気の毒で、ありがとうねって感謝する》

ことについて申し訳なさそうに話をされ、食事もままならない百歳の人がほんの些細なことでもありがたいを伝えていることに感心する》という 2 つのコードから構成された。『他者への気遣い』は《百歳の人が伝えるありがたいの一言を（自分も）見習わないといけない》、また違うフロアーに部屋が替わった長寿者を見舞った際に《百歳の人からあなたも気をつけなさいよ》《座っているだけのようでも、ジーと他者の行動を見て「あんた、どこいくの？気をつけなさいよ」と話す姿が、なんともかわいい（かわいいと言っては失礼だが）》という要介護高齢者であり長寿者であっても他者を気遣う言動が見られることへの敬意が語られた。『人を敬うこと』は《子どもを殺したり、こどもが両親を殺したりは、どうしてそんなことがおこるのかわからない》《目上の人を敬うということが薄れてきている》など否定的な 3 コードが語られた。『家族との関係性』は《働いて苦労して大学を出したから、今は息子がよくしてくれる》などの 2 コードで構成された。『次世代への愛情』は《学生はかわいいし、気になる》《動けない時に、力がいる時の男の看護師さんは頼りになるが、介護する人たちはみな腰を痛めている》《トイレでただいまって言ってドアを開けてくるから、つい笑顔がでる。そんなふうに気分を和らげてくれて、気持ちが楽になる声をかけてくれるとかわいい》など 4 コードで構成された。

A 氏の『相手への配慮』と B 氏の『他者への配慮』は同様の意味内容であり、また A 氏の『息子との関係性』『親・兄弟との関係性』と B 氏の『家族との関係性』も意味内容は同じであった。

2) 【社会貢献性】に集約された語りの内容

A 氏は 2 個のサブカテゴリーで、B 氏は 1 つのサブカテゴリーで構成された。A 氏は《定年まで工場で勤め上げた》という『社会への責任』と《中学生から武道をはじめて、最高位の称号をもって家で指導していた》《学校の教科目でも部活でも教えていた》《部は初めから私が作り上げたもの》という『社会貢献』から構成されていた。

B 氏は『社会とのつながり』という一つのサブカテゴリーでの構成ではあるが、その内容は 7 コードであり多岐にわたっていた。《昔は賑やかだったところも今はシャッター通りになっている》《今の時代は先生を友達扱いで、先生があんまり厳しくすると、父兄が怒ってくる》《近所の人々が玄関を開けて、B さん元気にしているかね？》といって、勝手に入ってきて声をかけてくれる関係だから、留守していてもみんなが気を付けてくれる》《同じテーブルの人はみんな昭和生まれで、自分は大正生まれ》など、社会状況から生活圏内の状況変化、あるいは施設内のコミュニティ環境に至る広く環境を見渡している内容であった。

3) 【健康への希求】に集約された語りの内容

A 氏、B 氏ともに 1 つのサブカテゴリーで構成されていた。A 氏は《自分のように武術をやりながら次世代には健康に過ごせようと願う》《武術をやってきたことで他の人より少しは姿勢が整っている》という 2 つのコードから、B 氏は《普通なら 3 ヶ月で治る予定が 10 ヶ月たっても治っていない》《頑張っているけども、足が前に出てこない》《食事や薬など血圧管理もままならないから家に帰ってからのことが心配》《今度こけたら、歩けなくなるだけではすまないかもしれない、麻痺がおこったり、子どもに迷惑かけたり、

そうになったら困る》《ここを利用している人はみんな家に帰りたい人ばかり》等、8個のコードで構成されていた。

4) 【世代継承性】に集約された語りの内容

このコアカテゴリーはA氏が3個のサブカテゴリー、B氏が6個のサブカテゴリーから構成された。A氏のサブカテゴリーは『自己の追求』『自己を伝えること』『自己理解』であった。B氏は『親からの教育』『躰の変貌』『人生の回顧』『亡き親族の回顧』『母親への思慕』『世代の遷り変わり』の6個のサブカテゴリーであった。

A氏のサブカテゴリーの意味内容は、『自己の追求』では《的（弓道）にあたった感覚というのは忘れられない心地よい感じ》《矢をひく瞬間は、いい》《道場に入る前から気が締まる》《武術で静を学ぶ》という4個のコードで構成され、『自己の伝えること』のサブカテゴリーは《気負わずに自分が教えなくても自分がやっていることをそのまま見せて、そのままを伝えればいい》という武道の精神と長く次世代への教育に携わってきたA氏の継承観が語られた。『自己理解』は《穏やかそうにそうに見えて、武道をやっていたので穏やかではなく激しい性格だ》という1個のコードであった。

B氏の『親からの教育』は《昔は親がいけと言ったら、嫁にも行かないといけなかったが、今では（女学校に）行かせてもらって良かった》と思えるようになったこと、《昔はだまっけていても父親は怖いものだし、あれが躰で、教育のひとつ》であると今では認識できることが語られた。『躰の変貌』は《今は公共の場などでうるさくしている子供に対して、勇気のあるおじさんが静かにしなさいと言ったら、その親はここはそういうところではないとは言わずに怖いおじさんに怒られるから静かにしなさいというが、それでは躰にはならない。そのあたりは自分たちの時代と変わった》こと、《お父さんに対しては、あげると言っていましたし、人の子どもにあげて頂戴とは言いますが、自分の子どもに「やる」と言わずに、「あげる」と言っているのを聞くと違うと思うし、そればダメと思う》というB氏の親から受けた躰が今に反映されていた。また《躰ということが子どもの方からすると、わからないのだろう》《おかあちゃんは僕らが悪いことしたら、怒って怖かったと子どもが言うが、子どもが悪いことするから叱るのであって、怒ると叱るとは違うし、昔は近所の人には子どもが悪いことしたらみんなで叱っていた》と、以前に躰された時と比較し、現在の躰の感じられない社会についてのコードで構成された。『人生の回顧』は《戦争のおかげで、女学校時代は、勉強よりも勤労奉仕とかして、勉強はそっちのけだった》《20年間一人でずっとやってきた》という否定的ではあるが、そういう時代を生き抜いてきたという自負を感じられるコードで構成された。『亡き親族の回顧』は、《主人は20年前に（亡くなりました）。兄弟は5人ですが、兄はシベリアの方で戦死し、3つ違いの弟と、その下の弟もなくなった。妹は福島津波でだろうと思うが調べてもわからない》という亡くなられた（と思われる）家族への無念さが語られていた。

そして、『母親への思慕』は今回のインタビューでは内容的に一番多くが語られた内容であった。転倒し、夜中に動けなくなった夜間の出来事の語りでは《骨を折った時に、夢の中かどうかかわからないけど、やさしく、背中を撫でてくれるような感じだった。今思うと涙が出ますけど、あれは母親の手だった。お母さんの手だと思った。男でも女でも、母親というものはいい》《言葉は通じないというか、言葉は聞こえないけど、じわーっと、

がまんしなさいよと言って、お母さんが優しくさすってくれていたんだと思う。母親が、亡くなってからも、守ってくれていると思ったら、元気にならないといけないと思う》《おかゆさんを炊いて、卵落として、優しい手でそういったものを食べさせてくれたり、背中を撫でてくれたりする、そのような感覚を感じた》という霊的な体験の語りと、《靈感も何もないのにどうしてかなあ、と言ってみたら、息子が、おばあちゃんが頑張れよーと言って守ってくれているからと言ってくれた》《吉田松陰の歌にもあるが、萩に行けば石碑にも刻んである「親思う 心にまさる 親心 けふのおとずれ 何ときくらん」と。子どもが親のことを思う以上に、親は子どものことを思うという意味》といった現在の心境の語りであった。また、だからこそ《今のニュースにあるように自分の両親を殺ろしたり・・・そういったことは自分たちには考えられないこと》という語りに繋がっていた。

『世代の遷り変わり』は《頑張らないといけない。いつまで生きているかわからないけど、そう言えるのは、生きているうちだけ》《大正・昭和・平成と 3 代にわたって入所しているが、(帰られたけど) 百四歳の人もおられて、百歳の人何人もおられますから、私の前席の人は 96 歳だし、私もがんばらないといけない》という自身の死も身近に感じつつも、周りを見れば自分よりも年上の方が頑張っている姿が、自己の生活への意欲となっていることが語られた内容であった。

表 7-3-2 A 氏の語りの内容の分析

| コア カテゴリー | サブ カテゴリー | 事実（A 氏の言動） |
|-------------|--------------|--|
| 他者貢献性 | 相手への配慮 | 1. 笑顔で丁寧なお辞儀 2. 良いことは話せないがと言いながら席に案内する 3. 自分が役に立つかどうか分からないと謙遜する 4. そんなに丁寧にしなくても大丈夫ですと安心していることを表明する 5. 学生の中に自分が教えている高校の卒業生はいますかと他者に興味を寄せる |
| | 息子との関係 | 6. 子どもを育ててきたが、自分と同じ道にはすすまなかった |
| | 親・兄弟との関係性 | 7. 両親は厳しい人だった 8. 何人兄弟の何人目だと思いますか 9. 自分は多数の兄弟のなかの長男である 10. 両親は大変だっただろう 11. 自分がどう育ってきたのかを振り返る 12. 取っ組み合いの喧嘩もしたと懐かしむ 13. 長男なんだから妹と弟の世話をさせられたとうれしそうに話す |
| 社会貢献性 | 社会への責任 | 14. 定年まで工場で勤め上げた |
| | 社会貢献 | 15. 中学生から武道をはじめて、最高位の称号をもって家で指導していた 16. 高校の教科目でも部活でも教えていた 17. 自分のことは、卒業生の誰に聞いてもわかる 18. 部は初めから私が作り上げたもの |
| 健康への希 求 | 健康と生き甲斐 | 19. 自分は武術をっていたから健康である 20. 武術をやってきたことで他の人より少しは姿勢が整っている |
| 世代継承性 | 自己の追求 | 21. 的にあたった 感覚 というのは忘れられない心地よい感じ 22. 矢をひく瞬間は、いい 23. （道場に）入る前から気が締まるからよい 24. 武術で静を学ぶ |
| | 自己を伝えるこ と | 25. 気負わずに自分が教えなくても自分がやっていることをそのまま見せて、そのままを伝えればいい |
| | 自己理解 | 26. 穏やかそうにそうに見えて、武道をやっていたので穏やかではなく激しい性格だ |

表 7-3-3 B 氏の語りの内容の分析

| コア カテゴリー | サブ カテゴリー | 事実（A 氏の言動） |
|-------------|-------------|--|
| 他者貢献性 | 他者への配慮 | 1. 時間にちょうど良いところで待っている。 2. あなたも大変ですねと相手をねぎらう 3. もっといい話をして役に立てればいいのだがと謙遜する |
| | 感謝すること | 4. トイレを置いてくれて、バケツを持って集めに来るときは相手に 気の毒で、ありがとねって感謝して、本当にありがたい 5. 食事のままならない 百歳のおばあちゃん が日常のほんの些細なことでも ありがと を伝えていることに感心する |
| | 他者への気遣い | 6. やってもらって当たり前ではなく、あるおばあちゃんが伝える ありがと の一言を見習わないといけない 7. 声をかけると「(百歳の人が) あんたも 気をつけなさい 」と他者を気遣ってくれた 8. 座っているだけのようでも、ジーと他者の行動を見て「あんた、どこいくの？ 気をつけなさいよ 」という姿が、なんともかわいい |
| | 人を敬うこと | 9. 「孝行したいときには親はなし」の言葉を例にして、 子どもを殺したり、こどもが両親を殺したりは、どうしてそんなことがおこるのかわからないと話す 10. 他者のことは何とでも言えるが、自分も子どもに伝えてきたかという とできたとは言えない 11. 目上の人を敬うということが薄れてきているように思う |
| | 家族との関係性 | 12. 働いて苦労して大学を出したから、今は息子がよくしてくれる 13. 息子は大学卒業すると、その近くに就職して家族と暮らしはじめた |
| | 次世代への愛情 | 14. 学生は かわいいし、気になる 15. 動けない時に、力がある時の男の看護師さんは頼りになるが、介護する人たちはみな腰を痛めている 16. トイレに行きたくなくて人を呼んだ時に男の子が来たらどうしよう と 思っていたけど、 ただいまって言ってドアを開けてくるから、つい笑顔がでる。そんなふうに気分を和らげてくれて、気持ちが楽になる 声をかけてくれるとかわいい 17. 若い人から教えてもらう事ばかり |
| 社会貢献性 | 社会とのつながり | 18. 昔は賑やかだったところも今はシャッター通りになっていると悲しそうに話す 19. 今の時代は先生を友達扱いで、先生があんまり厳しくすると、父兄が怒ってくる 20. 友達はみな、亡くなりました 21. 入院しているときは 近所の人がよくしてくれた。その人が来てくれると、ほっとするし、ありがたい |

| コア カテゴリー | サブ カテゴリー | 事実（A氏の言動） |
|-------------|-------------|--|
| | | <p>22. 夜中に膝が痛くて動けず、朝になって背中中で這って行って、何とか息子に電話して、息子が電話してくれて、そしたら、近所の人が飛んできてくれて、救急車呼んでくれて助かった。ありがたかった</p> <p>23. 同じテーブルの人はみんな昭和生まれで、自分は大正生まれ</p> <p>24. 表に出なかったら、近所の人が玄関を開けて、Bさん元気にしているかね？といって、勝手に入ってきて声をかけてくれる関係だから、留守していてもみんなが気を付けてくれる</p> |
| 健康への希求 | 健康への願い | <p>25. 普通なら3ヵ月で治る予定が10ヵ月たっても治っていない</p> <p>26. リハビリのためにここに来て頑張っているけども、足が前に出てこない</p> <p>27. ここにずっと入所しているわけにはいかないけど、食事や薬など血圧管理もままならないから家に帰ってからのことが心配</p> <p>28. 退所してから生活をしてみないとわからない</p> <p>29. 今度こけたら、歩けなくなるだけではすまないかもしれない、麻痺がおこったり、子どもに迷惑かけたり、そうなったら困る。</p> <p>30. ここを利用している人はみんな家に帰りたい人ばかり</p> <p>31. 利尿剤を飲んでいるから、夜は危ないからと言って、ポータブルトイレを置いてくれるから助かる。夜にトイレまで歩くのは心細い</p> <p>32. （母が見守ってくれているから）頑張らんといけない</p> |
| 世代継承性 | 親からの教育 | <p>33. 今、考えたらバカみたいだけど、昔は親がいけと言ったら、嫁にも行かないといけなかったが、今では（女学校に）行かせてもらって良かったかなーくらいは思う。</p> <p>34. （両親については）きびしいといっても、あのころはそれが普通で、昔はだまっけていても父親は怖いものだし、あれが躰で、教育のひとつ</p> |
| | 躰の変貌 | <p>35. 今は公共の場などでうるさくしている子供に対して、勇気のあるおじさんが静かにしなさいと言ったら、その親は、ここはそういうところではないとは言わずに、怖いおじさんに怒られるから静かにしなさい、というが、それでは躰にはならない。そのあたりは自分たちの時代と変わった</p> <p>36. お父さんに対しては、あげると言っていましたし、人の子どもにあげて頂戴とは言いますが、自分の子どもに「やる」と言わずに、「あげる」と言っているのを聞くと違うと思うし、そればダメと思う</p> <p>37. 私たちが小さい時には、そのように習ったけど、今は変わった</p> <p>38. 躰ということが子どもの方からすると、わからないのだろう</p> <p>39. おかあちゃんは僕らが悪いことしたら、怒って怖かったと子どもが言うが、子どもらが悪いことするから叱るのであって、怒ると叱るとは違うし、昔は近所の人は子どもが悪いことしたらみんなで叱っていた</p> |

| コア カテゴリー | サブ カテゴリー | 事実（A氏の言動） |
|-------------|-------------|---|
| | | 40. 今、他の子どもを叱ったら、こっちが怒られる時代になった |
| | 人生の回顧 | 41. 戦争のおかげで、女学校時代は、勉強よりも勤労奉仕としかして、勉強はそっちのけだった 42. 主人は亡くなったので、20年間一人でずっとやってきた |
| | 亡き親族の回顧 | 43. 主人は20年前に（亡くなりました）。兄弟は5人ですが、兄はシベリアの方で戦死し、3つ違いの弟と、その下の弟もなくなった。妹は福島の津波でだろうと思うが調べてもわからない |
| | 母親への思慕 | 44. 骨を折った時に、夢の中かどうか分からないけど、やさしく、背中を撫でてくれるような感じだった。今思うと涙が出ますけど、あれは母親の手だった。お母さんの手だと思った。男でも女でも、母親というものはいい 45. 言葉は通じないというか、言葉は聞こえないけど、じわーっと、がまんしなさいよと言って、お母さんが優しくさすってくれていたんだと思う。母親が、亡くなってからも、守ってくれていると思ったら、元気になるまいといけないと思う 46. 小さい時に病気をしたときに身体をさすりながら、物がないから、おかゆさんを炊いて、卵落として、優しい手でそういったものを食べさせてくれたり、背中を撫でてくれたりする、そのような感覚を感じた 47. 靈感も何もないのにどうしてかなあ、と言ってみたら、息子が、おばあちゃんが頑張れよーと言って守ってくれているからと言ってくれた 48. 吉田松陰の歌にもあるが、萩に行けば石碑にも刻んである「親思う心にまさる 親心 けふのおとずれ 何ときくらん」と。子どもが親のことを思う以上に、親は子どものことを思うという意味である 49. 今のニュースにあるように自分の両親を殺したり・・・そういったことは自分たちには考えられないこと |
| | 世代の遷り変わり | 50. 頑張らないといけない。いつまで生きているかわからないけど、そう言えるのは、生きているうちだけ 51. 大正・昭和・平成と3代にわたって入所しているが、帰られたけど百四歳の人もおられて、百歳の人も何人もおられますから、私の前の人には96歳だし、私もがんばらないといけない |

第2項 Generativity 的視点にたった要介護高齢者の自己の存在価値を支援する看護ケアモデルの検討

第1章から第7章の Narrative approach までの事実を踏まえ Generativity 的視点にたった要介護高齢者の自己の存在価値を支援する看護ケアモデルを図7-3-1に示す。

まず、要介護高齢者は個人特性、心理特性、環境や人生経験などから、様々な Generativity への関心を抱き、今を生きている。そしてそれらが、要介護高齢者一人ひとりが持つ過去と日々変化している現在の体験から独特な Generativity を発揮する。そうした要介護高齢者の独特な Generativity は概念化されて創造性、世代継承性、他者貢献性、健康への希求の4つの因子に集約され、構造化されている。

次にケア提供者は要介護高齢者と関わることにより、受け継ぐことと語り継ぐことを生成する。受け継ぐことと語り継ぐことの生成は、すなわち関わりの中の語り手と聴き手の関係性において相互に影響し合い生成されるものである。Generativity が生成されたケア提供者のかかわりは、語ること、笑うこと、自発的に振舞うこと、コミュニケーションをとること、感謝され感謝することを通して、要介護高齢者個人への影響を強くする。そのことは要介護高齢者の Generativity をポジティブな方向へ深化させる。

そしてケア提供者が、モデル図のような関係性を踏まえることにより、要介護高齢者が自己の存在に価値を見出していくことができる。自己存在価値とは、今後の人生を高齢者自身が前向きに生きていると自己が感じ取り、自己の存在を感じ、意味あるものと認識するものである。自己存在の価値を支援する看護ケアモデルを認識することは、要介護高齢者の QOL の向上に繋がる。

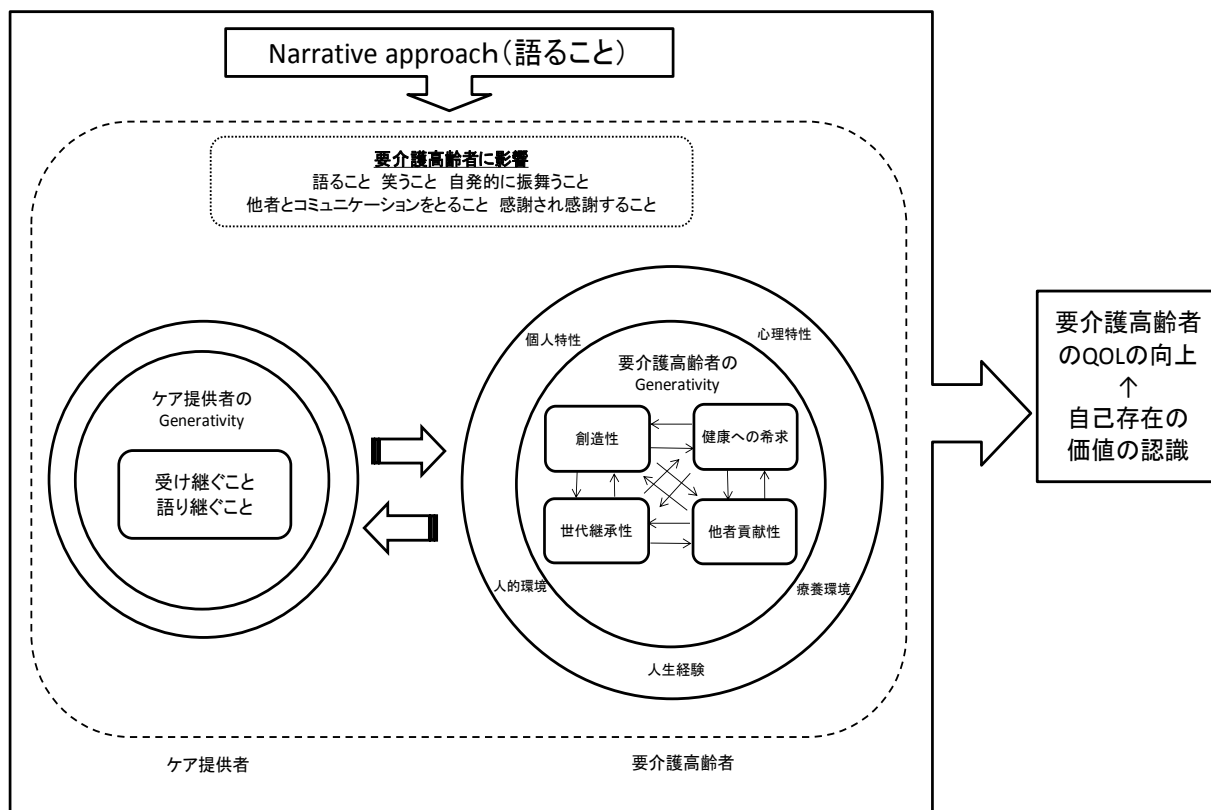


図7-3-1 Generativity 的視点にたった要介護高齢者の自己存在価値を支援する看護ケアモデル

第4節 考察

後期高齢者数は1000万人を、また要介護高齢者数も600万人を超え、これからも急激に何らかの支援を必要とする高齢者が増加することが明らかである我が国にとって、要介護高齢者が身体的状態の悪化を防ぎ、可能な限り心理社会的に安定した形で日々を過ごすような支援を検討することは、老年看護にとってはすでに喫緊の課題と考える。身体的な支援については新しい福祉用具や介護用品の開発が進み、快適な生活がおくれるような備品環境と看護・介護技術は整いつつあると言える。しかし、我が国は世界でもトップクラスの長寿国であるにもかかわらず、高齢者への心理社会的支援についての検討は立ち遅れているのが現状であろう。また、各種の高齢者施設においては施設内の高齢化と重度化が進み、一方ではケアを提供する法定人員は増加する傾向にはなく、入所されている高齢者の日常生活の援助活動に追われている状況にあることも事実である。

本調査で実施した Narrative approach は、高齢者の Generativity 研究においては重要な意味を持っている。Bruner,J.S. (2002) はナラティブの能力を備えると自己性を生み出すことができ、その自己性が自分を他者につなぎ、また想像される未来の可能性に向けて自分自身を形成するに当たり、それに役立つ自分の過去を選択的に探り当てることを可能にすると述べている。そして、本章では要介護高齢者への Narrative approach によって、高齢者の状況を、語った内容とともにどのように語ったかにも焦点を当てて分析することで、要介護高齢者の Narrative approach による自己の再構成を促すことの実践的効果を Generativity 的視点での実証を試みた。本調査における対象者2名は聴き手である研究者に語りながらも、同時に肯定的言動については自身が納得するように、言葉をかみしめるように、そして過去を現在に起こっている出来事かのように語っていた。McAdams,D.P.ら (1998) は、高齢者は物語ることによって過去に継承してきた自己の行為の意味を知覚できるとした。そして、やまだ (2000) は Narrative approach, すなわち人生の物語とは自己を意味づける行為であり、人生経験の組織化であると述べ、また物語の語り手と聴き手によって共同生成されるプロセスであり、物語の語り直しは人生に新しい意味を生成する行為として重要であると述べている。これらのことは、要介護高齢者への Narrative approach は、要介護高齢者が自己の人生を語り直すきっかけとなり、自己が歩んできた時間的経過を肯定的に物語として生成し直すことに繋がることを意味している。さらに、Bruner,J.S. (2002) が述べているように、要介護高齢者が更なる未来を、最期の時まで生き抜くための自己性を作り上げることを可能にするものであることを示唆している。以下は、本研究の対象者の語りの内容を Generativity 的視点から論述する。

第1項 対象者の語りから抽出された Generativity における関心の因子の特質

ここでは Generativity における関心の因子の特質を論ずる前に、まず本調査が Generativity 的視点にたった看護介入のための検討となりうるかについて検討する。既に示してきたように、Narrative approach 実施中の要介護高齢者から得られた4個の因子は【他者貢献性】【社会貢献性】【健康への希求】【世代継承性】であった。他者貢献性、及び世代継承性については、第6章で要介護高齢者に実施した因子分析の結果と同様の、

Generativity における関心の因子でもあった。そのことは本調査によって行われた語りのケアが Generativity 的視点に立った Narrative approach であったことを示している。Bladley(1998)が開発した Generativity Status Measur(GSM)や, McAdams ら(1997,1998)が行った面接法等はあるが, 本研究の究極の目的が, 要介護高齢者に対する存在価値を支援する看護ケアモデルを検討することであり, 対象者が可能な限り返答がしやすい質問項目である「子ども」「両親」「人生」「伝えて(継承して)きたこと, 伝えたい(継承したい)こと」という質問によって自己を振り返ってもらった。その結果, 量的研究と同様の因子が得られたことは, これらの質問項目が要介護高齢者にとって Generativity を発現するための重要性を示していると言えよう。

次に, 本調査で得られた要介護高齢者の Generativity における関心の因子について検討する。A 氏, B 氏ともに事実をもとに概念化を進めた結果, 4 つのコアカテゴリーすなわち【他者貢献性】【社会貢献性】【健康への希求】【世代継承性】が抽出された。高齢者が他者に人生の体験を語ることの意味は, 生まれ, 育ち, 老いていくことの自己存在の証言でもある。以下に, それぞれの語りから抽出した内容について述べる。

A 氏の語りにおいて, A 氏の人生を最も力強く牽引していたものは, 【社会貢献性】と【世代継承性】であることが推察できた。定年まで仕事を勤め上げ, 「武道」における高位の称号を受け, それを次世代に気負わず伝えている。その生き様が自己存在の証となり自尊感情に繋がっている。要介護高齢者の内的感情を思慮するとき, 多くの事実とともに様々な感情が生起していることが読み取れた。以上のことから, ケアに携わる者は何も語ることのない, あるいは語ることの少ない要介護高齢者であっても, その対象の感情を想い, 語ってもらうことへのアプローチを提供する必要がある。

また B 氏は, 女性特有の人生の歩み方を体験し, 母親としての役割存在において【世代継承性】を遂行している。B 氏は母からの愛情を受け継ぎ, それを子供へと繋ぎ, また友人・近隣の人々との関係性を保つことにおいて自己存在を語っている。自分のために, また家族・子供らのために, 少しでも長く頑張っていることの重要性を主張している。また【健康】の大切さを自覚している。B 氏の内的感情を思う時, その感情は多岐にわたり, 細やかな愛情を周囲に与えるとともに, これからさらに生きる人生の指標となっている。以上のことから, ケアに携わる者は性別, あるいは人生の歩み方により Generativity の現れ方に特殊性が認められることを認識し, ケアを提供しなければならないと考えられる。

このように, 本調査で得られた要介護高齢者の Generativity における関心の因子について, 要介護状態にある A 氏, B 氏はそれぞれ違う因子が主要テーマとなって自己の存在を物語っていた。そのことは, 前述したように, 高齢者ケアに携わる者は高齢者の人生の歩み方によって, その人が表出する Generativity の表現が違うことを意味している。そのことは, Narrative approach が自己を物語ることによって自己性を生み出すことに由来する。個々の高齢者によって Generativity の経験による感じ方, 考え方, 表現の形がさまざまであり, その人独自の主要テーマの様相によって要介護高齢者の内面が表現される。そして, その人独自の語りによって生成され自己という存在が生み出される。その自己の存在は, 現存する高齢者自身にとって将来を見据えた意味ある自己(自己性)であろう。このことが要介護高齢者の Generativity における関心の特質とも言える。

また、要介護高齢者の語りから抽出した **Generativity** における関心の因子と、要介護高齢者の実態調査から得られた因子の共通するものは【世代継承性】【他者（社会）貢献性】であったが、相違点も見られた。その相違点の一つは語りから抽出された【健康への希求】因子であった。A 氏 B 氏はともに要介護状態である。両氏にとって【健康への希求】という因子は入所生活や要介護状態などであることから抽出した因子でもある。このような制約状態で、なぜ【健康への希求】という因子が抽出されたのであろうか。この【健康への希求】という因子は要介護高齢者自身の自己への戒め・教訓でもあり、自己の人生を振り返った時に思う次世代への教訓とも捉えることができる。世代を超えて生き抜くために重要だと思われている健康という概念は、何らかの健康的障がいを抱えている要介護高齢者だからこそ抽出できた概念であったのかもしれない。そして、この【健康への希求】について本研究の対象者らは「頑張っているが足が前に出ない」「今度こけたら歩けなくなるだけではすまない」など負のイメージを持っていた。また「母が見てくれているから頑張る」「これまで武術をしてきたから健康である」といった正のイメージも持っており、そのことが **Narrative approach** において語られていた。このことは、本調査の対象である A 氏 B 氏が施設入所中の高齢者、特に後期高齢者であることによる特性と捉えることができる。社会の中で一人の生活者としての生活を送っていた対象者らが、それぞれ健康障がいを抱え、また健康や生命、年齢を意識せざるを得ない日々を送ることとなった。そのことは、後期高齢者である対象者自身にとって、これから先の次世代へ単なる健康という安寧な状況を受け継いでいくという目的だけでなく、生命そのものを受け継いでいくという自己の存在に対する発現ではないだろうか。そのことが、後期高齢者の **Generativity** の発現の特質であろう。

なお、丸島らの調査項目を用いた量的研究では【健康への希求】という因子は抽出されなかった。このことは、今回用いた丸島らの作成した尺度が **Generativity** 究明の調査項目として少し不十分ではないかと考えている。今後、丸島らの調査項目に健康に関する調査項目を追加して研究を行うことも検討する必要があるだろう。

本調査（質的研究）と第 5 章・第 6 章で行った調査（量的研究）において、もう一つの相違点は【創造性】の有無であった。本調査（質的研究）においては、【創造性】が抽出されなかった。この【創造性】が質的研究によって抽出されなかったことは、本調査（質的研究）が 4 側面（「子ども」「両親」「人生」「伝えてきたこと、伝えたいこと」）を中心に対象者に問いかけているため抽出されなかったのかもしれない。すなわち **Narrative approach** は語り手と聴き手との相互作用により形成され、瞬時瞬時の言葉や話す内容が中心に抽出されているため、1 回生のみの **Narrative approach** においては発現しなかったのかもしれない。しかし、吉村ら（2004）は高齢者の環境に合わせてテーマを設定し、**Narrative approach** を看護ケアとして実施することの重要性を述べている。継続的、縦断的ななかかわりの下で **Narrative approach** を実施することによる人生の語りの中に、**Generativity** の【創造性】を発現することは十分に考えられる。

そして、前述した【健康への希求】という因子は広義の意味においては【創造性】と捉えることが可能であろう。継承していくことは【創造性】という因子が基盤となっていることで成り立つとも考えられる。また、強調できることは、対象である A 氏、B 氏が身体的に環境の制約を受けながらも主体的に、積極的に可能な限りの生活を営んでいることが、

すなわち【創造性】に繋がっているものと考える。

以上のことから、本調査（質的研究）では要介護高齢者に独特の【他者貢献性】【社会貢献性】【世代継承性】【健康への希求】という因子があることが示唆された。

第2項 Generativity 的視点と Narrative approach による看護介入の意義と有用性

本研究の最終的目標は、Generativity を踏まえた自己の存在価値を高める看護ケアモデルの検討にあった。本章の最後に本調査で実施した Narrative approach の看護介入としての意義と有用性について検討する。

本章で述べてきたように、Generativity 的視点にたった Narrative approach の実施によって、要介護高齢者の Generativity への関心の様相が明らかとなった。要介護高齢者への Generativity 的視点を踏まえた看護介入を考える時には、個人がどのような人生を歩み、どのように他者とかわり、どのように健康を捉えているかを理解することは、高齢者の語りによる看護介入の成果を高めることに繋がるのではないかと考える。そして、ケア提供者の、それらを理解しようとするかわりによって、高齢者一人ひとりが人生を語り、自分の人生を生き直すこととなる。そして、そのかわりは、要介護高齢者が他者に貢献してきたことと今なお貢献していることを自覚することを助け、さらに世代間の中で自己の活かし方を実感できる機会となる。そのような二者間の関係性が要介護高齢者の生活満足度を高め、自己の存在価値を高めることに繋がると考える。このことから、要介護高齢者の Generativity を喚起するために Narrative approach は有効であることが示唆された。

世界でも長寿先進国である我が国の豊かさは、身体的な健康だけでなく心理的、社会的においても健康レベルを高めてこそその豊かさではないだろうか。自宅であっても、施設であっても、高齢者は自己の人生のままに、かわらず Generativity を発揮しながら人生を生き抜いていることは確かな事実である。先人から受け継いだものを、次の世代へ引き継ぎ、そのことを振り返りながら自己の存在を実感し、自身の置かれた状況に適応して可能な限り他者への貢献を想っている。その Generativity への関心を高齢者が表現できることと、そのことを考慮した次世代であるケア提供者の関わり、そしてそれらの表現を促し、受け止める方法論を検討していくことは重要な看護的視点の方向性であろう。そして、Generativity 的視点にたった Narrative approach による看護介入は、要介護高齢者にとって、将来を見据えて人生を生きてきた自己を活かすための手段であり、それを自覚するための自己を生成するための機会となりうる。

第5節 第7章のまとめ

本章では、要介護高齢者であり後期高齢者である2名の Narrative approach の実践を通して、要介護高齢者の Generativity における関心の概念構造の検討を行った。そして、要介護高齢者の「語ること」の意義について検討した。

要介護高齢者への Narrative approach は、自己が歩んできた時間的経過を肯定的に物語として生成し直すことに繋がり、さらに、要介護高齢者が死を含めた未来を最期の時まで生き抜くための自己性の創造を可能にしていた。そして、そうした「語り」の内容はA

氏, B 氏ともに他者貢献性, 社会貢献性, 健康への希求, 世代継承性という共通のコアカテゴリーが抽出され, 要介護高齢者の内的世界のあり方を示唆していた。そして, 要介護高齢者はそれぞれ歩んだ人生に反映した主要テーマを持って **Generativity** を発揮していた。高齢者ケアに携わる者は, 長い人生を生き歩んできた高齢者・要介護高齢者に対して一人の人間として尊重し, その対象が語ることの意味の重要性を再認識し, 高齢者・要介護高齢者の自尊感情や自己存在を肯定する必要がある。そして, 高齢者が語る意味を受け継ぎ, さらに次世代へとつなげていく必要があろう。そのことが高齢者・要介護高齢者の心理・精神的・社会的健康を促すケアへと繋がる。

引用文献

- Bruner, J.S. (2002) / 岡本夏木他訳 (2007) : ストーリーの心理学 法・文法・生を結ぶ, ミネルヴァ書房, 東京. (LA FABBRICA DELLE STORIE, Laterza & Fligli S.p.a, Roma)
- Bradley, C.L., Marcia, J.E. (1998) : Generativity-stagnation: A five-category model, *Journal of Personality*, 66, pp.39-64.
- Cheng, S.T. (2009) : Generativity in later life: Perceived respect from younger generations as a determinant of goal disengagement and psychological well-being, *Journal of Gerontology*, 64, pp.45-54.
- McAdams, D.P., Aubin, E.S. (1992) : A theory of generativity and its assessment through self-report, Behavioral acts, and narrative themes in autobiography., *Journal of Personality and Social Psychology*, 62(6), pp.1003-1015.
- McAdams, D.P., Diamond A, Aubin, E.S., et al. (1997) : Stories of commitment ; The psychosocial construction of generative lives., *Journal of Personality and Social Psychology*, 72(3), pp.678-694.
- McAdams, D.P., Aubin, E.S. (1998) : Generativity and adult development, How and why we care for the next generation, American Psychological Association, Washington, D.C.
- 丸島令子 (2005) : 世代性尺度の作成 - 世代性の関心と行動モデルの測定 -, *Journal of Japanese Clinical Psychology*, 23(4), pp.422-433.
- 丸島令子, 有光興記 (2007) : 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性、妥当性の検討, *心理学研究*, 78(3), pp.303-309.
- 丸島令子 (2009) : 成人の心理学 世代性と人格的成熟, ナカニシヤ出版, 東京.
- 小澤義雄 (2012) : 老年期の **Generativity** 研究の課題-その心理社会的適応メカニズムの解明に向けて-, *老年社会科学*, 34(1), pp.46-56.
- 田渕恵, 中川威, 権藤恭之ほか (2012) : 高齢者における短縮版 **Generativity** 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討, *厚生*の指標, 59(3), pp.1-7.
- 田渕恵, 三浦麻子, 中川威他 (2013) : 高齢者における世代性 (**Generativity**) と次世代とのかわり行動の因果関係, *日本世代間交流学会誌*, 3(1), pp.35-40.
- やまだようこ (2000) : 人生を物語ることの意味 - なぜライフストーリー研究か? -, *教育心理学年報*, 第 39 集, p.146-161.
- やまだようこ (2000) : 人生を物語る 生成のライフストーリー, ミネルヴァ書房, 東京.

やまだようこ(2007)：質的心理学の方法－語りをきく－，新曜社，東京。
やまだようこ(2012)：世代を結ぶ 生成と継承，新曜社，東京。
吉村雅世,内藤直子(2004)：看護ケアにナラティブ・アプローチを導入した老年患者の語り
の変化の研究，日本看護科学学会誌，24(4)，pp.3-12.

参考文献

天田城介(2011)：老い衰えゆくことの発見，角川学芸出版，東京。
佐藤眞一,大川一郎,谷口幸一(2010)：老いところのケア 老年行動科学入門，ミネルヴァ書房，京都。
野口裕二(2002)：物語としてのケア ナラティブ・アプローチの世界へ，医学書院，東京。
野口裕二(2009)：ナラティブ・アプローチ，勁草書房，東京。
深瀬裕子,岡本祐子(2010)：中年期から老年期に至る世代継承性の変容，広島大学大学院教育学研究科紀要，59，pp.145-152.

第8章 全体考察

本研究では、要介護高齢者の Generativity における関心の概念を解明し、Generativity 的視点にたった看護ケアモデルの試作を目指した。本研究は Erikson,E.H.が示した以後、これまでの研究結果では解明していない課題に対する解と新たな課題発見への試みであった。本章では、これまで提示してきた要介護高齢者の Generativity への関心の概念分析と Generativity 的視点に立った Narrative approach の実践を分析した結果を踏まえて総合的に考察を行う。

まず第1節では、地域高齢者と要介護高齢者に実施した本調査結果から得られた知見を基に、要介護高齢者の Generativity への関心の概念とその意味について考察する。また、量的研究と質的研究から得られた知見を検討する。そして第2節では、要介護高齢者に対する Generativity 的視点にたった看護介入の必要性和重要性について論じ、Generativity を踏まえた Narrative approach の実践知を基に思案した看護ケアモデルの有用性について論じる。

第1節 第5・6・7章を踏まえた全体考察

第1項 要介護高齢者の Generativity の概念とその発現

本研究は、要介護高齢者の Generativity の関心の概念を解明することを目的として、地域高齢者を比較対象として実態調査を実施した。その結果、地域高齢者から導き出された因子は創造性、世代継承性、積極性であった。また、要介護高齢者から導き出された因子は創造性、世代継承性、他者貢献性であった。丸島ら（2005,2007）の創造性、世代継承性、世話という報告との違いは、本研究の地域高齢者においては直接的な家族の世話というより祖父母の立場から家族を見守り、一方では積極的な地域とのかかわりあいによって自己を活かそうとする Generativity 的発現であった点にある。そして、要介護高齢者においては、生きてきた人生の中の自己そのままに他者への関心を示し、気遣うという形での発現でもあった。いずれにおいても、高齢者は創造性を発揮して世代を継承し、他者とのかかわりを持つことで自己を活かすように他者と関わっていた。そして、地域高齢者は積極的に他者と関わりを持つことで、友人関係の中において自己の Generativity を発揮する様子が見え、そして、要介護高齢者は自己が経験してきたことを活かしながら、同じ環境に存在する入所者との関係において他者とかかわっている様子が見えた。そのため、地域高齢者の場合には現在の状態を、要介護高齢者の場合は過去の状態をより反映して Generativity を喚起し、発現しているものと考えられる。

さらに、地域高齢者では積極性、要介護高齢者では他者貢献性という因子が抽出された。本研究の対象の地域高齢者は、社会的に他者をつながる行動が十分可能な集団であった。一方で、施設入所高齢者は限定された環境の中での他者とのつながりであった。地域高齢者がこれまでの人生のまま、あるいは意識的にこれまで以上に他者とのつながりを大切にしようとする行動が積極性という因子を導き出したものと考えられる。また、要介護高齢者は限られた環境の中ではあるが、これまでの人生の歩みから少し変容させた生活の中でも、自己のこれまで培ってきた社会的一面を発揮していることが伺える因子であった。こ

のことは、長い人生を歩んできた者にしかない **Generativity** 的発現であり、老年期の **Generativity** における関心の特質であると言える。老年期の発達段階は、身体的変化を受け入れつつも、自己の人生を振り返って、それを肯定的に捉えなおすことにある。その自己を肯定するために必要な要素が **Generativity** であり、身体的にいかなる状態にあるにせよ、他者を想い、創造的に人生を生き、世代と世代の間を行き来きしながら他者と世代を超えたかかわりを行っている。そういう内的世界を持つのが高齢者の **Generativity** であり、要介護高齢者の **Generativity** の様相であろう。

第2項 量的研究と質的研究における要介護高齢者の **Generativity** の発現

本項では、量的研究と質的研究から要介護高齢者に対する **Generativity** の分析を試みる。地域高齢者と要介護高齢者における量的研究の結果から、高齢者の **Generativity** における関心の概念は創造性、世代継承性、積極性あるいは他者貢献性の因子であり、その **Generativity** における関心という概念は、高齢者の生活満足に影響するということが明らかとなった。また、要介護高齢者の質的研究においては、量的研究の結果と近似する因子は世代継承性、他者（社会）貢献性という因子であり、相違する因子が創造性と健康への希求という因子であった。これまでの高齢者の **Generativity** 研究においては創造性、世代継承性という因子は抽出されており、本調査と整合する。また、要介護高齢者においても世代継承性、他者貢献性は抽出されており、要介護高齢者の内的世界においても **Generativity** が発揮していることが実証されたものとする。また、これらの結果は、臨床の場合等において高齢者に関わり、ケアを提供する看護にとって有用な示唆を与える。そしてそのことは、**Generativity** の概念を取り入れた看護介入の検討や研究の意義を示しているものとする。しかし一方で、健康への希求という新たな因子が質的研究において抽出された。加齢に伴い自己の健康が変化するからこそ要介護高齢者の **Generativity** は変容し、そして、健康への希求という因子は、その要介護高齢者自身の自己に対する健康の希求だけでなく次世代に対する健康を継承するという意味でもあった。そしてそのことは、次世代の健康を創造し生命を受け継ぐという意味をも持つ因子であると考えられた。つまり、要介護高齢者の **Generativity** における関心は健康への希求という因子を構成要素としており、その因子はその他の因子と互いに関連し合い影響し合って発現していることが示唆される。

また、地域高齢者の調査では性別によって **Generativity** の在り様に違いがみられることが示唆された。高齢者が次世代である若者と交流することは、男性高齢者にとって自己が存在する価値を発揮する場であり、若者との関係性が自己実現感を感じさせ自尊感情を高めるものであるのに対し、女性高齢者においては若者への **Generativity** における関心は社会的関係性の一員であることを実感させることになる。それらのことが自己の存在価値を高めることに繋がっているというものであった。また質的研究においては、要介護高齢者個々によって **Generativity** の中心となる主要テーマに違いがあり、その発現は要介護高齢者一人ひとりによって様々に表現されることを示している。

以上のように、高齢者の **Generativity** は年代によって健康への思いによって、さらに性別によっても変容する。そのことは、生物学的な違いというよりその人の生きてきた過程、つまり信念と文化的要請に影響していることが考えられる。そしてその結果、その人のも

つ Generativity も形作られ発現するのであろう。特に、現在の高齢者の場合は性別により文化・社会的体験の相違から、人生の歩み方、考え方、振舞い方は大きく変わっていることが推察でき、それらの文化的なかかわりを通して形作られた信念によって、発現する Generativity も様々であろう。特に、後期高齢者であり、要介護高齢者の Generativity の発現は社会的関係性がいかなる状況であったのか、その状況をどのように受け止めているかということを理解することとともに、世代を受け継ごうとしている者としての Generativity 的発現であろう。

そして、これらの結果は Generativity の概念を取り入れた看護介入の検討や研究の意義を示しているものと考ええる。

第3項 要介護高齢者に対する Generativity を用いた Narrative approach を踏まえた看護介入の意義

超高齢社会における高齢者の生活の質（QOL）を考えると、高齢者自身が生きることにより喜びを感じ、生きる意義を見出し、生きる価値を感じられることが重要である（萬代ら、1996；内田ら、2006）。Generativity への関心は、高齢者の生活の質を高めるための様々な心理社会的要因と関連しており、高齢者の生活満足に影響を与えていることが本研究によって明らかとなった。そのことは、Generativity への関心が高齢者の生活にとって重要な要素の一つであることが判明したこととなる。そして、Generativity への関心が高齢者の自尊感情や自己効力感を高めること、またそれが、同世代や若者世代との繋がりから影響を受けていることが明確になったことは、Generativity における関心という概念は、避けられない老いと病の状況にあっても、高齢者自身が自己の存在を意義があると認識し、また価値ある自己と受け止めることにおいて重要な概念であるとも推測できる。

本研究の成果は、今後の高齢者支援の在り方に一つの示唆を与える。Generativity への関心が高齢者の友人や若者交流など、対人関係において促進されることから、地域においては高齢者の社会参加を促し、他者との交流を持つための方策をケアシステムとして組織的に検討する必要がある。すでに高齢者を対象とした多様な活動（高齢者大学、高齢者ボランティア、高齢者クラブ、新老人の会等）が存在するが、高齢者の Generativity 的視点で看護者が参画することにより、本研究成果を踏まえた次世代をはぐくみ、育てるという Generativity 的意識の啓発を行うことができる。そのことによって、様々な年代の集まりや同僚間において、高齢者から次世代等へ種々の遺産が継承されていき、社会の活性化が生じる。また社会の中で高齢者の役割意識が形成される。

看護の現場においては、高齢者を支える看護者は次世代に生きる存在である。看護者は今以上に高齢者との交流を積極的にもつことが重要になるであろう。他者からの支援を必要とする要介護高齢者においても、長い人生において培ってきた英知や技能、人生の生き方等を自己開示し、人生を語ることによって思いや意味内容を看護者や次世代に繋げていくことにより、高齢者は自己を意味あるものとして生成し直し、尊重されるべき存在と認識することができる。また、要介護高齢者は自分自身を尊重できる存在と感ずることによって、長く生きてきた人生に感謝し、自己の持つ遺産を次世代に繋げる役割を発揮することができる。そのことは、Generativity を用いた Narrative approach の意義であり、その Narrative approach による看護介入は、要介護高齢者の QOL を保証するものになると

言えよう。

また、次世代に生きる人々にとって、このような高齢者と繋がり合うことは、高齢者の持つ価値を感じ取り、新しい高齢者像を創造することとなり、社会全体が明るく活気に満ちたものとなり、豊かな社会が形成される。このように「Generativity」の研究は、成熟した高齢社会を形成するための主要な位置づけにあり、社会的価値を持つ。

本研究は、高齢者の生き方や活かし方・支え方に役立つ考え・思想を提供したものであり、超高齢社会で生きる要介護高齢者の社会的存在価値や役割発揮の可能性を論じており、高齢者が社会貢献できるという意味において、研究的価値を持つと考える。さらに、看護教育において高齢者の「Generativity」に関する内容を学生に教授することは重要な意味を持つ。看護学生は「Generativity」の概念を明確に学ぶことにより、高齢者を肯定的な視点で見つめることができる。また、人間は繋がって生きているということの大切さに気付くのである。学生は看護実習において高齢者看護を展開するとき、学生の持つ「Generativity」の哲学・思想は実践の中で活かされ、高齢者とのかかわりにおいては高齢者の人生を大切に思い、高齢者その人をありのままに受け止めることによって、学生には多くの遺産が継承されていく。そして、そのことは次世代である学生の新しい高齢者像の構築に貢献できるのではないだろうか。

第2節 Generativity 的視点にたった要介護高齢者の自己の存在価値を支援する看護ケアモデルの有用性

これまで述べてきたように、本研究は要介護高齢者の Generativity を検討し、Generativity 的視点にたった要介護高齢者の自己の存在価値を支援する看護ケアモデルを提示した。本研究で試策した看護ケアモデルは、要介護高齢者自身に存在する Generativity の解明にとどまらず、ケア提供者に存在する Generativity を含め、その相互関係性から要介護高齢者への看護介入を提言したものである。そして、この看護ケアモデルは、要介護高齢者が語ること、自己を表現することの重要性を提起しており、身体的・手段的支援に重きを置いている看護現場や看護教育に対して、心理・社会的支援重視へのケア的視点の広がりを目指したものである。そのため施設入所であれ、地域在住であれ、要介護高齢者が他者と触れ合い、関わり、語り合う機会を生活の場で提供しあう関係を構築することが重要であろう。その関係性の構築には、看護の視点で高齢者の Generativity を検討することが重要となる。第1章で述べたように、看護における高齢者ケアの本質は、高齢者が自ら生きてきた人生を振り返り、自己を見つめ、次世代に何を継承してきたか、何を継承したいのかななどを自覚・反省し、自己を肯定的にみつめ、高齢者自身が自己の存在価値を見出すことにある。その看護の本質の具現化が Generativity 的視点にたった要介護高齢者の自己の存在価値を支援する看護ケアモデルである。本研究で提示したケアモデルを高齢者施設で、地域社会で活用し、実践していくことが高齢者看護の本質に対する具体的な看護実践となる。

また、本研究で提示した看護ケアモデルで重要な点は、前記したように次世代であるケア提供者の Generativity を含めて提示したことにある。この提示は、老年看護の基礎教育課程に老年期の Generativity の概念を組み込むことによって、次世代である学生の高齢者観をより深めることに繋がる。そのことが高齢者看護の実践の質に寄与するものと考えられる。

第9章 今後の展望

本調査が一部の地域で、かつ、対象者も少なく、限定された対象者への調査であるため、文化的背景に影響を及ぼすと推察される Generativity の概念を分析するには限界がある。また、高齢者特有の心理状況から調査回答に時間がかかったり質問内容を補足する必要があったりと、要介護高齢者・超高齢者への聞き取り調査の限界も感じられた。そのため質問紙調査ではなく他者評価についても、今後、検討していく必要がある。そして要介護高齢者の Generativity における関心が直接的には生活満足に負の影響を与えていた。このことは、McAdams らが世代性への「関与」の後に「行動」へと続くことを示していることから考えると、施設に入所している要介護高齢者にとって次世代に関心を寄せたとしても自己への行動に移行しない(できない)ことが生活満足を低下させているとも考えられる。また、本研究では健康状態については十分反映させているとは言えない。これらについては今後の重要な課題である。

以上のように、いくつかの課題はあるが、本研究において調査研究が困難な要介護高齢者を対象として、量的・質的に要介護高齢者の Generativity を検討でき、高齢者の価値を提示できたことは、今後の要介護高齢者ケアの追究と、次世代であるケア提供者の教育的支援の発展に繋がるものと考ええる。同時に、このことは本研究の課題でもある。

超高齢社会を迎えた我が国において、高齢者の身体的機能の低下のみに着目するのではなく、新たな高齢者像を構築すべく高齢者の Generativity に関して理解することは重要な課題であろう。本研究において示してきた要介護高齢者の Generativity の様相は、加齢によって喪失していくものもあるが、それ以上に高齢者に存在する叡智や経験や知恵を示しており、それらのことは、次世代にとって高齢者が価値ある存在であることを示しているものである。すなわち、今後、看護の視点で Generativity を解明し追究していくことは、高齢者自身の QOL を高めるだけでなく、次世代にも重要な意味を投げかけることを可能していけるものと考ええる。

第 10 章 最終結論

1. 我が国の老年期の Generativity に関する先行研究の検討を行った結果、看護における Generativity 研究の報告は僅かであり、看護独自の視点で老年期の Generativity を追究し、看護介入に活かせるような研究への発展が必要である。
2. 地域高齢者の Generativity における関心は「創造性」「世代継承性」「積極性」の 3 因子構造である。Generativity における関心は他者との交流（家族交流のみ除く）から影響を受け、SP 健康感、孤独感、自尊感情、自己効力感を高め、それらは生活満足度に直接的、間接的に影響する。中年期だけでなく老年期において Generativity は自己完結のために重要な概念であり高齢者の心理社会的発達を促す要因である。
3. 要介護高齢者の Generativity における関心は「創造性」「世代継承性」「他者貢献性」の 3 因子で構成されている。地域高齢者と比べて動的というより情的な因子で構成されていた。要介護高齢者の Generativity においても心理的尺度との相関関係を認め、友人との交流が外的要因となり、Generativity を喚起させる。人生の終盤を迎えつつある後期高齢者である要介護高齢者は、自己のできる範囲で他者と想うという内面的な情的な形で Generativity における関心を示している。
4. 要介護高齢者への Narrative approach は、自己が歩んできた時間的経過を肯定的に物語として生成し直すことに繋がり、さらに要介護高齢者が自己の死を含めた未来を、最期の時まで生き抜くための自己性の創造を可能にしていた。「語り」の内容は他者貢献性、社会貢献性、健康への希求、世代継承性という共通のコアカテゴリーが抽出され、要介護高齢者の内的世界のあり様を示唆している。
5. Generativity 的視点にたった要介護高齢者への Narrative approach から導き出された「健康への希求」という因子は、要介護高齢者自身の自己への戒め・教訓でもあり、自己の人生を振り返った時に思う次世代への教訓とも捉えることができる。世代を超えて生き抜くために重要と思われる健康という因子の発現は、何らかの健康的障がいを抱えている要介護高齢者であり後期高齢者だからこそ抽出できた因子である。
6. 要介護高齢者が自己を語ることを支援することは、要介護高齢者が自己の存在に対して価値を認識することとなる。また、そのことが自己存在の価値を高めることとなり、要介護高齢者の QOL の保障に繋がる。さらに、次世代であるケア提供者において、高齢者の語りを観聴きする経験は高齢者から人としての価値を受け継ぎ、語り継ぐというケア提供者の Generativity に影響を与える。
7. Generativity 的視点にたった要介護高齢者の自己の存在価値を支援する看護ケアモデルはケア提供者が要介護高齢者と関わる（語る）ことを基本にして構成され、かつ要介護高齢者の変化を提示したものであり、その変化は要介護高齢者の自己存在の価値認識に繋がっていることを示した。
8. Generativity 的視点にたった要介護高齢者の自己の存在価値を支援する看護ケアモデルは要介護高齢者の QOL と看護ケアの質の向上に寄与する。また Generativity を看護の視点で論じることは、超高齢社会で生きる高齢者の社会的存在価値や役割発揮の可能性を論じることになる。

研究発表一覧

< 発表論文 >

1. 讃井真理, 河野保子 (2014) : 高齢者の Generativity における「関心」の特質, 及び高齢者の生活に及ぼす Generativity の検討, 看護学統合研究, Vol.16, No1, p.1-12

< 学会発表 >

1. 讃井真理, 奥田泰子, 河野保子 (2013) : 看護学における老年期の Generativity に関する文献検討, 日本看護研究学会第 39 回学術集会(秋田), p.277
2. 讃井真理, 河野保子, 香川治子 (2013) : 地域在住高齢者の Generativity と人的交流との関連性, 日本老年行動科学学会第 16 回愛媛大会(愛媛), p.46
3. 讃井真理, 河野保子, 田中正子 (2013) : 地域で生活する健常高齢者の生活満足度と自己効力感, 孤独感, 及び自尊感情との関係性, 日本健康心理学会第 26 回大会(北海道), p.19
4. 讃井真理, 河野保子 (2013) : 地域で生活する健常高齢者の Generativity の概念分析, 及び主観的幸福感, 自尊感情との関係性, 第 33 回日本看護科学学会学術集会(大阪), p.530
5. 讃井真理, 河野保子 (2014) : 要介護高齢者の Generativity と生活満足度, 自己効力感, 孤独感, 自尊感情との関連, 日本老年社会科学学会第 56 大会(下呂), 老年社会科, Vol.36-2, p.228
6. 讃井真理, 河野保子 (2014) : 女性高齢者の生活満足度に関連する心理社会的要因の検討, 日本看護研究学会第 40 回学術集会(奈良), p.358
7. 讃井真理, 河野保子 (2015) : 施設入所・高齢者の生活満足に影響を及ぼす Generativity の検討, 日本老年社会科学学会第 57 回大会(横浜), Vol.37-2, p.229
8. 讃井真理, 河野保子 (2015) : 地域高齢者の Generativity に関連する心理的側面の検討ー前期高齢者と後期高齢者の比較ー, 日本看護研究学会第 41 回学術集会 (広島) ,
9. 讃井真理, 河野保子, 今坂鈴江, 風間栄子, 岡田京子 (2015) : 地域在住高齢者の Generativity への関心が生活満足度に及ぼす影響ー年齢別にみた多母集団分析ー, 第 35 回日本看護科学学会学術集会(広島), p.334

謝辞

本研究は、非常に多くの方々に皆様にご協力をいただきました。地域高齢者への調査においては、本学の教授でもありました香川治子先生には地域の方々をご紹介して頂いただけでなく、地域の皆様が快く調査に協力していただけるようにきめ細かなご配慮をいただきました。研究の第一歩目の調査であり、本研究をこのようにまとめることができましたのも、この第1歩目の調査が無事に実施できたことによるものと深く感謝申し上げます。そして研究の主旨に賛同していただき、また老人クラブの会議等で調査が無事に実施できるように様々な面でご支援をいただいた老人クラブ理事長の鈴木孝雄様、事務局の清原秀樹様と小岩いづみ様に深く感謝申し上げます。各支部の会長様には多くの会員の皆様に調査票を配布していただきました。その結果、多くの会員の皆様にご協力いただくことができ、また会員の皆様には多くの質問に時間を割いて丁寧にお答えをいただきましたこと、お礼申し上げます。さらに本調査の追加と途中経過の報告の機会を下さいました川尻地区の担当者様と会員の皆様にお礼申し上げます。いきいきサロンの世話人の皆様には研究の主旨をご理解いただき、地域の皆様の協力がいただけるように貴重なお時間を調査にあててくださいましたこと、またわざわざ追加の調査用紙を、別途に大学へお持ちくださる等、多くのお時間と手間をかけてご支援していただきましたことを、心より感謝申し上げます。

要介護高齢者への調査では、県内 11 施設の介護保険施設の施設長、及び病院長、看護部長等管理者の皆様にご協力をいただきました。突然の調査依頼にもかかわらず、快く対応してくださいましたことを深く感謝申し上げます。そして、療養棟や病棟の管理責任者、及びケアマネジャー、相談員の皆様には入院・入所されておられる方をご紹介していただくだけでなく、お忙しい中で調査のためにご尽力くださりましてありがとうございました。療養中にもかかわらず聞き取り調査で多く調査項目に対して丁寧に回答をしてくださいました調査参加者の皆様に深く感謝申し上げます。

要介護高齢者の質的研究においては、研究承諾をいただいた施設長、そして入所者様とご家族の方への連絡から面接後の対応まで、細かくご配慮いただきました看護長、相談員の皆様に感謝申し上げます。そして貴重な体験を丁寧にお話しく下さいました 2 名の研究参加者の方には心から感謝申し上げます。

そして、量的研究の分析において、目白大学の河野理恵先生と西川千登世先生には広島と東京とを数年にわたり往復しながらご講義をいただき、公私ともにお忙しい中で時間を割いて理論的に、技術的に、分析的に多くのご指導いただきました。また精神的にも支えていただきましたことを心より感謝申し上げます。聞き取り調査にご協力いただきました本学の教員の今坂鈴江先生、風間栄子先生、岡田京子先生と、野坂美香様、松田千絵様、沖満恵様に感謝申し上げます。論文審査では主査の小西美智子先生と、副査の森田克也先生には研究の構成や論文の方向性を教育的に温かく導いていただきました。また論述することへの繊細さと、全体を眺め見て削ぎ落としながら自己の考えをまとめていくことの楽しさと、重要性をご教授いただきましたこと深く感謝申し上げます。副指導教員の奥田泰子先生、安藤純子先生、金澤寛先生には研究計画の段階でご意見を下さり、様々なご支援をいただきました。また、業務をしながらの学生生活という二足のわらじの私を公私ともに温かくご支援いただいた岡隆光学長と佐々木秀美副学長をはじめとした多くの教職員

の皆様、ありがとうございました。本調査のプレテストで忌憚のない意見をくれた両親、いつもそっと支援してくれた姉夫婦、腱鞘炎になった私の腕の代わりに（バイト代のためとはいえ）数百名分のデータをほとんどミスなく丁寧に取扱い、入力してくれた甥と姪に感謝いたします。10 年来ずっと支えてくれている前信由美さんに感謝申し上げます。The authors thank Crimson Interactive Pvt. Ltd. (Ulatus) – www.ulatus.jp for their assistance in manuscript translation and editing.

そして、なにより博士後期課程に入学して以降、未熟なそしてあまり感情表現しない無愛想な私に対して段階を追って無理なく取り組めるように丁寧に指導くださり、叱咤激励しながら、公私にわたって支え、明るく楽しく **Generativity** を発揮し続けてくださいました主旨導教員の河野保子先生に、心より深く深く感謝申し上げます。この 4 年間を通して、先人たちの書かれた文章の意味をきめ細やかに自分の中に落とし込むこと、頭の中で試行錯誤しながら自己の研究課題を導き出す術、ある意味で大胆に研究活動を行うこと、数字や文字の並びから自分の脳細胞をフル活動させながら意味あるものを見つけ出すこと、そうした一連の研究活動を楽しみながら創造することなど、多くのことを学びました。そして、導き出された結果を自己の中の知識と感性で結びつけながら言葉として表現することの大切さ、面白さや、その過程を発想するための頭の使い方というべき創造性・発想力（先生は「言葉を紡ぐ」とおっしゃっていましたが）を河野先生から学びました。……ボロボロ涙が流れてキーボードが打てずに中途半端で少ししか記述することができない河野先生への謝辞について、当のご本人から「何を学んだかもっと書いてよー」と一言。何とかここまでティッシュを片手にご希望の通りに追加はしてみるものの、やはりすべてを表現できる言葉が見つかりません。本審査頃から何日間もこの謝辞のページにチャレンジするのですが、そのたびに涙で画面が見えなくなります。このページには書ききれない大きく、深い「人」・「看護」・「研究」「Generativity＝愛情」を学ばせていただいたこと感謝しております。論文作成までの過程は私にとっては非常に大きく、大変だった学生生活でありましたが、辛いなと思ったことは一度もありませんでした。常に前を向いて研究に取り組んでいたように思います。とにかくどの段階で、何をするにも興味深かった。それはたぶん河野先生がいつも楽しそうに研究のことを語ってくださっていたからだろうと思います。それが河野先生から受け継いだものの一つだと思います。研究も人生も前向きに！楽しく！美しく！。私には、まだまだ受け継ぎきれないところがありますが、河野先生から受け継いだものをできる限り語り継いでいけるよう、真摯に「人」・「看護」・「研究」「Generativity＝愛情」に向き合っていこうと思います。

本当にありがとうございました。

2016 年 2 月 22 日

讃 井 真 理

資 料

＜第 5 章 地域高齢者への調査＞（資料 1）

| | |
|-------|---|
| 研究依頼書 | 1 |
|-------|---|

＜第 6 章 要介護高齢者の調査＞（資料 2）

| | |
|------------|---|
| 研究依頼書（施設用） | 2 |
| 研究同意書（施設用） | 4 |
| 同意取消書（施設用） | 5 |
| 研究依頼書（個人用） | 6 |
| 研究同意書（個人用） | 7 |
| 同意取消書（個人用） | 8 |

＜第 7 章 要介護高齢者の質的研究調査＞（資料 3）

| | |
|------------|----|
| 研究依頼書（施設用） | 9 |
| 研究同意書（施設用） | 11 |
| 同意取消書（施設用） | 12 |
| 研究依頼書（個人用） | 13 |
| 研究同意書（個人用） | 14 |
| 同意取消書（個人用） | 15 |

＜調査票一式＞（資料 4）

| | |
|--|----|
| | 16 |
|--|----|

<第 5 章 地域高齢者への調査>

研究依頼書

個人用（第 2 段階調査）

地域で生活しておられる皆様に調査へのご協力をお願い

課題名 要介護高齢者における Generativity（世代性）の
概念分析,及び自己の存在価値を支援するケアモデルの構築

私は現在、広島文化学園大学・大学院看護学研究科博士後期課程で
高齢者研究を行なっている讃井真理（さないまり）と申します。

このたび博士論文として、上記の課題名により研究を行いたいと考えて
おります。この研究から高齢者の方が日々の生活の中で、他者とどのような
つながりをもって生活されているのか、また自分自身を社会生活の中でどの
ように活かしているのかを明らかにし、よりよく生きるための在り方を考え
るための調査でもあります。65 歳以上の方に調査票をお持ち帰りいただき、
調査にご回答いただきたいと存じます。今後の高齢者支援に関する研究・実
践の基礎的資料となるため、是非この研究へのご協力をよろしくお願い申し
上げます。

調査にかかる時間は 40 分～50 分程度です。回答後はお手数ですが、同封
の返信用の封筒に入れ、平成 年 月 日までに投函していただき
ますようお願いいたします。

なお、研究の結果は学会等で公表させていただきますが、その際、個人が
特定されることはありません。また、この研究への同意は強制ではなく、投
函していただいた時点で調査協力の同意とさせていただきます。

何卒、ご考慮いただきますようよろしくお願いいたします。

平成 年 月 日

連絡先：讃井真理（さないまり）

広島文化学園大学 〒737—0004 呉市阿賀南 2—10—3

電話番号 0823—74—6000

自 宅 〒737—0114 ○市△△町

電話番号 0823 - ○○ - □□□□

<第 6 章 要介護高齢者の調査>

研究依頼書

施設用 (第 3 段階調査)

施設長 殿

看護部長 殿

課題名 要介護高齢者における Generativity (世代性) の概念分析,及び自己の存在価値を支援するケアモデルの構築

私は現在、広島文化学園大学・大学院看護学研究科博士後期課程で高齢者研究を行なっている讃井真理と申します。

このたび博士論文として、上記の課題名により研究を行いたいと考えております。この研究は要介護状態にある高齢者の世代性を明らかにし、高齢者自身が自己の存在価値を高めることができるようなケアモデルを構築することを目的としております。今後の高齢者研究・実践の基礎的資料になると考えております。是非研究へのご協力をよろしくお願い申し上げます。

対象者の方には、お一人に 1 回、時間は 40 分～50 分程度の対面式質問紙調査をお願いしたいと考えております。ご本人様の体調に合わせて調査日時と場所は配慮させていただきます。また、調査票の記入は研究者が行い、その調査票は研究が最終的に終了した後に適切に破棄いたします。

なお、調査開始までの手続きや方法,研究倫理に関しては以下の通りとし、ご協力いただいた方や御家族、貴施設の不利益にならないよう十分に配慮いたします。

貴施設での本研究の実施について、何卒ご承諾頂けますようお願い申し上げます。

記

1. 調査までの手続き

- 1) 施設長及び看護部長の研究協力の承諾を確認後、看護部長と相談のうえ対象者を決めさせていただきます。
- 2) 調査にご協力いただく高齢者の方、ご家族の方には、原則として書面と口頭による説明を行い、同意書により研究参加の意思を確認させていただきます。
- 3) ご本人様への説明時には職員の方に一人立ち会っていただくようお願いいたします。

2. 調査方法

- 1) 対面式調査は 40 分～50 分の調査票を用いた聞き取りで、1 回の面接調査を考えております。
- 2) 調査はご本人様の希望と体調に合わせて時間と場所を調整し、1 対 1 で行ないます。

3. 留意点

- 1) 調査票の結果は統計的に処理され、研究として報告する際は個人名が特定されることはありません。
- 2) 高齢者の方が理解しやすいように質問の方法を工夫しながら行い、ご本人が答えたくない項目に関しては返答を強要せず、その項目を削除いたします。
- 3) ご本人の体調に変化があった場合、調査協力が負担と感じられた場合は途中で調査を中止し、スタッフ及び管理者に報告いたします。
- 4) 調査により得られたデータは研究者及び指導教員以外が視聴することはありません。
- 5) 調査中に協力の意思がなくなった場合はいつでも承諾を取り消すことができます。
- 6) 研究終了時には、研究に関して得られたデータは適切に破棄いたします。
- 7) 高齢者の方の尊厳を守り、プライバシーに十分配慮いたします。

4. 研究成果

- 1) この研究の成果は書面をもって貴施設に報告させていただきます。
- 2) この研究の成果は貴施設のご承諾無しには公表いたしません。

平成 年 月 日

研 究 者：広島文化学園大学大学院看護学研究科
博士後期課程 讃井真理
主指導教員：広島文化学園大学大学院看護学研究科
河野保子

連絡先：^{さな い ま り}讃井真理

広島文化学園大学 〒737-0004 呉市阿賀南 2-10-3
電話番号 0823-74-6000
自 宅 〒737-0114 ○市△△町
電話番号 0823 - ○○ - □□□□

研 究 同 意 書

施設用

広島文化学園大学大学院看護学研究科博士後期課程

讃井真理 宛

研究テーマ

要介護高齢者における Generativity の概念分析，
及び自己の存在価値を支援するケアモデルの構築

当施設は上記に関する説明を受け，別紙に記載された事項が守られる限り
において，当施設における調査を承諾します。

平成 年 月 日

施設名

施設長

印

看護部長

印

同 意 取 消 書

施設用

広島文化学園大学大学院看護学研究科博士後期課程

讃井真理 宛

研究テーマ

要介護高齢者における Generativity の概念分析,
及び自己の存在価値を支援するケアモデルの構築

当施設では上記研究の協力に同意いたしましたが、諸事情により研究協力を辞退したいとの結論に至りましたので、ご連絡申し上げます。

平成 年 月 日

施設名

施設長

印

看護部長

印

研究依頼書

個人用（第3段階調査）

殿

課題名 要介護高齢者における Generativity（世代性）の概念分析,及び自己の存在価値を支援するケアモデルの構築

私は現在、広島文化学園大学・大学院看護学研究科博士後期課程で高齢者研究を行なっている讃井真理（さないまり）と申します。

このたび博士論文として、上記の課題名により研究を行いたいと考えております。入所者の方々が自分らしく豊かに生活していけるような支援を考えるため、施設長はじめ施設側のご協力により、調査を実施させていただくことになりました。この研究は65歳以上の方へ研究者の聞き取りで調査に回答していただくものです。今後の看護に関する研究・実践の基礎的資料となるため、是非ご協力をよろしくお願い申し上げます。調査に必要な時間は50分程度です。ご本人様の体調に合わせて日時・場所は調整させていただきます。質問に関してわかりにくい項目があるときは遠慮なく申し出ていただいて結構です。

なお、研究の結果は学会等で公表させていただきますが、その際個人が特定されることはありません。また、この研究への同意は強制ではありません。同意がいただけない場合でも施設の対応が変わったりすることはありません。何卒、ご考慮いただきますようお願いいたします。

平成 年 月 日

連絡先：讃井真理（さないまり）

広島文化学園大学 〒737—0004 呉市阿賀南 2—10—3

電話番号 0823—74—6000

自 宅 〒737—0114 ○市△△町

電話番号 0823 - ○○ - □□□□

研 究 同 意 書

個人用

広島文化学園大学大学院看護学研究科博士後期課程

讃井真理 宛

研究テーマ

要介護高齢者における Generativity の概念分析,
及び自己の存在価値を支援するケアモデルの構築

私は、研究に関する説明を受け、別紙に記載された事項が守られる限りにおいて、研究協力に同意いたします。

平成 年 月 日

(本人) 印

(家族) 印

同 意 取 消 書

個人用

広島文化学園大学大学院看護学研究科博士後期課程

讃井真理 宛

研究テーマ

要介護高齢者における Generativity の概念分析,
及び自己の存在価値を支援するケアモデルの構築

私は、上記研究の協力を同意いたしましたが、諸事情により研究協力を辞退したいとの結論に至りましたので、ご連絡申し上げます。

平成 年 月 日

(本人)

印

(家族)

印

研究依頼書

施設用（第4段階調査）

施設長 殿

看護部長 殿

課題名 要介護高齢者における Generativity（世代性）の概念分析、及び自己の存在価値を支援するケアモデルの構築

私は現在、広島文化学園大学大学院看護学研究科博士後期課程で高齢者研究を行なっている讃井真理と申します。

このたび博士論文として、上記の課題名により研究を行いたいと考えております。この研究は要介護状態にある高齢者の世代性を明らかにし、高齢者自身が自己の存在価値を高めることができるようなケアモデルを構築することを目的としております。今後の高齢者研究・実践の基礎的資料になると考えております。是非研究へのご協力をよろしくお願い申し上げます。

対象者の方に一人2回のナラティブ・アプローチ（語りのケア）による面接をお願いしたいと考えております。面接時間は30分～60分程度で、ご本人様の体調に合わせて面接日時と場所は配慮させていただきます。面接時の会話をICレコーダーに録音させていただきますが、この録音は研究が最終的に終了した後に消去させていただきます。

調査開始までの手続きや方法、研究倫理の詳細に関しては以下の通りとし、ご協力いただく方や御家族、貴施設の不利益にならないよう十分に配慮いたします。

貴施設での本研究の実施について、何卒ご承諾頂けますようお願い申し上げます。

記

1. 調査までの手続き

- 1) 施設長及び看護部長の研究協力の承諾を確認後、看護部長と相談のうえ対象者を決めさせていただきます。
- 2) 調査にご協力いただく高齢者の方、ご家族の方には、原則として書面と口頭による説明を行い、同意書により研究参加の意思を確認させていただきます。
- 3) 調査内容が家族関係に及ぶことも予想されますので、ご家族への御連絡に際しては別途にご相談させていただきたいと思っております。
- 4) ご本人様への説明時には職員の方に一人立ち会っていただくようお願いいたします。

2. 調査方法

- 1) お一人2回のナラティブ・アプローチ（語りのケア）の実施を考えてお

ります。1回目と2回目の間隔は1週間程度とし、それぞれ、ナラティブアプローチ実施前後、及び、実施中はフィールドノートを作成し、また会話をICレコーダーに録音させていただきます。

- 2) ナラティブ・アプローチの実施は高齢者の方の負担をできる限り避け、1回の調査は30分～60分程度とします。実施中の体調変化等には十分に配慮いたします。
- 3) 実施場所をご本人様の希望と体調に合わせて時間と場所を調整し1対1で行ないます。

3. 留意点

- 1) ICレコーダーに録音されていることを意識しないように十分配慮いたします。
- 2) ご本人が答えたくない事象に関しては返答を強要せず、対象の方が自由に語っていただけるように工夫しながら実施いたします。
- 3) 実施中にご本人の体調に変化があった場合、また調査協力が負担と感じられた場合は途中で実施・調査を中止し、スタッフ及び看護管理者に報告いたします。
- 4) レコーダーに録音した内容は、逐語録にしますが、研究者及び指導教員以外が視聴することはありません。
- 5) 逐語録に起こす際は、個人名等の特定の名称は記号化し、個人が特定されることはありません。
- 6) 研究として報告する際にも個人名等が特定されないよう十分に配慮いたします。
- 7) 調査中に協力の意思がなくなった場合はいつでも承諾を取り消すことができます。
- 8) 高齢者の方の尊厳を守り、プライバシーに十分配慮いたします。
- 9) 研究終了時には録音された会話等得られたデータは適切に消去・破棄いたします。

4. 研究成果

- 1) この研究の成果は書面をもって貴施設に報告させていただきます。
- 2) この研究の成果は貴施設のご承諾無しには公表いたしません。

平成 年 月 日

研 究 者：広島文化学園大学大学院看護学研究科
博士後期課程 讃井真理

主指導教員：広島文化学園大学大学院看護学研究科
河野保子

連絡先：^{さないまり}讃井真理 広島文化学園大学 〒737-0004 呉市阿賀南 2-10-3

電話番号 0823 - 74 - 6000

自 宅 〒737-0114 ○市△△町
電話番号 0823 - ○○ - □□□□

研 究 同 意 書

施設用

讃井真理 宛

研究テーマ

要介護高齢者における Generativity の概念分析,
及び自己の存在価値を支援するケアモデルの構築

当施設は上記に関する説明を受け、別紙に記載された事項が守られる限り
において、当施設における調査を承諾します。

平成 年 月 日

施設名

施設長

印

看護部長

印

同 意 取 消 書

施設用

讃井真理 宛

研究テーマ

要介護高齢者における Generativity の概念分析,
及び自己の存在価値を支援するケアモデルの構築

当施設では上記研究の協力に同意いたしましたが、諸事情により研究協力を辞退したいとの結論に至りましたので、ご連絡申し上げます。

平成 年 月 日

施設名

施設長

印

看護部長

印

研究依頼書

個人用（第4段階調査）

殿

課題名 要介護高齢者における Generativity（世代性）の概念分析、及び自己の存在価値を支援するケアモデルの構築

私は現在、広島文化学園大学・大学院看護学研究科博士後期課程で高齢者研究を行なっている讃井真理（さないまり）と申します。

このたび博士論文として、上記の課題名により研究を行いたいと考えております。入所者の方々が自分らしく豊かに生活していけるような支援を考えるため、施設長はじめ施設側のご協力により、引き続き研究を実施させていただくことになりました。この研究は65歳以上の方へ人生を振り返っていたきながら、お話を伺わせていただくものです。今後の看護に関する研究・実践の基礎的資料となるため、是非この研究へのご協力をよろしくお願い申し上げます。お話を伺う時間は30分～60分で2回程度の面接をお願いしたいと考えております。日時・場所をご本人様の体調に合わせて調整させていただきます。お話を伺う間の会話は録音させていただき、また、お話を伺いながら簡単なメモを取らせていただきたいと思いますと考えていますが、この録音は研究が終了した後に適切に消去させていただきます。

なお、研究の結果は学会等で公表させていただきますが、その際個人が特定されることがないように、十分に配慮いたしますので、ご協力いただいた方にご迷惑のかかることはありません。また、この研究への同意は強制ではありません。同意がいただけない場合でも施設の対応が変わったりすることはありません。同意をいただいた後でも気がすすまないことがあれば同意を取り消すことも可能です。

何卒、ご考慮いただきますようお願いいたします。

平成 年 月 日

連絡先：讃井真理（さないまり）

広島文化学園大学 〒737-0004 呉市阿賀南 2-10-3

電話番号 0823-74-6000

自 宅

〒737-0114 ○市△△町

電話番号 0823 - ○○ - □□□□

研 究 同 意 書

個人用

讃井真理 宛

研究テーマ

要介護高齢者における Generativity の概念分析,
及び自己の存在価値を支援するケアモデルの構築

私は、研究に関する説明を受け、別紙に記載された事項が守られる限りにおいて、研究協力に同意いたします。

平成 年 月 日

(本人) 印

(家族) 印

同 意 取 消 書

個人用

讃井真理 宛

研究テーマ

要介護高齢者における Generativity の概念分析,
及び自己の存在価値を支援するケアモデルの構築

私は、上記研究の協力を同意いたしましたが、諸事情により研究協力を辞退したいとの結論に至りましたので、ご連絡申し上げます。

平成 年 月 日

(本人)

印

(家族)

印

地区名をご記入ください。

()

高齢者の世代性に関する調査

あなたご自身のことについて、当てはまる番号に○をしてください。

問1. あなたの性別はどちらですか

- ①男性 ②女性

問2. あなたの年齢は満年齢でおいくつですか。(数字をご記入ください)

 歳

問3. 家族構成について

- ①一人暮らし ②夫婦二人暮らし ③子供夫婦と同居 ④三世帯同居
-
- ⑤その他の親族と同居 ⑥友人 ⑦その他 ()

問4. 少なくとも月に1回以上、顔を合わす機会や消息を取り合う親戚・兄弟は何人いますか

- ①0人 ②1人 ③2人～3人 ④4人～5人 ⑤6人以上

問5. 個人的なことでも、気兼ねなく話することができる友人は何人ぐらいいますか

- ①0人 ②1人 ③2人～3人 ④4人～5人 ⑤6人以上

問6. 若い世代との交流の機会はどのくらいありますか

- ①まったく交流していない ②めったに交流していない
-
- ③少しは交流している ④いつも交流している

問7. 現在の就業状況について

- ①仕事をしている ②不定期に仕事をしている ③仕事をしていない

問8. 現在の健康状態について

- ①治療している病気はない ②定期・不定期に病院に通っている



■現在治療を受けている病気すべてに○をしてください。

- ①高血圧 ②心臓疾患 ③糖尿病 ④関節や骨の病気
-
- ⑤胃腸など消化器の病気 ⑥気管支や肺など呼吸器に関する病気
-
- ⑦脳や神経の病気 ⑧その他 ()

問9. 現在の身体症状について

- ①
- 症状がある
- ②症状はない



■症状の程度について

- ①日常生活にほとんど影響がない ②日常生活にときどき影響がある
-
- ③
- 日常生活にかなり影響を感じる



■現在感じている症状の全てに○をしてください。

- ①高血圧 ②心臓に関連した症状 ③糖尿病 ④関節や骨の症状
-
- ⑤胃腸など消化器の症状 ⑥気管支や肺など呼吸器に関する症状
-
- ⑦脳や神経に関連した症状 ⑧その他 ()

問10. それぞれの質問について当てはまると思う 1 から 4 の番号に○をしてください。

| 番号 | 内 容 項 目 | 全く当 てはま らない | 当ては まらない | 当ては まる | 非常に 当ては まる |
|----|--------------------------------------|-------------------|-------------|-----------|------------------|
| ① | 私は変わったことや珍しいことをするのが好きだ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ② | 私は大多数の人と違ったところがあるように感じる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ③ | 悲しんでいる人を見たらなぐさめる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ④ | 私は他人がびっくりするようなことをしたり、 ものを作ったことがある | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑤ | 私は自分がすることは、たいてい新しく創造的であ るように努めている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑥ | 私は夢のようなことを考えるのが好きだ | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑦ | 私は問題をといたり、ものを作ったりしている時が 一番楽しい | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑧ | 私は何かを考えて、いい考えが浮かんだ時 とてもうれしく感じる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑨ | 私は自分のこれまでの生き方を若い人に伝えて いくように努めてきた | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑩ | 物を考えるときに変わった考えができます | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑪ | 他人の面倒をよく見る | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑫ | 私は他人に寄与するような価値のあることは何もし ていない | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑬ | 相手の話に耳を傾ける | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑭ | 子どもの世話をよくする | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑮ | 次世代のために環境汚染に繋がることをしないよう に極力努めている | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑯ | 私は自分の死後に残るようなことは何もしていない と思う | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑰ | 私の死後にも、私が貢献したことは残っているよう に思う | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑱ | 奉仕活動に喜んで参加する | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑲ | 困っている人を見ると、つい手助けしたくなる | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑳ | 自分の経験を通して得た知識などを他人に伝える 努力をしてきた | 1 | 2 | 3 | 4 |

過去 2 か月間のうちに行動したと思われる回数を 0 回、1 回、2 回以上でお答えください。

| 番号 | 項 目 | 回 数 | | |
|----|--|-----|-----|-------|
| | | 0 回 | 1 回 | 2 回以上 |
| ① | 多くの後輩に影響を及ぼすようなことをした | 0 | 1 | 2 |
| ② | 若い人が積極的についてきてくれるように、私のやり方をしっかりと決め、指導した | 0 | 1 | 2 |
| ③ | 自分が責任を持っていた仕事や役割を後輩に任せた | 0 | 1 | 2 |
| ④ | 聴衆の前で講演や発表をした | 0 | 1 | 2 |
| ⑤ | 若い人が面倒な問題の処理に私を頼ってきたので、助けた | 0 | 1 | 2 |
| ⑥ | 自分の考えが実践できて、良い結果が出た | 0 | 1 | 2 |
| ⑦ | 困難な問題が山積みしていたが、ひとつずつ片付けた | 0 | 1 | 2 |
| ⑧ | 自分の夢が実現するような関心を見つけた | 0 | 1 | 2 |
| ⑨ | 自分のために何か新しいことを習得することを始めた | 0 | 1 | 2 |
| ⑩ | 自分で一生楽しめるなと思える興味を見つけた | 0 | 1 | 2 |
| ⑪ | 創作した（芸術作品から日常的なものまで） | 0 | 1 | 2 |
| ⑫ | 他の人とは一味違うファッションを選んだ | 0 | 1 | 2 |
| ⑬ | まだやり残しているものがあるので、その一つをやる計画を立てた | 0 | 1 | 2 |
| ⑭ | 自分のアイデアで生活環境の改革をした | 0 | 1 | 2 |
| ⑮ | 先祖のまつり（法事など）を家族と、また親族を招いて行った | 0 | 1 | 2 |
| ⑯ | 子どもの主張することをじっくり聞き、話し合った | 0 | 1 | 2 |
| ⑰ | お墓参りをした | 0 | 1 | 2 |
| ⑱ | 若い人たちに敬語は大切に使うように言った | 0 | 1 | 2 |
| ⑲ | 子どもや老親に必要な財政的援助をした | 0 | 1 | 2 |
| ⑳ | 老親の昔話に長い時間付き合った | 0 | 1 | 2 |
| ㉑ | 私はこれからの世の中、私の家族や若い人たちがどのようなのか心配で、そのことを彼らと話し合った | 0 | 1 | 2 |
| ㉒ | 家庭、職場、また地域の関係での大事な行事（誕生日、入学式、敬老の日、祭り）に参加した | 0 | 1 | 2 |
| ㉓ | 子どもにお話をしてあげた | 0 | 1 | 2 |

問11. あなたの日常生活全般についてご質問いたします。

すべてを総合して、今自分がどのくらい幸福だと思いますか。

幸福だと思う場所の線上に○を付けてください。



問12. あなたの現在のお気持ちについて伺います。あてはまる答えに○を付けてください。

| | | | | |
|---|--|--------|-----------|--------|
| ① | あなたは去年と同じように元気だと思いますか | はい | いいえ | |
| ② | 全体として、あなたの今の生活に、不幸せなことがどれくらいあると思いますか | ほとんどない | いくらかある | たくさんある |
| ③ | 最近になって小さいことを気にするようになったと思いますか | はい | いいえ | |
| ④ | あなたの人生は、ほかの人に比べて恵まれていたと思いますか | はい | いいえ | |
| ⑤ | あなたは、年を取って前よりも役立たなくなったと思いますか | そう思う | そうは思わない | |
| ⑥ | あなたの人生を振り返ってみて、満足できますか | 満足できる | だいたい満足できる | 満足できない |
| ⑦ | 生きることは大変きびしいと思いますか | はい | いいえ | |
| ⑧ | 物事をいつも深刻に考える方ですか | はい | いいえ | |
| ⑨ | これまでの人生で、あなたは、求めていたことのほとんどを実現できたと思いますか | はい | いいえ | |

問13. ここからの質問は、病気や健康の原因についての、皆様のお考えをお訊ねするものです。以下の各文を読み、あなたの気持ちや考えに当てはまるかどうかについて、右側の欄の6～1までのどこか一つの番号に○を囲んでください。

| 番 号 | 内 容 項 目 | 非 常 に そ う 思 う | そ う 思 う | ど ち ら か と 言 え ば そ う 思 う | ど ち ら か と 言 え ば そ う 思 わ な い | そ う 思 わ な い | 全 く そ う 思 わ な い |
|--------|--------------------------------------|---------------------------------|------------------|--|--|----------------------------|--------------------------------------|
| 1. | 病気が良くなるかどうかは、周囲の温かい援助による | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2. | 病気が良くなるかどうかは、元気づけてくれる人がいるかどうかにかかっている | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3. | 病気が良くなるかどうかは、医師のちからによる | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4. | 病気が良くなるかどうかは、運命にかかっている | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5. | 病気がどのくらいで良くなるかは、時の運だ | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6. | 病気が良くなるかどうかは、家族の協力による | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7. | 健康でいられるのは、医学の進歩のおかげである | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

| 番 号 | 内 容 項 目 | 非 常 に そ う 思 う | そ う 思 う | ど ち ら か と 言 え ば そ う 思 う | ど ち ら か と 言 え ば そ う 思 わ な い | そ う 思 わ な い | 全 く そ う 思 わ な い |
|--------|-------------------------------|---------------------------------|------------------|--|--|----------------------------|--------------------------------------|
| 8. | 病気がどのくらいで良くなるかは、医者判断による | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 9. | 具合が悪くなくても、医者さえいれば大丈夫だ | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10. | 健康でいられるのは神様のおかげである | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 11. | 先祖の因縁などによって病気になる | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 12. | 病気がどのくらいで良くなるかは、医者の腕しだいである | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 13. | 健康でいられるのは、自分しだいである | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 14. | 病気になるのは、偶然のことである | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 15. | 神仏に供物をして身の安全を頼むと、病気から守ってくれる | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 16. | 病気になったのは、うかばれない霊が頼っているからである | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 17. | 健康でいるためには、自分で自分に気配りすることだ | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 18. | 病気になったときは、家族などの思いやりが回復につながる | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 19. | 健康でいられるのは、家族の思いやりのおかげである | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 20. | 病気が良くなるかどうかは、自分の心がけしだいである | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 21. | 健康でいるためには、よく拝んでご先祖様を大切にするのがよい | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 22. | 私の健康は、私自身で気を付ける | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 23. | 健康でいられるのは、運が良いからだ | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 24. | 健康を左右するような物事は、たいてい偶然に起こる | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 25. | 病気がよくなるかどうかは、自分の努力しだいである | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

問14. あなたの考えに最も近いと思う番号に○してください。

| 番号 | 内 容 項 目 | 非常 に そう 思う | そう 思う | ど ち ら と も い え な い | そ う 思 わ な い | 全 く そ う 思 わ な い |
|----|--|---------------------|----------|---|----------------------------|--------------------------------------|
| | | | | | | |
| 1 | 年を重ねるごとに感謝の気持ちが深くなっている | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2 | 自然の雄大さ、美しさに心を震わせた経験がある | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3 | 日々の生活の中に、楽しみや生きる希望がある | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4 | 他者への思いやりや感謝の気持ちを持つことで、人間関係を円滑にしている | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5 | 自分は何か大きな見えない力によって生かされている | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6 | 亡くなった家族やご先祖様に支えられている | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7 | どんな相手でも分け隔てなく受け入れようとしている | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8 | 心の深いところにある思いを他者と語り合う機会や場がある | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 9 | これまでの人生での出来事や思いを他者に語り、自分の人生の意味を再確認できたと感じることがある | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10 | 死ぬまでに、心の奥底にある気がかりを解決していく | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 11 | 自分と先祖や子孫とは結びついている | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 12 | 大切な人との絆が生きていく上での支えになっている | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 13 | 自然の中にいると、自分がその一部であり、そこから力を得ているという気がする | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 14 | 自分がこの世に生まれてきたことに、大きな意味がある | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 15 | 美しい世界に触れることで、心が平和で豊かになる | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 16 | 生きることや死ぬことについて、日頃から家族で話し合っている | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 17 | 人間は誰でも死を迎えるが、死に対する受けとめができています | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 18 | 周囲の人々（家族や友人、知人など）との良好な人間関係を持つことで、心穏やかに生きている | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

問15.

自己効力感

<http://www.kokoronet.ne.jp/fukui/gses/>（こころネット）より質問紙を入手

問16. 1 から 20 までのそれぞれの事柄を、
日頃のあなたはどれくらい感じていますか。
以下のように、縦線に○印を入れてください。



| | | | |
|--------------------------------------|--|---|---------------------------------|
| け っ し て 感 じ な い | ど ち ら か と 言 え ば 感 じ な い | ど ち ら か と 言 え ば 感 じ る | た び た び 感 じ る |
| 1 | 2 | 3 | 4 |

| | | | |
|--------------------------------|--|--|--|
| 1. 私は自分の周囲の人たちと調子よくいっている | | | |
| 2. 私は、人との付き合いがない | | | |
| 3. 私には、頼りにできる人が誰もいない | | | |
| 4. 私は、ひとりぼっちではない | | | |
| 5. 私は、親しい仲間達の中で欠くことのできない存在である | | | |
| 6. 私は、自分の周囲の人たちと共通点が多い | | | |
| 7. 私は、今、誰とも親しくしていない | | | |
| 8. 私の興味や考えは、私の周囲の人たちとは違う | | | |
| 9. 私は、外出好きの人間である | | | |
| 10. 私には、親密感の持てる人たちがいる | | | |
| 11. 私は無視されている | | | |
| 12. 私の社会的なつながりはうわべだけのものである | | | |
| 13. 私をよく知っている人は誰もいない | | | |
| 14. 私は、他の人たちから孤立している | | | |
| 15. 私は、望むときにはいつでも、人と付き合うことができる | | | |
| 16. 私には、私を本当に理解してくれる人たちがいる | | | |
| 17. 私は、たいへん引っ込み思案なのでみじめである | | | |
| 18. 私には、知人はいるが、私と同じ考えの人はいない | | | |
| 19. 私には話しかけることのできる人たちがいる | | | |
| 20. 私には、頼りにできる人たちがいる | | | |

問17. 次の特徴のおのこのについて、あなた自身にどの程度当てはまるかをお答えください。

他からどう見られているかではなく、あなたが、あなた自身をどのように思っているかを、ありのままにお答えください。

| | 当てはまる | やや当てはまる | どちらともいえない | やや当てはまらない | 当てはまらない |
|--------------------------|-------|---------|-----------|-----------|---------|
| | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 1 少なくとも人並みには、価値のある人間である | | | | | |
| 2 いろいろな良い素質を持っている | | | | | |
| 3 敗北者だと思ふことがある | | | | | |
| 4 物事を人並みには、うまくやれる | | | | | |
| 5 自分には、自慢できるところがあまりない | | | | | |
| 6 自分に対して肯定的である | | | | | |
| 7 だいたいにおいて、自分に満足している | | | | | |
| 8 もっと自分自身を尊敬できるようになりたい | | | | | |
| 9 自分は全くだめな人間だと思ふことがある | | | | | |
| 10 何かにつけて、自分は役立たない人間だと思ふ | | | | | |

*問 18 以降は要介護高齢者のみ実施（看護師から聴取）

調査日 年 月 日

問18. 施設種別

①病院 ②老人保健施設 ③老人福祉施設

問19. 入所・入院日

年 月 日

問20. 介護度

①要支援1 ②要支援2 ③要介護1 ④要介護2
⑤要介護3 ⑥要介護4 ⑦要介護5

問 21. ADL（Barthel Index）

| 項目 | 点 | 内 容 |
|---------------------|----|---|
| 食事 | 10 | 自立。必要に応じて自助具を使用して、食物を切ったり、調味料をかけたりできる |
| | 5 | 食物を切ってもらふ必要があるなど、ある程度介助を要する |
| | 0 | 上記以外 |
| 車いすと ベッド間の 移動 | 15 | 移動のすべての段階が自立している（ブレーキやフットレストの操作を含む） |
| | 10 | 移動の動作のいずれかの段階で最小限の介助や、安全のための声掛け、監視を要する |
| | 5 | 移動に多くの介助を要する |
| | 0 | 上記以外 |
| | | （訳注；車いすを使用していない場合には、ベッドわきに設置した肘掛椅子とベッドとの間の移動が安全にできるかどうかを評価する） |
| 整容 | 5 | 手洗い、洗顔、髪梳き、歯磨き、髭剃りができる |
| | 0 | 上記以外 |
| 用便動作 | 10 | 用便動作（便器への移動、衣服の始末、ふき取り、水洗操作）が介助なしにできる |
| | 5 | 安定な姿勢保持や衣服の着脱、トイレトペーパーの使用などに介助を要する |
| | 0 | 上記以外 |
| 入浴 | 5 | すべての動作を他人の存在なしに遂行できる（浴槽使用でもシャワーでもよい） |
| | 0 | 上記以外 |
| 平地歩行 | 15 | 少なくとも 45m、介助や監視なしに歩ける（補助具や杖の使用可。車輪付き歩行器は不可） |
| | 10 | 最小限の介助や監視下で少なくとも 45m歩ける |
| | 5 | 歩行不可能だが、自力で車いすを駆動し、少なくとも 45m進める |
| | 0 | 上記以外 |
| 階段昇降 | 10 | 1 階分の階段を介助や監視なしに安全に上り下りできる（手すりや杖の使用は可） |
| | 5 | 介助や監視を要する |
| | 0 | 上記以外 |
| 更衣 | 10 | すべての衣服（靴の紐結びやファスナーの上げ下ろしも含む）の着脱ができる（治療用の補装具の着脱も含む） |
| | 5 | 介助を要するが、少なくとも半分以上は自分で、標準的な時間内にできる |
| | 0 | 上記以外 |
| 排便コントロール | 10 | 随意的に排便でき、失敗することはない。座薬の使用や浣腸も自分でできる |
| | 5 | 時に失敗する。もしくは座薬の使用や浣腸は介助を要する |
| | 0 | 上記以外 |
| 排尿コントロール | 10 | 随意的に排尿できる。必要な場合は尿器も使える |
| | 5 | 時に失敗する。もしくは尿器の使用などに介助を要する |
| | 0 | 上記以外 |
| 合計 | | 点 |

問 22. IADL(Lowton & Brody)

| | | | 項目 | 得点 |
|---|--------|---|----------------------------------|----|
| A | 電話の使い方 | 1 | 自由に電話を掛けることができる | 1 |
| | | 2 | 幾つかの良く知っている番号であればかけることができる | 1 |
| | | 3 | 電話で対応できるが電話を掛けることはできない | 1 |
| | | 4 | 全く電話を使うことができない | 0 |
| B | 買い物 | 1 | 一人で買い物ができる | 1 |
| | | 2 | 少額の買い物であれば一人でできる | 0 |
| | | 3 | 誰かが付き添っていれば買い物ができる | 0 |
| | | 4 | 全く買い物ができない | 0 |
| C | 食事の支度 | 1 | 人数にあった支度をして必要十分な用意ができる | 1 |
| | | 2 | 材料が用意してあれば食事の支度ができる | 0 |
| | | 3 | 食事を作ることはできるが、人数にあった用意ができない | 0 |
| | | 4 | 他人に支度をしてもらう | 0 |
| D | 家事 | 1 | 力仕事など以外は一人で家事をすることができる | 1 |
| | | 2 | 食事の後の食器を洗ったり布団を敷くなどの簡単なことはできる | 1 |
| | | 3 | 簡単な家事はできるが、きちんとあるいは清潔に維持できない | 1 |
| | | 4 | 他人の助けがなければ家事をすることができない | 1 |
| | | 5 | 全く家事をすることができない | 0 |
| E | 洗濯 | 1 | 一人で洗濯できる | 1 |
| | | 2 | 靴下などの小さなものは洗濯できる | 1 |
| | | 3 | 他人に洗濯してもらう | 0 |
| F | 移動・外出 | 1 | 自動車を運転したり、電車・バスを利用して出かけることができる | 1 |
| | | 2 | タクシーを自分で頼んで出かけられるが、電車やバスは利用できない | 1 |
| | | 3 | 付き添いがあれば電車やバスを利用することができる | 1 |
| | | 4 | 付き添われてタクシーや自動車が出かけることができる | 1 |
| | | 5 | 全く出かけることができない | 0 |
| G | 服薬の管理 | 1 | きちんとできる | 1 |
| | | 2 | 前もって飲む薬が用意されていれば自分で服薬できる | 0 |
| | | 3 | 自分では全く服薬できない | 0 |
| H | 金銭の管理 | 1 | 自分でできる（家計費、家賃、請求書の支払い、銀行での用事など） | 1 |
| | | 2 | 日常の買い物は管理できるが、大きな買い物や銀行へは付き添いが必要 | 1 |
| | | 3 | 金銭を扱うことができない | 0 |

合計

点